Z32-B88

大正十二年二月六日印刷納本　大正十二年三月一日發行

金の星

第五卷　三月号　第三号

国立国会
8. 3. 26
図書館

坊ちやん、嬢ちやんと一番仲よしの松坂屋

お休の日にはゼヒお遊びにおいで下さい

◇玩具も、文房具も、運動用具も
◇素敵に格好のよい子供洋服も
◇面白い雑誌や爲になる御本等

澤山取揃へてございます

その上四階には特に皆様方の爲めに『兒童遊戯室』があつて自由に愉快に遊ばれます

松坂屋いとう呉服店

（東京・上野）

料飲强滋 いかいたあ

スピルカ

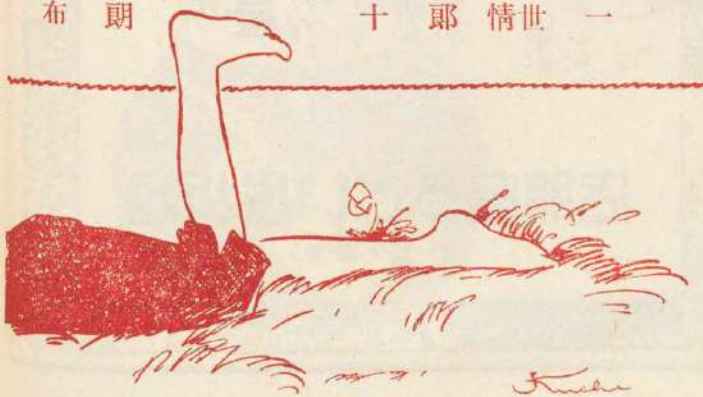
カルビスの成分

一、骨を太くするカルシウム
二、膀をさゝのへる藥
三、力を增すいろ〳〵のじやうぶん
四、つかれを回復するいろ〳〵のあまみ
五、心をなごやかにする味のオーケストラ

店頭・店品料食・店酒・所賣販
製造元株式會社トクラ京東・元造製

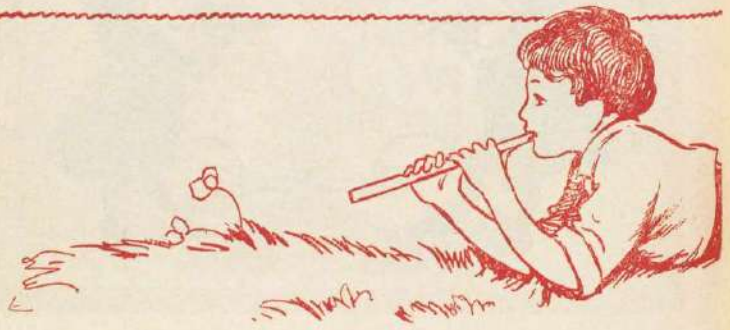
目次

さゝやき（表紙・原色版）……岡本歸一
栗鼠のお醫者（口繪・三色版）……本居長世
夢を見る人形（曲譜・童謡）……一……野口雨情
兎と龜（童話）……四……沖野岩三郎
西班牙の山賊（長篇童話）……三……西條八十
狐の裁判（長篇童話）……一九……小島政二郎
切符を食べた話（飛ばなし）……二六……岡本歸一
小雪と梅丸（傳說）……三……藤澤衛彦
香爐の行方（長篇童話）……三九……森川一朗
桃太郎ライオン狩（童話）……四六……水島爾保布



第五卷第參號

水滸傳（史譚）……五……宮島資夫
毛燒きの權兵衛（童話劇）……六……伊藤睦男
大泥棒（童話）……六……霜田史光
ひたきの鳥（童話）……七……若山牧水
桐の葉……大……野口雨情選
ヘイタイ……八……山木鼎選
雪……八……若山牧水選
かしこい子供……八……編輯部選
通信……八……
讀者だより……九……
（附錄）
長篇物語 鈍栗山（第二回）……沖野岩三郎
―チョンの話―
挿畫……岡本歸一 水島爾保布



栗鼠のお醫者（口語解説）

岡本歸一畫

『ばりく、ぼん！』と不思議な音を立てて龜の甲は裂けてしまふし、兎の前脚もむくくに腫れ上つてしまひました。

さア、大騒ぎになつて、山のお醫者樣の栗鼠を呼んで來て、手術を受けることになりました。

（兎と龜の一一頁を御覽下さい。）

お伽噺の泉

お伽手工畫噺

巖谷小波著
岡野榮畫

菊半截五册
五色刷畫入カナ綴
定價各六十錢
送料各六錢

これは表紙に、つけてある折紙が、活動していろ〳〵のことをする、オハナシがカタカナで畫と一所に書いてあります。幼稚園でおぼえた折物ですから、すぐおわかりになります。

オトギウタヱ

巖谷小波著
岡野榮畫

四六倍判三册
定價各八十錢
送料各八錢

小波先生が昔噺や今のお話をとり交せて面白く歌風に書かれそれに一々綺麗な挿畫が添てあります。お子樣方が御覽になるとキット心も踊ります、鬼ケ島から持て來た寶の卷物でも開く樣に

オハナシ

鹿島鳴秋著

四六倍判全五册
淸彩挿畫二十面
定價各一圓
送料各八錢

これは淸新な趣味と敎訓に最も富んだ童話を撰擇してたくさん書いてありまして、尋常小學二年生以上の御子樣方の讀物としては最もよい本であります

日本一の畫噺

巖谷小波著

四六半截三十五册
定價各二十五錢
送料各四錢

この本はカタカナ綴と、ひらがな綴とで、幼稚園から尋常一年生位のお子樣方が、見たり讀んだりする、たのしい本であります。

東京日本橋通
丸善株式會社
（振替東京五番）

名古屋市名古屋町（振替名古屋一〇二九番）
横濱市濱町（振替東京四七番）
福岡市上西町（振替福岡五千番）
仙臺市國分町（振替仙臺一五番）

東京市神田區河岸下（振替東京二八一六番）
大阪市東區博勞町（振替大阪四七番）
京都市三條通（振替大阪一七三番）

第十二版愈發賣

▽野口雨情先生新著

野口雨情民謠集 別後

▼嘗て新歸朝の原信子孃により帝劇に於て歌はれ熱狂的喝采を受けたり以て本書が如何に藝術的眞價あるかを知るべし▼

我が國詩歌の眞髓は民謠なり民謠は民衆藝術の精華にして又萬人渴仰の鄉土文藝なり斯壇の巨匠野口雨情氏が十餘三年間の哀吟苦作深く實人生に徹して得たるもの素朴純情の裡に哀艶限りなく悲々想恨一讀誰れか涙なしに卷を閉づる者あらんや

袖珍箱入表幀頗る美本上製全一冊
實價金九十錢 送料十錢

小曲集 西條八十先生 靜かなる眉
袖珍箱入天金頗る美本全一冊
實價九十錢 送料十錢

小曲集 水谷勝先生 寶石の夢
袖珍箱入天金頗る美本全一冊
實價九十錢 送料十錢

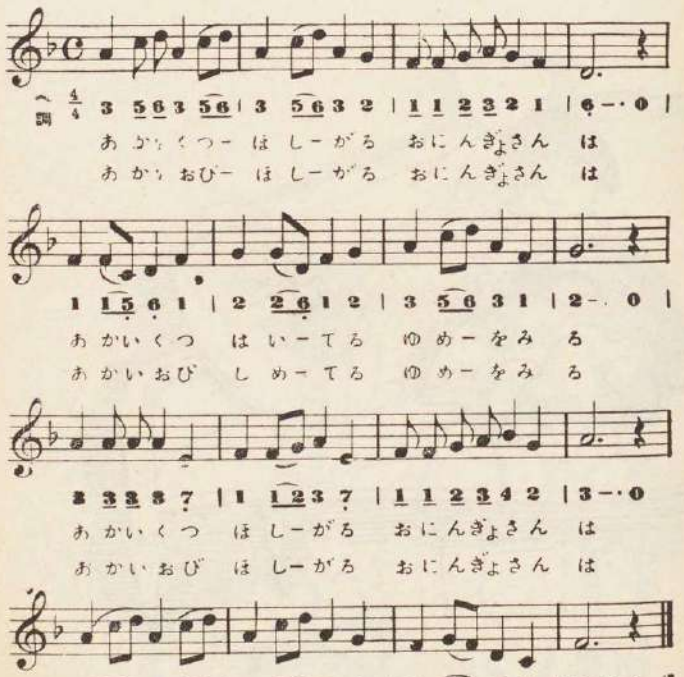
交蘭社發行
東京市神田區仲猿樂町
振替東京 四〇二七九

鶯印レコードの
名聲千里を走る

株式會社 日本蓄音器商會

夢を見る人形

本居長世作曲



天下の青年は何故に爭ふて

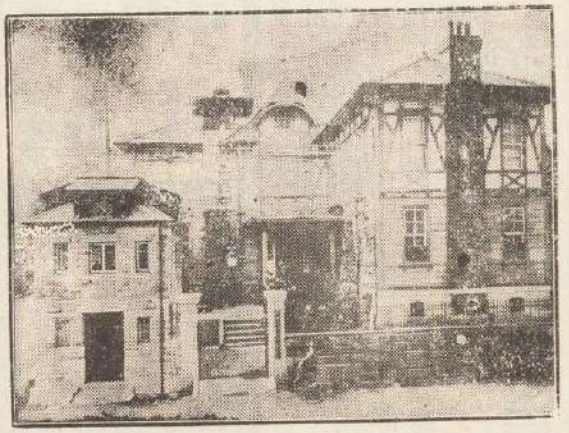
大日本國民中學會に入會する乎——

講義が新いから
會費が廉いから
指導が良いから
學制が正いから
基礎が固いから
講師が善いから
卒業が早いから
成功が慨だから

會長 尾崎行雄

學監 文學博士 遠藤隆吉
理學博士 山内繁雄

顧問 新渡戸博士 三宅博士 井上博士 浮田博士 岡田前文部大臣



一人前の男となるには

どうしても中等教育を受けなければいけない。中等教育の學力のない者はどうしても生存競爭の勝利者たることは六ケしい。併し家庭の事情で中學に入れぬ者も決して失望するには及ばない、中學校に行かずに中學卒業同樣の學問をする方法がチヤンと出來てゐる。それは創立以來二十一年の古い經驗のある講義錄で有名な大日本國民中學會の通信教授法である。

東京駿河臺（お茶の水電車通り）
大日本國民中學會
振替東京四二〇〇 電話神田三〇〇二 神田三〇〇三 神田三〇〇四

◎創立以來廿一年記念大特典提供
目下新學期開講入會の絶好機

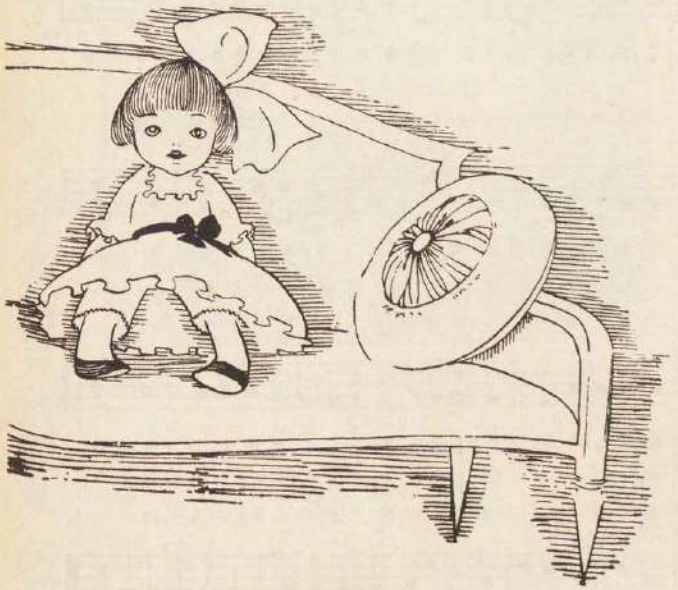
講義錄見本つき
規則書無料進呈

夢を見る人形

野口雨情

赤い靴　ほしがる
お人形さんは
赤い靴　はいてる
夢をみる

赤い靴　ほしがる
お人形さんは
夢で　赤い靴



はいてゐる

赤い帶　ほしがる
お人形さんは
赤い帶　しめてる
夢をみる

赤い帶　ほしがる
お人形さんは
夢で　赤い帶
しめてゐる

亀と兎

沖野岩三郎

高い山がありました。その山の上には廣い廣い野ッ原があつて、春になると紅や白や黄色の美しい花が一面に咲亂れました。

春の暖い日、神樣が多勢の使達と一緒にその野ッ原へ花を御覽にお出でになりました。

さア、今日は天から神樣がお降りになるのだと云つて、山にゐる鳥や獸は皆な御遠慮申上げて洞穴の中や　巖の蔭に隱れてゐました。

この野原に長らく棲んでゐる一足の兎がありました。その兎は踊りが大變上手でしたから、どうかして自分の踊りを神樣の御覽に入れたいものだと思つて、穴の中から首を出して、神樣のお出でを今か〳〵と待つてゐました。

暫くすると、天から美しい〳〵五色の雲が、ふわり〳〵と野ッ原近く降りて參りました。

兎は耳を立て、眼を硝子のやうに光らせながら、五色の雲を見てゐましたが、いつの間にか、雲は跡方もなく消えてしまつて、雪のやうな美しい〳〵光り輝く羽衣を纏つた天の使達が十二人、すらりと神樣の御前に並んでゐました。

『あア久し振りで下界へ降りて來た。使達、土の上で踊つて御覽！』

神樣は使達を見廻しながら、さう仰せになりました。

『はい、畏りました。』と言つて十二人の使達は美しい羽衣をひら〳〵風に飜へしながら舞ひました。けれども天の使達は土を踏む事が嫌でしたから、ずつと始から終まで、足を地上から二尺ばかり離して踊つてゐました。

それを御覽になつた神樣は、

『朕は今日、土の上の踊りを見たくて、この下界へ降りて來たのぢや。お前達には、土の上の踊りは出來ないだらうから、何でも宜い。この野にゐる獸に踊りを命けておくれ。』と申しました。

そこで天の使達の中の一人が、美しい黄金のラッパを口に當て、

『やよ〳〵、野の獸達、踊りの上手なものは、唯今こちらへ出てまゐれ。天の神樣は、土の上の踊りを御所望であるぞ。トトトツトトウ……』とラッパを鳴らしました。

そのラッパの音を聞くとすぐ、兎は穴の中から跳び出して行つて、いきなり長い耳を掘り立て、一生懸命に踊りました。

もう一時間も踊つた頃、神樣は、

『兎、こちらへ參れ！』と仰せられました。

兎は汗を拭き〳〵神樣の前に出て參りますと、神樣は、

『其方の踊りは本當に面白かつた。二本の後足を、しッかり土の上に踏みしめてゐる所が、朕の氣に入つた。何でも宜いから望みのものを褒美にあげよう。欲しいものを言つて御覽！』と仰せになりました。

兎は今までこの山で猿だの鹿だの猪だのに馬鹿にされてゐました。それが口惜しくて堪らなかつたもんですから、

『では、誠に恐れ入りますが、この廣い野ッ原を支配いたす權利を私にお與へ下さいませんでせうか。』と申しました。

『宜しい。では今日から、この野ッ原の支配權を其方に與へる。さ、使達、誰でも宜しいから、その事をこの山の鳥や獸達に知らせておやり！』

神樣の命令を聞いた一人の使は、白銀のラッパを口にあて、

『やよ〳〵、野山の鳥と獸達、能ッく承れ。今日からこの廣い野ッ原は、これなる兎の支配になつたのであるぞ。だから

この野原では兎の命令に從はなければならない。若し兎を輕蔑した時は、直ちに鳥は飛べなくなり、獸は歩けなくなるぞ。トトトット、トウー。』と申しました。

巖蔭に隱れてゐた獸達、木の枝に潜んでゐた小鳥達は、皆な顏を見合せて、小い聲で、

『兎の野郎、明日からは、途方もなく威張るだらうネ。』と囁き合つてゐました。

やがて神樣は使達と一緒に、五色の雲を天から招き下して それに乘つて、九重の雲深くお歸りになりました。

兎は嬉しくて嬉しくて堪りませんでしたから、巖の上に走り上つたり、木の切株の上から、宙返りをして草の上に跳び降りたり、獨りで踊り狂つてゐますと、向ふの大きな石の下から一疋の龜が這ひ出して來て、

『兎さん〳〵、お目出度うございます。今日から僕と仲よくして遊びませう。』と申しました。すると兎は俄かに威張つた恰好をして、

『こりやこりや、今日からは最う、僕はこの野原の王樣だぞ。その方達は僕の家來だぞ。』と申しました。

『違ひますよ。』と龜は申しました。

『馬鹿を言へ、たツた今、天の使の吹いたラツパの音を聞かなかつたか。』

『はい、聞きました。けれども、(やよ〳〵野山の鳥と獸達)』と仰しやいました。僕には關係がありませんから、僕は矢張り以前の通り君のお友達だよ。』

『どうして？』

『どうしてッて、僕は鳥でもなし、獸でも無いからサ。』

『では魚かい？』

『魚でもないよ。』

『蟲かい？』

『蟲でもないよ。僕は龜だ。萬年生きる龜だよ。』

『もう何年生きてゐる？』

『もう一千九百二十三年生きるんだ。ユダヤのベツレヘムといふ所で、エス樣のお生れになつた晩、僕も產れたんだ。だから君が何ほ鳥や獸の大將になつて威張つたつて、僕は君の祖父さんのその前の祖父さんの事からよくく知つてゐるんだよ。君のお父さんは獵夫に鐵砲で右の耳を射たれて、ひいひ

いひ泣いてゐたよ。君の祖父さんは鷹に尻尾を喙かれて十日も唸つて寢たんだよ。』

『おい〳〵龜さん、そんなに人の缺點ばかり云ふものぢやアありませんよ。』

『では僕をお友達にしてくれるかい？』

『さア、』と云つて考へてゐた兎は、ふッと善い事を考へついたといふ風に、

『それではかうしませう。明日の朝、君と僕と二人で、駈ッこをしよう。そして其競走に勝つたものが、偉いとしよう。』と云ひました。

『偉いだけでは困るよ。もし僕が勝つたらどうするんだい。』と龜は申しました。

『もし僕が負けたら、一回に就いて千遍づつ頭を下げて叩頭をしませう。そして君に王樣の位を讓らう。そのかはり君が負けたら、君の子も孫も、僕の家來になるんだよ。』

『それは面白い！』と龜は申しました。

兎と龜とは約束して別れましたが、兎は龜に負けッこが無いと信じてゐましたから、その晩安心して、ぐう〳〵寢てしまひました。

けれども龜は、どうかして兎に勝ちたいものだと思つて、一生懸命に考へましたが、どうしても善い智慧が出ないので森にゐる梟の所へ相談に行きました。すると梟は、

『それは何もない事だ。かうするのが宜い。』と云つて、龜の耳へ口を寄せて、謀略を敎へました。

さて、その翌日、兎は穴から出て來ますと、もう龜は野ッ原の石の上に坐つてゐました。

『龜さん、お早う。』

『兎の大王樣、お早うございます。』

龜はわざと叮嚀に叩頭を致しました。そして、

『王樣、この松の木の根の所を出發點と致しまして、あの向ふの杉の木の所を決勝點と致しませう。それから丁度眞中に樫の木がございませう。あの樫の木の右を王樣はお走り下さい。私は左を走りますから。』と申しました。

『よろしい！』と言つて、兎は駈け出す用意をしました。すると龜は申しました。

『王樣、二人で競走をしまして、もしあとで、僕が勝つたのだ、僕が早かつたのだ、と云ふやうな喧嘩が始まつて困りますから、誰かに審判官になつて貰ひませうではありませんか。』

『さうだ、それも宜からう。』と云つて兎は松の木の上を見ますと、其所には一羽の梟が大きな眼玉を、ぎろ〳〵させて下を見てゐました。

『おい梟、僕達の競走の審判をするんだよ。』

兎は王樣振つて申しました。

『畏りました。丁度私共兄弟三人が、この松と眞中の樫と向ふの杉とに宿つてゐますから、三人で審判官を致します。最も公平に致します。』

梟は枝の上から頭を下げながら申しました。

いよ〳〵兎と龜とは競走に取かゝりました。

梟が、大きな聲で、

『ワン、ツー、スリー、』

と云ひますと、兎は四本の足を揃へて駈け出しま

したが、一町ばかり走つて樫の木から二十間許り手前まで來ますと、枝の上から梟が

『兎さん、しッかり駈けなさい。もう龜さんは此所を通りましたよ。』と云ひました。

『まさか、』と思ひながら向ふを見ると、樫の木の下から五六間向ふを龜が、ごそごそと這つて居ます。

失敗つた！　と思つた兎は一生懸命に走つて杉の木の決勝點の近くまで行きますと、杉の枝に居た梟が、

『兎さん、早く來なければ、負けますよ。』と叫びました。

見ると、もう決勝點の一二尺ばかりの所を龜が走つてゐます。兎は死物狂ひになつて走りましたが、杉の木の下へ着いてみますと、龜は、ハァ〳〵と息をはづませてゐました。

『龜さんが勝ちました。』と梟は叫びました。

森の中で勝負を見てゐた狐や狸や猿や小鳥は皆な

『龜さん萬歳！』と叫びました。

『では、も一度やらう！』

兎は腹立たしさうに申しました。で、今度は杉の木の下を出發點として、ワン、ツー、スリーで駈け出しました。

所が眞中の樫の木の近くまで來ますと、

『兎さん、しつかり、龜さんはもう此所を通りましたよ。』と枝の梟は叫びました。

松の木の近くまで行くと、

『兎さん早く〳〵、龜さんはもう決勝點から三尺ばかりの所へ來ましたよ。』と申しました。

兎は汗をだく〳〵流しながら、決勝點へ駈け込みますと、もう龜は其所に、ちやんと入つて居ました。

兎は忌々しくて堪りませんから、も一度、も一度と言つて十回まで競走しましたが、十回とも負けてしまひました。

もう四つの足が折れてしまひさうに思はれたので、兎はたうとう降參して、約束の通り、一回について千遍づつ十回分一萬遍の叩頭をすることになりました。

『では、僕は、あの石の上に坐つてゐるから、君は石の下で一萬遍叩頭をなさい！』と龜は申しました。

致方がないから、兎はぺこ〳〵と頭を下げ始めました。梟は枝の上から一つ、二つ、三つと勘定し初めました。

龜は得意になつて、

『僕の親類はゐないか。野ッ原の王樣が、僕に叩頭をしてゐるのを見て置け。おい〳〵僕の親類はゐないか。ゐるなら早くこゝへお出で！』

と申しますと、樫の木の下から一疋の龜が、のこ〳〵と石の上に這つて來ました。杉の木の下からも一疋の龜がのそ〳〵と這つて來ました。そして三疋の龜は、得意さうになつて威張つてゐました。

森の中にゐた鳥や獸は、龜の勝つた理由が解つたと見え、一度に、わあーッと笑ひました。

その時、兎はまだ、やッと二千遍しか叩頭をしてゐませんでした。

殘りの八千遍兎が叩頭をしてゐる間に三疋の龜は可笑しくて可笑しくて堪らないから、腹を抱へて笑ひましたが、丁度兎が一萬遍叩頭をして、梟が、枝の上から、

『一萬遍……』といつた時、三疋の龜は一度にどうーッ！と笑ひましたので、脊の甲が、

『ばり〳〵、ぼん！』

と不思議な音を立てて、滅茶々々に裂けてしまひました。

兎もあんまり前足を衝いて叩頭をし過ぎたので、前脚がむく〳〵に腫れ上つてしまひました　眼の玉は、ぴよこんと飛び出してしまひました。

さァ大騒ぎになつて、山のお醫者樣の、栗鼠を呼んで來て、手術をして貰ひました。

栗鼠は三疋の龜の裂けた甲を叮嚀に糸で縫ひましたので、生命は拾つたが、龜の脊には、いつまでも、いつまでも、栗鼠の縫つた針の跡が殘つてゐました。

兎は前足を診察して貰ひましたが、兩足の爪の所から黴菌が入つてゐるから、少しく切り取らねばならないと云つて、栗鼠のお醫者さんは、兎の前足を二本ながら、二寸程切つて取りました。

それから眼の玉へも藥をつけましたが、結果が惡くて、それッきり眼球が動かなくなりました。

龜は大變後悔して、

『決してカンニングをやるものでは無い。』

と、吳々も申しました　兎も、

『他人を侮つたり、吾身の程を知らずに威張つたりするものでは無い。』

と申しました。

あんまり一生懸命にカンニングの競走を見てゐた審判官の梟は、どうしたものかそれッきり、晝日中は、ちッとも眼が見えなくなりました。（をはり）

西班牙の山賊

西條八十

三、大格闘

『諸君！　諸君も御承知の通り、僕は容易にものに驚かぬ男だ。ズーリック事件から、どんじまひのウォータールーの役まで、ナポレオン大帝麾下に千軍萬馬の間を駈けまはり、今鞣皮の嚢に入れてあの戸棚に藏つてある特別名譽勳章まで授けられた男だ。けれどもこの時の坊主の不意討にはまつたく膽を奪はれたよ。いや膽を奪はれたばかりぢやない。また錐を突込まれた片眼がたまられく痛んだばかりぢやない。何とも知れない、ちやうどゲジ〳〵かなんぞを襟もとへ入れられたやうな、ゾッとする薄氣味わるい感じが、その時身體中を走つたよ。

僕は夢中でその坊主を兩手で引つかまへ、馬車の床へ擲きつけた。そしてそのうへを重い長靴でグングン踏みつけた。さうすると奴、法衣の下からピストルを出しかけたから、僕はすばやくその手もとを蹴りつけた。さうしてもう一べん奴のうへに馬乘りになつた。すると、この時、奴、はじめてしめ殺されるやうな悲鳴をあげた。

僕は半盲のていらくで、自分の帶劍を手さぐりして廻つた。坊主の奴、知らない間にコッソリ腰掛の下に匿して置いたのだつた。やつと劍に探り當つたので、僕は一太刀浴びせてやらうと、ダラダラ流れる顏の血を手の甲でおし拭つて、坊主の在處を見さだめにかかつた。と、その途端に馬車は一搖れしてガックリ横ざまに仆れかけた。そのはずみに、せつかく拾つた帶劍もまた何處かへすつ飛んでしまひ、自分までころころ馬車の中を轉がつた。

僕が慌てて起き上らうとする間もあらせず、馬車の扉がたき開けられ、太い手が二三本ニュッと入つて僕の襟を引つつかみ、ズル〳〵と往來へ引ずりだした。

砂礫の上へ轉がされながら、僕ははじめて三十人ほどの惡漢がぐるりと自分をとり捲いてゐるのに氣がついた。氣がついて僕はひどくうれしかつた。と云ふのは、その時僕の長い外套の端が片方の眼のうへにかぶさつてゐたのにもかかはらず、潰されたと想つた片々の眼で、惡漢たちの姿がはつきり見えたからだつた。

まあこの眼の傷を見てくれたまへ。ほそい錐のさきに眼窩と眼球との間の際どいところを掠つたのだつた。僕はもちろん片眼は潰されたと想つてゐた。それがさうで無いことを馬車から引き出されて僕ははじめて知つたのだつた。

坊主の豫算では、錐を眼から腦天へと突通すつもりだつたらしい。それが運よく急處を外れたのだが、それでも僕の腦の內骨の一部分はこのためにかなり傷められたらしく、その後、僕は身體にうけた前後十七箇所の手傷の中で、この傷のためにいちばん惱んだものだつた。

山賊どもは僕を往來へ引ずり出してから、口々に勝手な惡

口をならべて、打つやら蹴るやら散々な目に逢はせた。が、しばらくして僕が顔を血だらけにしたなり、チッと靜かにしてゐるのに氣がつくと、これは氣絶したにちがひないと考へた。その實、僕はソッと薄目をあいて、後日首斬臺にのせてやる時の參考のため、惡體な奴等の顏を一々見おぼえて置かうとしてゐたのだつた。

奴らはいづれも筋骨逞ましい惡漢どもで、頭に黃ろいハンケチをまきつけ、武器を吊つた太い眞赤な革帶を締めてゐた。この連中が峠の路の急な曲り角にわざと二つほど大きな岩をころがして置いたのだつた。それがぶつかつて、さてこそ馬車の片輪が外れたわけであつた。

うまく坊主に化けて、さもそことしやかに生れの村の話や老つた母親の話をしたこの間牒は、もちろん待伏の在ゐるのを承知の上、その時までに僕を手向ひ出來ぬ身體にして置かうとのもくろみだつたのだ。

山賊どもがその僞坊主を馬車から引つぱり出し、その半死半生なていらくを見たとき、奴らがどれほど狂氣のやうに怒りたつたか、想像に任せよう。

僞坊主の奴、よしまだ十分の罰は受けなかつたかも知れないが、とにかくヂエラール中尉とめぐり逢つた記念だけはまさしく頂戴してゐた。と云ふのは、その身體の上半分だけは怒と痛みとでビクビク痙攣してゐたが、兩足はブラブラになつてしまひ、仲間の山賊たちが寄つてたかつて引立てようとしても、直ぐに骨無しのやうにベッタリ地面に坐つてしまつたからであつた。だがその間にも、最前馬車の中でひどく柔和さうに見えた奴の二つの小さい黑い眼だけは、まるで傷を負つた猫のやうにもの凄く僕を睨めつけてゐた。さうして二度も三度も僕の方に唾を吐きかけた。

やがて惡漢どもは僕を無理に引起して、

『さ、しつかりして歩け！』

と、どなつた。さうして細い山路を引立てるのだつた。

『いよいよ奴らの巢へ伴れて行かれるのだな。』と、僕は觀念の眼をとぢた。獻の坊主はと見ると、二人の仲間に擔はれて後からついてくる。奴がしきりと僕の惡口を並べてゐる聲がくねつた山路を息せはしくのぼる僕の右と左の耳に聞えた。

四、山賊の窟

およそ一時間も登つたらうか。その間眼の傷は刺すやうに痛む。それにつれて癒りきらない踝がヅキヅキしだす。おまけに左右には鋼色をした山賊が並んで、邪魔に引立てる。

さうして喉のところにはドキドキした匕首が絕えず脅かしにおし當てられてゐるのだ。さすがの僕も今までにあんな不愉快な旅はめつたにしたことが無い。

そのうちに僕等は山の背のやうなところへ出た。路はそこからまた深い松林をぬけて南向きの谿間へと下つて行くのだつた。平和の時代にはこの惡漢どもは密輸人者だつたに違ひない、さうしてこの路はかれらが西班牙から葡萄牙へぬける間道だつたに違ひない、と僕は考へた。見るとそこらには騾馬の足あとが無數にあつた。いや、そればかりぢやない、僕がびつくりしたのは谷川のふちの軟らかい土の上に大きな馬の足跡があつた事だつた。

けれどもその謂れは直きに、僕らが椶の樹を伐り拓いたとある廣場へ出ると判つた。そこには當の馬が、一本の仆れた樹の根方に繫

がれてゐたからで……。ところで僕の眼がその馬に觸れるやいなや、僕はその馬の脚の毛色で直ぐに想ひだした。それはつい今朝がた僕が村の宿屋の前で見かけた馬である。さう思うと、僕はハッと吐胸をつかれた。

『ではあのヴィダル少尉はどうしたらう？　或は少尉も自分とおなじ運命に陥ちてゐるのではあるまいか？』

さうした考へが僕の頭にひらめいたとたん、僕らの一隊はピタリと立ちどまつた。さうして中の一人が奇妙な聲で何やら高く叫んだ。

すると廣場の一方の崖の下にぢつと連いてゐる茨の繁みの中で『おう』と應へた者があつた。さうしてパラパラと十二三人の男がそこから立ち現れた。

二組の山賊どもは、互に挨拶をとりかはしたが、出て來た連中は、直ぐに、擔ぼれた例の僞坊主のまはりへ集つた。さうして、いろいろと訊きたゞす樣子だつたが、事の仔細がわかると、一齊に僕の方をふり向いて、或者はナイフをふりまはし、或者はおそろしい聲で、獸のやうに吼えた。

奴らの荒々しい樣子を見て、僕はいよいよ自分の最期のときが來たと思つた。さうして、どうせ殺されるものなら、今までの經歴に恥ぢないやうな武士らしい立派な死にかたをしてやらうと心の中で覺悟をきめた。

するとそのうちに、中の一人が何やら命令を下すと、惡漢どもはまたぞろ寄つて集つて僕を引立てた。何處へかと見ると、奴等の出て來た茨の中へとつれて行くのだ。

茨の間のせまい小徑を傳づて行くと、やがて眼の前に大きな窟があらはれた。

日はもう山かげに沈んでしまつたので、窟の中は眞暗だつた。

それでも、兩側の壁の凹みに大きな炬火が燃えてゐるので、おぼろげに、大體の樣子はわかつた。

奥まつたところに粗末のテイブルを据ゑて、その前にひとりの異樣な人物が腰かけてゐた。

ほかの山賊どもの口ぶりから察して、これがこの山塞の首領で西班牙に名のひびいた、エル・クチロといふ男だといふことが、僕には直ぐわかつた。

僞坊主もやはり僕のあとから擔ぎ込まれて、そこにあつた樽のうへに据ゑられた。奴はそこでブチ折られた二本の足をブランとさせながら、相變らず僕を睨みつけてゐた。

僞坊主とエル・クチロとの會話のきれぎれから察して僕はこの坊主が山賊どもの副首領であることを知つた。

かれはうまれつきの巧い辯口と、いかにも柔和さうなその風采とを利用して、僕のやうな旅人を山塞へ誘きよせる役目をつとめてゐるのだつた。

此奴のために、今日まで何人の人が、非業の最後を遂げたか知れない　と思ふと、不具にしてやつて、結局功德を施した

やうな氣がした。

もつともそれがために、ナポレオン大帝にとつても、またわが軍にとつても、掛替の無いこの生命を失ふかと思ひ返せば、いささか殘念のやうな氣もするのだつた。

僞坊主は二人の仲間に支へられて櫃の上に腰かけながら、スペイン語で事件の一伍一什を首領に說明してゐた。その間僕は數人の惡漢連によつて首領のゐるテイブルの前に引據ゑられてゐた。それでとつくり首領の人相骨柄を觀察することが出來た。

何が似てゐないつて、この男ぐらゐ山賊の親方でゐて山賊らしくない人間を見たことが無い。

西班牙中に泣く兒も默るといふ恐ろしい名を轟ろかせてゐるエル・クチロは色白の、いやにノッペリした、さうしてもみあげの下からすつと綺麗な顎髯を生してゐる、ちよつと役者の出來そこない見たいな優男だ。かれは手下の山賊どものやうな眞赤な革帶も締めてなけりや、またギラギラする兜器も持つてゐない。

それどころか、牧師さんソックリのフロックコートを着てござる。これで茶色の脚袢さへ穿いてゐなけりや、誰も山住ひの人間だなどと見る者はあるまい。

それにかれの身のまはりの品物までが、いかにもかれの身なりに調和してゐる。

テイブルの上には嗅煙草の箱が置いてあり、その傍には、一寸商賣の原簿とでも云つたやうな厚い褐色の書物が置いてある。

そのほかたくさんの書物が、二つの火藥櫃にかけわたした板のうへに並んでをり、おまけにそこら中、詩の文句をかきつけたやうな紙がちらばつてゐるのだ。

僕は、エル・クチロが悠然と椅子に腰うちかけ、僞坊主の話に聽き入つてゐる間に以上の事を觀察したのだ。そのうちに僞坊主から委細の話を聽き終ると、エル・クチロは大きくうなづいて、部下の者に命じ、もう一べん僞坊主の副首領を戸外へ擔ひ出させた。

ここで僕は、三人の番卒とともに、エル・クチロの面前に取殘されて、いよいよ最後の審判を待つことになつた。

（つゞく）

狐の裁判（つゞき）

小島政二郎

ライネッケ狐のためにひどい目に逢はされた熊のブラウンは、泣き〳〵王さまの御殿まで歸つて來ました。さうしてあつたことどもを話して、ライネッケを訴へました。大勢のものはおこつて唸りました。王さまのノベルも、鬣を逆立ててどなりました。

『けしからん奴はライネッケだ。誰でもいゝ、早く行つてあいつを引つ張つて來い』

そこで誰をやつたものかと相談をした鼎句、今度はおとなしいものがよからうと云ふので、猫のミニョンをやることに極まりました。

ミニョンは、相手がずるいライネッケなので、このお使ひをあまり喜びませんでした。しかし、王さまの云ひつけなので、仕方なしにライネッケの住んでゐるメバタキス山へ向つて出かけました。

行くと、丁度洞穴にライネッケが寢そべつてゐました。ミニョンの姿を見ると

「やあ、ミニョンさん、よく來たね」と、愛想よく迎へました。

「あのね、ライネッケさん。實は私は王さまのお使ひでやつて來たんですがね、王さまがあなたに用があるから私と一しよに來いと仰やるんですよ」と、ミニョンはすぐ

王さまの命令を傳へました。

すると、ライネッケは

『あ、さう。それはお使ひ御苦勞さま。外ならぬあなたのお迎へだ。これからすぐ行きたいのだが、今どうしても手放せない用があつて今日は行けない。その代り、明日のお午までには間違ひなくうかゞふ。明日一つ迎へに來て下さいな』

『間違ひありますまいね。明日はたしかに來てくれますね。ぢやァ、大王さまにさう申し上げておきますから……』

かう云つてミニョンが歸らうとすると、

『ミニョンさん。こんなに遠くまで來たんだ。お腹が減つたでせう。一つ何かおやつを食べていらつしやい』と、呼びとめました。

さう云はれて見ると、お腹が減つてゐないことうありませんでした。で、つい

『ぢやァ一ッ御馳走になりませうか』と、またそこへ腰をおろしました。

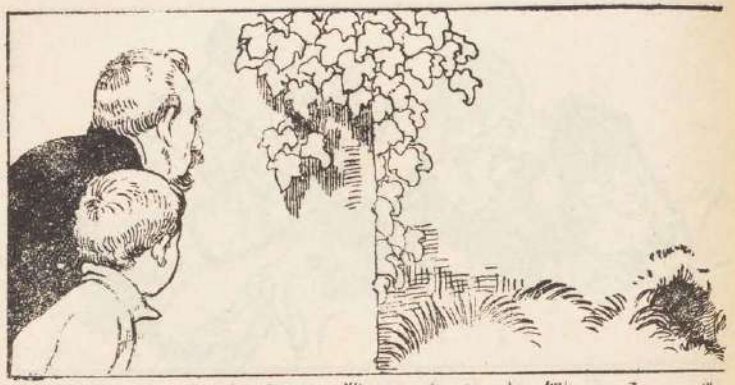
すると、ライネッケは

『何がよござんすね。なんでもお望みのものを差し上げたいと思ひますが……』

『ぢやァ一つ二十日鼠を御馳走していたゞきませうか』

『二十日鼠、そりやァお安い御用だ。牧師さんとこの納屋にウジャ〳〵ゐますよ。これからすぐ御案内しませう』

かう云つて早くも立ち上りました。ミニョンも口に一ぱい唾を溜めながら、ライネ



ッケのあとについて山をくだつて行きました。

『ミニョンさん、牧師さんの納屋といふのはこれですよ。ほら、ごらんなさい。あすこの隅に穴があいてゐるでせう……』

なるほど、狐がやつとはひれる位の穴があいてゐました。なぜそれをライネッケが知つてゐるかと云ふと、それは、教會のお庭で遊んでゐる鷄をとらへようと思つて、たびたびこの穴から出はひりしたことがあるからでした。ライネッケの知つてゐるのはそれだけではありませんでした。自分が鷄を盜んで食べてから、牧師さんの坊ちやんが、その穴の向うに罠を張つてゐることをもちやんと知つてゐました。

『ミニョンさん、あの穴の向うへ出ると、あなたの好物の二十日鼠がウヨ〳〵大勢で遊んでゐますよ。どれでもお好み勝手に食べて入らつしやい』

こんないゝ加減なことを云つて勸めました。しかし、用心深いミニョンは、なんだかこはくつて、すぐその穴へはひらうといふ氣にはなれませんでした。しかし、ライネッケがやい〳〵云つて勸めるので、なんと云つても二十日鼠が食べたくつて食べたくつてたまらない矢先だつたので、しまひに、ついフラ〳〵とその穴へ首を突ッ込みました。そのとたんに、うしろからライネッケが押したからたまりません。ぐッと罠にかゝつてしまひました。

痛いので、思はずミニョンは泣き聲を立てました。すると、ライネッケはわざと知らぬふりをくれて

『ミニョンさん、もうつかまへたんですか。早いですね。あれ〳〵、そんなに喜んで啼いては、人に聞かれますよ。え？　その啼き聲は、王さまの御殿でお喜びのあつた時啼く聲ですッて。なるほどね、いゝ聲ですな』

こんな勝手放題な憎い口を利いて、可哀さうなミニョンをさん〴〵からかつてゐましたが、ふと人の足音を聞きつけるが早いか、こそ〳〵どこへか姿をかくしてしまひました。足音はだん〳〵近くなつて來ました。やがて現れたのは、牧師さんと坊ちやんとでした。坊ちやんは太い棍棒を持つてゐました。

棍棒を見ると、ミニョンは恐ろしさに顫へあがりました。恐ろしい一心で、力一ぱいにピョーンと飛びあがりました。坊ちやんの顔に嚙みつくと同時に、兩方の前足で引ッ搔きました。坊ちやんはふいに猫に嚙みつかれ、引ッ搔かれたので、キャッと呼んだまゝその場へ氣絶をしてしまひました。その暇に、ミニョンは一生懸命に畏を嚙み切つて、やつとの思ひで逃げ出しました。さうして跛をひき〳〵、ノベル大王の御殿まで歸つて來ました。

今度こそミニョンがライネッケを連れて來るだらうと心待ちに待つてゐた大王をはじめ大勢の獸たちは、ミニョンがたつた一人で、しかも方々から血を流しながら、跛をひき〳〵歸つて來たのを見た時には、呆れ返つて暫くは物も云へませんでした。

ノベル大王はます〳〵、牙を嚙み尾を振つておこるし、大勢の獸たちは、みんな揃つてこれからすぐにもライネッケ退治に出かけさうな勢ひを示しました。それを見た

例の穴熊のグリンバートは、『こりやアこのまゝに捨てゝおいたら、ライネッケ叔父さんの一大事だ。ライネッケを大王の前へ連れて來る使ひは自分が引き受けて、叔父さんによく注意をしてやらなければならない』さう考へたグリンバートは、つか〳〵とノベル大王の御前へ出て

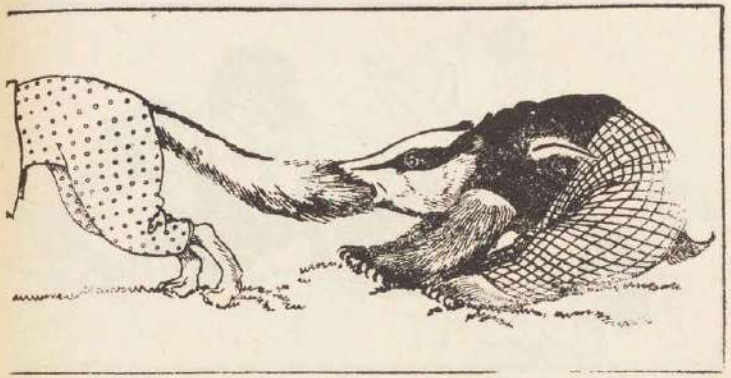
『申し上げます。ライネッケがいたしましたことは惡いには違ひございません。しかし、私に云はせますれば、ブラウン君にしても、ミニョンさんにしても、あまりガツガツ物を食べたがつたから、そんな目に逢つたのだと思ひます。云はゞ、自分が惡いのだと思ひます。つきましては、ライネッケをこゝへ連れてまゐります役目は、どうぞ私にお命じ下さい。必ず引きつれてまゐつて御覽に入れます』と、半分は叔父をかばつてかう云ひました。すると、ノベル大王は

『よし、その方にその役目を云ひつける』と、まだブリ〳〵しながらお命じになりました。

『よう。グリンバートか。ハハハハ……。面白かつた〳〵。なあ、グリンバート、今な、猫のミニョシがやつて來てな、ハハハハ……』

グリンバートの姿を見るが否や、ライネッケはかう云つて、をかしくつて〳〵たまらないと云つた調子で、ミニョンの話をはじめました。

『叔父さん、そんな暢氣なことを云つてゐる時ではありませんよ』とグリンバートは苦い顏付をしながら、大王の御殿での大さわぎの模樣を詳しく話して聞かせました。



『なんと云つたつて、王さまゞお使ひに來たものをいぢめると云ふのは、あなたが悪いに違ひありません。大王さまは非常なお腹立ちです。で、とにかく私と一しよに御殿へ入らつしやい。いやだと云つてどうしても來なければ、すぐにも森ちゆうの獣が押し寄せて來て、あなたばかりでなく、家族のものまで皆殺しの目にあひますよ。そんな目に逢ふよりも、御前へ出た方が得ぢやァありませんか。大王さまはきついお腹立ちですから、御前へ出れば、どんな目に逢ふかそれは分りません。しかし、そこはまたどうにでも許してもらふ工夫もあらうと思ひます。とにかく私と一しよに入らつしやい』

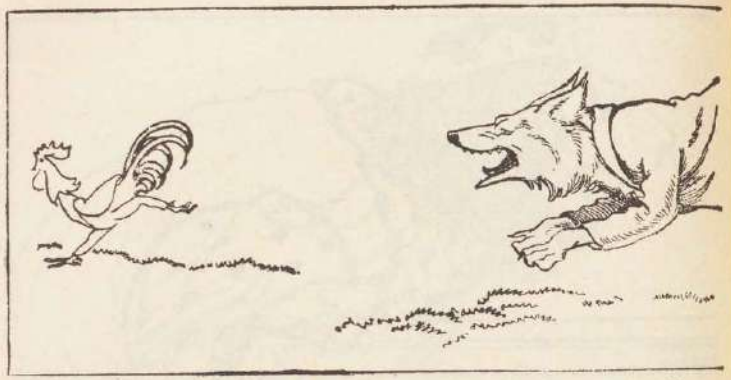
『そんなにノベル王は腹を立てゝゐるのかい。おれはちつとも知らなかつた。そりゃア大變だ。お前よく知らせに來てくれた』

殺されると聞いて、急にライネッケはおとなしくなりました。で、グリンバートに連れられて、素直に山をくだることになりました。道々も、

『あゝおれが悪かつた。今更後悔しても追ッつかない』などと云つてゐました。

『おれは數限りのない罪を犯してゐる。それを懺悔して、早く神さまからお許しがいたゞきたい。あゝ、おれはもう一刻も我慢ができない。グリンバート、どうかお前神さまに代つて、おれの懺悔を聞いてはくれまいか』

しまひにはかう云つて、いかにも信心深さうな句調で、これまでにして來たいろんな悪作を殘らず懺悔しました。中には、例のイセグリム（狼）を教會の鐘の綱に結



ひつけた時のことなどもありました。イセグリムがどうかして綱から逃れようとする度に、綱が引かれるので、ジャン〳〵ジャン〳〵鐘が鳴るものですから、牧師さん達が大勢出て來て、さん〴〵棒をふるつてイセグリ　を殴り据ゑました。その外にも、イセグリムを坊さんの家の窓から忍び込ませて、大事にしまつてあるハムや鹽肉を盗ませた時のことなどもありました。その時などは、幅の狹い梁をわたつて行かなければならないので、イセグリムがこは〳〵少しづつ歩いてゐるのがまだるッこいと云つて、ライネッケがうしろから力まかせに押しました。はつと思ふ間にイセグリムは足み踏みすべらして、下に寢てゐる人間の上へドサリと落ちました。その時も、イセグリムはさん〴〵な目にあひました。――かう云つたやうなことを、いくつも〳〵ライネッケは懺悔しました。聞きをはつたグリンバートは

『叔父さん、よくそれだけ懺悔してくれました。その心をいつまでも持ちつゞけて下さい。さうしてこれからは、罪滅しのつもりで、いゝ行ひをして下さい。朝と夕方とには讃美歌を歌ふことを忘れないで下さい。日曜毎に必ず教會へ出席なさい。時々は斷食もなさい。人に道を聞かれたら丁寧に教へておあげなさい。貧しいものには喜んで恵んでおやんなさい。物を盗んだり、仲間をだましたりしてはいけません。さう云つた悪ひ行ひは一切しないと神さまに誓つて下さい』

『うん、誓ふとも。――おゝ、神さま、私は誓ひます。今日かも心を入れかへて、決して悪いことをいたしません』

『では、その證據に、このトネリコの木の枝を三度飛び越えなさい』

云はれるまゝにライネツケは、グリンバートが地面に置いたトネリコの木の枝を、三度あつちへ飛んだり、こつちへ飛んだりしました。

『えゝ、よろしい。では、神さまの思召にはいつでも從ふといふしるしに、今度はそのトネリコの枝にキスをなさい』

この云ひつけにもライネツケは背向かずに、うや〳〵しくキスをしました。

『さあ、これで神さまも、あなたの數へ切れないほど澤山ある罪をみんな許して下さつたに違ひありません。このやうにあなたが悔い改めたことをお知りになつたら、ノベル大王もきつとあなたの罪をお許しになるでせう』

かう云つて、グリンバートはライネツケを慰めました。グリンバートはどうかして叔父さんの命を救はうと思つて一生懸命なのでした。かうしてライネツケが神さまに誓つたといふことを申し立てゝ、ノベル大王の怒りを解き、叔父の命乞ひをするつもりなのでした。

しかし、諸君、決してライネツケの誓ひをお信じになつてはいけません。と云ふのは、かうして二人がノベル大王の御殿へ向つて道を急いでゐる途中、或大きなお屋敷の裏を通りかゝりました。見ると、まる〳〵と肥え太つた鷄が、ココココ〳〵云ひながら餌をあさつてゐました。一目見たライネツケは、今までのしほらしい樣子などは振り捨てゝ、やにはに鷄へ飛びかゝりました。驚いて逃げる鷄のうしろから、

夢中になつて追ひまはしました。

『叔父さん、それぢやア約束が違ひます。叔父さん、神さまに誓つた言葉を忘れたのですか』かう云つてしきりに留めるグリンバートの言葉に、初めて氣がついて立ちどまりました。しかしその場合にだつてきまりの悪さうな顔一つしはしませんでした。

間もなく、二人は御殿へ着きました。ライネツケはすぐとノベル大王の御前へ呼び出されました。

『これは〳〵大王さま、いつも〳〵御機嫌のよいお顏を拜見いたしまして、この上の喜びはございません。わたくしに何か御用との仰せをうけたまはりまして、忠義を一ぱん大切と心得まするわたくしは、外の用事をうち捨てゝ、急いでお目通りへ出ましてございます』

ライネツケは、黄い猫撫聲を出してこんな出鱈目を云ひながら、そこへヒレ伏しました。

しかし、前々からのことが積り積つてひどく腹を立てゝゐるノベル大王は、そんなことではごまかされませんでした。

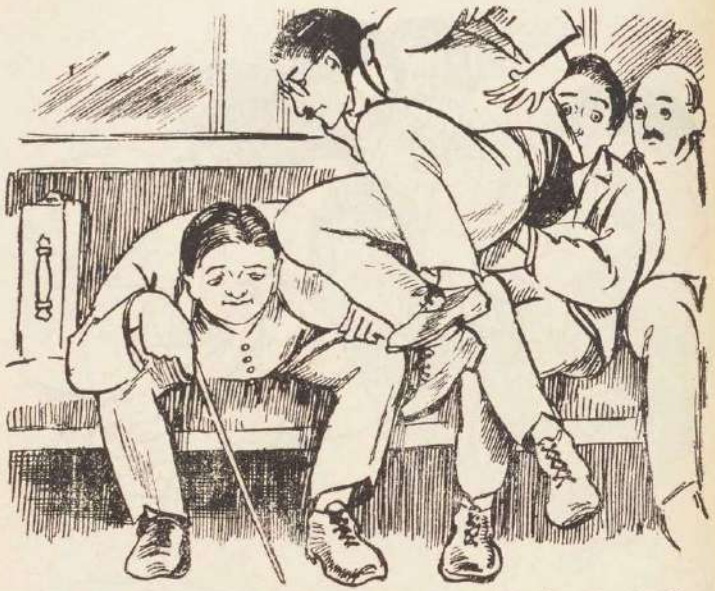
『だまれ、ライネツケ。その方の罪は一々の訴へによつて朕には悉く分つてゐるぞ。しかし、今は咎めぬ。それよりもまづ尋ねたいのは、なぜ「來い」と申しつかはしたのにすぐまゐらなかつた。そればかりか朕の使ひを二人までよくも〳〵ひどい目に逢はせをつたな』と口髭をピンと立て、眼をギラ〳〵光らせて睨みつけました。（つゞく）

切符を食べた話

岡本歸一

二月號の通信で『盗まれた狸』より、もつと面白い釜居君のお話をする約束をいたしました。ところが釜居君はどうしても、この話を僕の事ではないと云ひ張りますから、假に林君といふ名にしておきます。

ある時その林君が、何かの用で神戸まで行く汽車の中での事です。一人の乘客がお金入をスリにすりとられましたが切符もその中へ入れておいたので大變困つてゐました。ところが林君もやつぱり紙入れの中へ切符を入れてあつたので、二の舞をやつては大變と、紙入れから切符を出して別の所へ入れておかうと思ましたが、さて何所へ入れたものか氣にし始めると、何所も安心な所がないので、さん〳〵考へた末に出發する時友達が汽車の中で喰べ給へといつてくれた名物の鹽せんべいの袋の中へ切符を同居させました。そしてまさかこんな袋の中に切符を入れてあらうとは誰れだつて氣がつくまい、とすつかり安心しました。



その間何を考へついたのか、しきりにスチツキを持ち上げては見當をつけ落して見たり、考へたりしてゐましたが、しまひには例の凝性のくせが出て、今度は立ち上つて自分の立つてゐる所の床へ線を引いては跳び上つたり、又首をひねつたり、考へ込んでゐかと思ふと跳び上つたり、たうとう夢中になつてしまひました。

一緒に乘つてゐた人達は、變な男が變な事をやり出したので氣が狂つてゐるとでも思つたでせう。隣にゐた人が耐らなくなつて『あなた、どうかしたんですか』と尋ねると、林君は大眞面目で『えゝ、どうも不思議な事を發見したんです。何がつてあなた、此汽車はえらひ勢で走つてゐますね。その汽車にのつてゐるから、汽車と一緒に動いて行くのでせう。そこでよこざんすか、今私の立つてゐる足の所へしるしをつけておいて、私が跳び上ると、その跳び上つてゐる間だけ私は汽車にのつてゐない譯でせう。身體がちうに浮いてゐるんですから。しかし汽車は、私が跳び上つてゐる間も走つてゐるのですから、私がこんど足がつく所は、前のしるした所よりも後へ下つてゐなければならない譯でせう。

林君からその譯を聞いた隣の人は『成程それはさうです。どれ位ゐちがひますか。』と尋ねました。

『ところが實際は何度やつても同さ所へ下りるんです。だから不思議でたまらないのですよ。』と林君が答へますと隣の人は『ぢや、もう一度やつて御覽なさい。私が見てゐますから』と云ひました。林君は猫夢中になつてやり出したのです。たうとうキじるしが二人になりました。

しかし、何度やつても元の所へ下りるので、二人とも終ひには跳び上る事だけは止めましたが、今の騷で林君大分お腹が空いたので、鹽せんべいを思ひ出して隣の人と二人でほりほりやり乍ら、また諦められないで理窟が合つて實際はさうならないといふ法はないと二人で云つてゐると、おせんべいが變にボール紙臭いので何の氣もなしに吐き出して、おせんべいの裏を見ると切符がくついてゐます。これは大變と驚いても、もう間に合ひません。切符は半分程になつてしまひました。用心に用心したためにとんだ事になつてしまひました。汽車中の人には笑はれるし、車掌さんには叱られるし、大恥をかきました。

車掌さんに詫をして、もう一度切符を買ふ事は断つたのですが、それからすつかり消氣てしまひました。その中に夜も更けたので皆寢てしまひました。

例の隣の人も、空氣枕をふくらまして、氣持ちさうに寢てゐるので、林君も急に眠氣が出て來て自分も隣の人のやうに空氣枕を一杯にふくらませて寢て見ようしたが、餘りふくらみ過ぎて、どうも頭がぐらぐらしてはづれさうでねられませんから、少し空氣を出さうと寢たまゝ手を延して、栓を探して少し捻つて見ましたが、少しも中の空氣がへつて行かないので今度はぐつと一杯に栓を開けました。すう——と空氣の出て行く音がしますが、枕は一向凹みませんので、これは變だ、今日は變な事ばかりだと、枕をしらべようとひよいと横向くと、隣の人がすうつとへつこんで行くので、おやッと思つて見ると、自分のだと思つてゐたのが隣の人の枕の栓だつたのです。隣の人は目をさまして變な顔して枕をしらべてゐるので、林君が『どうも、すみません』とあやまると隣の人はすつかり腹を立てゝ『どうも君は變な人ですね、まるで氣狂ひだ。いたづらするにも程がある』とさんぐ叱られました。

小雪と梅丸

（附　說）

藤澤衞彥

一

『それではお大事にな。』

『行つてらつしえゝ、孃さま。』

『道中ご無事で。』

『はい、ありがと、みんなもおたつしやでね。』

別れの挨拶をすますと、小雪は、思はず涙ぐむのでありました。

『せめて……庵の梅の二度咲く時までには、きつと歸つてらつしえゝよ。孃さま。』

『えゝ。』と、思はず見下す麓の梅林の蕾は、まだまだ堅いのに、よそより早いこの國の雪は、梅林の其處此處に、二三日前の薄雪を、そのまゝ斑らに殘してゐるのでありました。

『丹波雪國つもらぬ前に、旅にお出でるなら、お出でたがよい。』と、親切さうな召使頭のすゝめに動されて、自分から旅に出ようと、小雪は決心したのでした。それを傳へ聞いた村の人達は、

『それはなんねえ。長者樣の一粒種を、もしもの事があつたらどうしなさる。』

『わけて此頃は、人買ひの惡漢が諸國を立廻るといふ噂さ、あぶないで、よしたがよかろ。』

いろ〳〵に言うて止める言葉ら、小雪の決心をひるがへさせることは出來ませんでした。十一歳の時にお父樣はなくなられ、去年の春にまたお母樣に先立たれてから、小雪は、どうかして其御遺言どほり、一日も早く伯父樣にお逢ひして、行く先々の御相談がしたいと思ひました。

風の便りに、叔父樣は播磨國の書寫山といふお寺にをられ

叔母樣や從弟の梅丸も、そのあたりに住居してゐることを知りましたので、もう、情ある村人達の諫めも耳に入らず、今日、强ひて、そこを訪れの旅に上るのでありました。

その時、小雪は、やつと十三の少女でしたが、旅を、それほど恐ろしいものとは思ひませんでした。まだ世間といふものを知らない小雪は、行き先々の道中に、どのやうな危險があるか、どんな不運が旅人の自分を待ちうけてゐるかなどいふことは、ちつとも知つてはをりませんでした。それで、麓の梅林を見やりました時にも、その樹々の花が烈しい寒さを忍んで咲くといふことや、そこの斑らの雪のことは思はないで、すぐ、伯父樣のところの從弟、梅丸の事をおもひ出すのでありました。

それは樂しい思ひ出でした。生れてからちやうど九歳の秋まで、二人は一緒に育つて來たのでありました。それが伯父樣の諸國行脚の坊樣になられた事から、伯母樣は梅丸を連れて間もなく伯父樣の跡を追うて旅立たれ、そして今日まで音信不通になつてしまつてゐたのでした。その悽しい人達に直にお逢ひ出來る小雪の心には、梅林の中に、おぼろげな梅丸の幼影さへ見えるやうに思はれました。

これほど自分には樂しい門出であるものを、村の人達はどうしてあんなにまで悲しがるのであらう。みんなが泣くので自分も悲しくなるのにと、小雪は思ふのでした。

『播磨といへばすぐ隣國だに、さう敷かつしやることは無い。それに、門出の涙はきつい不吉ちや。』と、召使頭は村人をたしなめるのでした。

『ほんに、遠いところへ行くではなし、遲くも雪の融ける時分にはお歸りでござりませうに。』と、侍女頭も言葉を合せるのでした。

『それでも、私には、これが永のお別れになるやうで、悲しくて……。』と、一人の老いたる侍女は、しやくりあげるのでありました。

『まあ、眞弓や、お前はあまりに心配性だからいけません。なに、私は、あの梅の咲く時分には、きつと戻つてこられると思ふ。』

と、小雪は麓の方を指すのでした。

ほんとに其通り、小雪は無事に、すぐと故郷へ希望を遂げ

てゐ[illegible]て来られるでせうか。何か途中に變つた事でも起らねば　ございますが……。

二

ちやうど其頃、播磨國では、梅丸のお母様がなくなられましたので、十五歳の少年の梅丸は、書寫山に上つて、山の稚兒

さんにあがり、やがては坊さんにして戴かうと、お父様にお願ひしましたが、お許しは出ないで、丹波國に行つて、叔父様の御厄介になるやう、それが前々からの約束だといふ事で梅丸も、その志す旅に上つたのでありました。

不思議な事に、梅丸が播磨の住居を疊みまして、門出に上つた其日は、小雪が、村の人達に送られて、故郷を出た其日と同じでございました。

それで、二人は、同じ道を行けば、どつか途中で出逢ふ筈でありました。

小雪の一行は、小者二人、侍女一人、それに小雪の四人で、小雪は駕籠に乘せられて行きました。別に急ぎの旅でもないので、その日は、國境をちよ！と播磨國にはひつた坂本の宿に一夜の宿を求めました。

梅丸は、一人旅の、それでも最初の日は、いそいそと旅路を出はづれて、その日は、御着に泊りましたが、其晩不思議な夢を見ました。それは、四年も逢はずにゐた小雪が、近くにゐて、自分を尋ねてゐるやうな夢でした。曉方の夢は正夢だと聞いてをりましたので、それに縋りありありした夢でしたので、起きてからも氣にかゝり、其日一日は、近くの國分寺などに詣でて暮しましたが、考へて見ると、そんな筈はないと思ひ直して、そのまた翌日は、朝夙くに丹波への旅をつづけることに致しました。

かうして一日、梅丸が手間どつてゐる間に、小雪の一行はだん〳〵と近づいて、第二日目には、賀西郡の法華山に宿をとつてをりました。ところが、小雪の方には大變な事が起りました。それは、誰の過失か、その晩、小雪の泊つてゐる宿に火事があつて、その混雜のうちに、一人の小者と侍女の行方がわからなくなつてしまつたのでした。

これは、後になつてわかつた事ですが、小雪の家に召使ふ召使頭と侍女頭とは悪い心の人達で、腹を合せて、小雪を困らせ、ほんとの一人旅にさせた上、前々から頼んで置いた駕籠屋に小雪を渡はせて、小雪を人買ひの手に渡してしまひ自分達で、長者屋敷を乘取らうといふ悪だくみであつたのでした。

そんな悪い心の小者や侍女だとは知りませんので、お書頃まで、小雪は、二人を探させましたが、どうしても知れないといふので、氣にはかゝりながら、殘つた小者のいふまゝに淋しい旅を續けることになりました。

さうして、小雪の駕籠が、ちやうど印南の野といふ廣い原を通りかゝりました時、梅丸も、法華山がへりの駕籠屋にすすめられて、同じやうに、駕籠で、この野を通りました。

あつちから来る小雪の駕籠と、こつちから行く梅丸の駕籠との間が、もの〻半町も隔たつてはゐないところで、駕籠屋は、言ひ合せたやうに一休みしました。小雪が、駕籠の乘を上げて四邊を見ますと、向に梅丸の駕籠が見えました。梅丸も、駕籠の窓から向を見ました。そして二人に顔を見合せましたが、どちらも、まさか、それがお互ひに尋ねあつてゐる小雪だとも梅丸だとも思ひませんので、はつとして小雪から首をひつこめました。

二人の間は、顔を見定めあふには遠すぎましたし、また、ほんの一瞬間きり顔を合せなかつたので、小雪も、梅丸も、それが從弟妹だとは知りませんでした。そして、間もなく駕籠かすれ違つた時にも、お互ひは、再び顔を合せることをしませんでしたので、そのまゝ駕籠は右と左とにすれ違つてしまひました。

それでも、駕籠舁同志は、聲を掛けあひました。そして肩をかへるふりで、小雪の駕籠は梅丸の駕籠舁の肩に、梅丸の駕籠は小雪の駕籠舁の肩に掏替へられました。小雪も梅丸もそれは自分達の駕籠舁が、肩をかへあつたのだとばかり思つてゐましたので、よつほど離れてしまふまでそれを知りませんでした。

梅丸の駕籠舁は、暫くしてから妙な唄をうたひ出しました。

加古川や、　高砂通ひ、
人買ひの、　船頭ゐるかや、
人買船頭。

『おや、妙な唄だな。』と、梅丸が考へました時、はるかのむかうで、

ホーイ、
人買船頭。

といふ聲がしました。驚いて窓から首を出しました梅丸の頭を、誰か、いやといふほどなぐつた者がありました。それで、梅丸は、其日、そのまゝ、人買船に移されて、遠く高砂の浦から、沖の方へ漕ぎ出されるのも知りませんでした。

小雪の駕籠は、間もなく途方もない早さで駈け出しましたので、小雪は驚いて、もつとゆつくりしてもらはうと聲を立てましたが、聞えないのか、駕籠は、ホイキタ、ホイ、ホイキタホイと、どんどん走つて行きます。かはいさうに、旅に馴れない小雪は、忽ちの間に疲れきつて、うゝうゝ苦しみ出しました。それで、その晩、小雪は、何處にどう舁ぎ込まれたか全く知りませんでした。小雪も、かうして、飾磨の津から人買船に乗せられて、何處かへ漕ぎ出されてゐるのでありました。あゝ、二人は、かうしてもう一生再び逢ふことは出來ないのでせうか。

三

その頃、この近海はおろか、諸國の海岸を荒しまはる海賊

團がありました。團長を重太丸と言つて、人買の親分でもありました。それで、梅丸を乗せた人買船は、ちやうど重太丸の海賊船が近づいた時、前からしめし合せてあつた事なので、その船に近づいて行つて、梅丸を賣り込みました。それで梅丸が氣がついた時には、決して逃げ出すことの出來ない身の上になつてをりました。

そのうちに、重太丸の海賊船は、飾磨の海を通りました。船の上から見ると、小雪を乗せた小船が、赤穂の方に漕いで行きます。重太丸は合圖で、その船に停れと命じ、小船に近づいて、その人買船から小雪をも買ひ取りました。

『おまへは、この少女を何處へ連れて行くつもりなのだ。』と重太丸が尋ねましたら、人買船の船頭は、

『鹽屋の長者に買つてもらふ約束でした。』と答へました。

『ふん、あすこなら値をよく買ふだらう。』

と、重太丸は喜んで、小雪を赤穂の鹽屋の長者のもとに、汐汲女に賣ることに定めました。

かうして、不思議な運命で、小雪と梅丸とは、また同じ海賊船で、ほんの暫く一緒になりましたが、お互ひ同士はそれ

を知らずに、小雪は梅丸の事を思ひ、梅丸は小雪の事を思ひてをりました。同じ船に乗り合せながら、何といふまはり合せの悪い二人だつたのでせう。二人は顔さへ見かはす事もなく、翌日には、小雪は赤穂の鹽屋の長者の家に、一生涯の汐汲女に賣り渡されてしまひました。

梅丸は、それとも知らずに、海賊船の少年水夫として、酷たらしく追ひ使はれました。さうして津々浦々を荒し廻つてゐるうちには、何かの機會で逃げ出せる事もあらうと、梅丸は、せめてもそれをあてに、辛い其日を過してゐりました。さうしてゐるうちに一年の月日が經ちました。その一年は、梅丸にとつて十年よりも永い月日でありました。

その一年目に、重太丸の海賊船は播磨の海を通りました。その日は大層な暴風雨で、重太丸の海賊船は、木の葉のやうに大波に弄ばれて、たうとう、あ、このみさきの近くで難波してしまひました。船員は、誰かれの差別なく、波に浚はれてしまひましたが、梅丸だけは、その翌る日の曉方、赤穂の浦和へ打ち　げられました。

昨日の暴風雨のあともなく、その日は、ほんとに波の靜かな日でありました。ちやうど、小雪が汐汲みに出てをりました時、誰か昨日の暴風雨に打ちあげられた人があると言つて、がやがや集つて行きますので、小雪も、ふと、見たくなつて其處へかけつけてみました。見れば、その人は、まだ若い水夫のやうで、幸ひとけがもなく助けられたやうでした。そして連れられて、だんだん此方へ來ますので、小雪がつくづく見てをりましたら、それが梅丸のやうに思はれますので、小雪は飛んで行つて、なほよく其顔を見定めるのでありました。髪は伸びてゐても、姿は水夫でも、それはまぎれもない梅丸でありました。小雪は、もうもう嬉しくて、思はず、『梅丸どの。』と聲をかけて、人々をおしのけて梅丸にすがり寄るのでありました。

『おゝ、小雪どの。』と梅丸も、不思議なめぐりあひに驚きながらも、なつかしい從妹のあはれな汐汲姿に泣かされるのでありました。

今も赤穂の七島あたり、語り次がれる小雪と梅丸の悲しい物語の行末に幸あるやう、少年少女の皆樣もお祈りして下さいまし。（をはり）

香爐の行方

朗一　川森

四、草太郎の失望

草太郎が鬼の金造の家を逃げ出してから三年後、東海道の箱根の關所を過ぎて三島の方へ下つていく一人の若者がありました。若者は茶の十徳を着ゐる所から見ると、旅の俳諧師のやうでもありましたが、その體の劍術に鍛へられたやうなガッシリした所から見ると、世を忍ぶ浪人者のやうでもありました。

山々の樹の間では、鶯が聲を競うて鳴いてゐました。春とはいへまだ寒い風が吹いて來るのに、鶯はほれ　と　するやうな啼聲で、旅人の心を暖かく慰めてくれるのでした。

とある岩角に一人の馬子が腰かけてゐました。馬はその脇に首をだらりと垂れてゐます。馬子は若者を見ますと、

『且那、馬に乘つて下さい。』と申しました。

『いや、私は山々の景色を見ながら歩いて行かうよ。』とその若者が斷りますと馬子は更に追ひかけるやうに、

『且那、それでも私はどうせ空馬で三島へ歸るんですから、幾らでもようございます。一つ乘つてやつておくんなさい。馬に乘つて眺める景色もまた格別ですぜ。』

『よし、それでは乘ることにしよう。』

と、若者はやがて馬に乘りました。馬子は先に立つて手綱を曳き出しました。そして如何にも鞠氣さうに馬子唄を、馬の蹄の調子に合せながら歌ひ出すのでした。若者はそれを聞いて大層嬉しさうに、

『馬ほく〳〵我を絵に見る夏野哉か。』と小聲で呟きました。すると馬子は、ふとそれを耳にしたと見えて、

『且那、今のは芭蕉の句ですね。』と、いひました。

『あゝ、さうだ』と答へましたが若者は、ふ外らしい顔付で

『お前さんは俳句が好きかね。』と訊れて見ました。

『えゝ、大好きなんです。その癖自分では何一つ俳句らしいものは出來ませんがかうして馬子渡世を致して居りますと、種々なお客樣に逢ひますので、私は俳諧の先生方をお乘せした時はいつもお願ひして短冊の一本も貰ふやうにしてゐるのです。お陰で、今では何

十枚かの尋い方達の短册が集りました。私には別に道樂と云ふものがありませんので、こんなことが只一つの道樂でせうかな。且那もその道の方と見受けしますが違ひますかれ。』

『いや、さう云はれると恐縮だが、私はまだ修業中なんだよ。時に馬子さん、お前さんは澤山の俳諧師を知つておいでだらうが、泉州堺の幽石宗匠を知つてるかね。』

若者は體を乘り出すやうにして訊れました。果して、この若者こそは俳諧師雲水の子草太郎少年の成長したものでありました。三年の間、草太郎は江戸のさる先生について劍術を學び、苦心の結果今では一人前の腕になつたのであります。そして、性來父の血を受けた草太郎は俳諧の道も好きで、誰に教はらずとも天來の才能で、よく同僚やその師匠を驚かしたのでありました。今度師匠から許されて敵と狙ふ幽石を探れて、泉州に向ふ途中であつたのであります。

馬子は、草太郎の問ひに對してかう答へました。

『知つて居りますとも、幽石先生なら今から三月ばかり前、矢張私のこの馬に乘つて山を越しましたよ。何でもお話によると足掛四年振で故郷へお歸りになるのださうでして、奥州の果まで行脚なされたのださうですよ。』

『さうかれ、それは有難い。私もな、幽石先生を慕つてゐるものだから、今度用事があつて、京に上る場合に先生をお訪れして見たいと思つてゐるのだ。』

『そうですかい、それはよい事ですな。どうぞ先生にお逢ひの節は箱根の馬子の甚六が宜しく申したと御傳言下さいまし。』

『あゝ、承知した。』

草太郎は珍らしい馬子だと思ひながらも、幽石が堺に歸つたと云ふことを聽いて大層喜んだのであります。

やがて三島の宿に着いた時、草太郎は馬子の甚六に一句を與へてその夜は其處に泊り、翌日からはまた宿から宿へと東海道を上つて行つたのでした。

それから日を重ねて何事もなく泉州堺に着くことが出來ました。其處で草太郎は考へました。自分が敵と狙ふのは山中幽石であるがまだ幽石が父を殺したといふ判然した證據もない。そして第二の目的である大切な香爐も取り返さなければならない。これは只いきなり敵呼ばりをして討ち取つた所で仕方がない。何とかよい方法はあるまいか、としきりに小首を傾けて居ましたが、ふと思ひ當つた事があつたと見えて、ある日幽石の家を訪れたのでありました。何しろ、山中幽石と云へばこの邊、いや當時の日本で有名な俳諧師でありましたから、とある茶店のお婆さんに聽れました處、すぐにその住居もしれたのでした。

草太郎は幽石の家の前に立つて見て、その意外なのに驚きました。それは何故かと申しますと、草太郎の考へではかほどまで有名な俳人のことであり、まして自分の家の尊い香爐を奪つた位の慾心のある人でありますから、必ずその宅も立派なものであらうと思つたのでした。けれども思ふと見るとは大した違ひで、その家の屋根は傾き然も見から小さな貧乏らしい家でした。然し、矢張り何處やら俳人らしい粹な所は、荻で作られた柚垣や、竹で編まれた丸窓のあたりなぞ、亡き父の趣味のほども偲ばれて、多少慕はしい感じもせぬではありません。

『お報み申します。』

草太郎の聲に、中からは『はい』と答へて出て來たのは幽石の弟子らしい二十前後の男でした。

『こちらは山中幽石先生のお宅でございますか。』

『左樣でございます。』

『私は旅の者でございますが、俳諧が三度の飯よりも好きで、幸ひ當地に參りました折に、後れてお慕ひ申しゝ居ります先生にお目に掛り、俳階の一つでも聞かして頂きたいと思ひまして、矢禮とは存じながらお訪れいたしました。どうぞお取次下さい。』

『はい、そして貴方樣の御名前は。』

『いや、名を申す程の者でもございません。詳しくは先生にお眼にかゝつてから申し上げます。』

『暫らくお待ち下さい。』

弟子らしい男は奥へ入つたかと思ふと、再び出て來て、

『どうぞお上り下さい。』と申しました。

草太郎はやがて草鞋を脱ぎ、着物の塵を拂つゝ座敷の中へ入りました。見ると幽石は机の前に蹲つて、何やら書物なぞを繰るやうでありましたが、草太郎の姿を見ますと、わざわざ席を離れて、

『これは〳〵旅のお方とやらようこそお訪れ下さいました。私が山中幽石でございます。』

と云つて丁寧に頭を下げました。

草太郎は心の中で、『この憎くき幽石奴、父の敵、香爐の盜人、眞二つにして吳れようか』と思ひましたが、ぢつと心を靜めて、

『先生、暫らくでございました。お變りもない樣子で結構に存じます。』と出來だけ丁寧に申しました。

その言葉を聞いて幽石は顔をあげ、まじまじと草太郎の顔を見守つてゐましたが、

『はて、私は年を取つてとんと物忘れをしてなりません。誠に失禮でございますが、貴方樣は誰方でございましたでせう。』

草太郎は「この惡黨奴、しらばくれるな」と心の中で思ひました。

『お忘れですか。私は武藏の雲水の子草太郎と申す者でございますよ。』

『や、これは飛んだお見それをいたしました。雲水師匠のお子さんでございましたか。四年前はえらい御厄介になりました。今改めてお禮を申し上げます。それにしても貴方は四年の間にすつかり見違へる程御成人なさいまし

たな。お父様はお丈夫ですかな。』

幽石は草太郎と聞いてさも懐しさうに微笑を顔に浮べてかう云ふのでした。草太郎はそれを見るとまた「この惡黨奴！」と思ひました。でも更につとめて丁寧に、

『はい、有難う存じます。お蔭様で父も丈夫で暮して居ります。あれから父も時々先生のお噂を申して居りました。今度私が用事があつてこちらへ參りますに就ては、是非先生をお訪れする樣にと父に申されましたので、お伺ひした次第でございます。』

『さうですか、それは／＼ようこそお出で下さいました。御覽の通けの見苦しい家ではございますが、どうぞゆるりと御逗留なすつて下さいまし。』

『それに就きまして、私は先生にお返し申したい品を持つて參りました。』

『はて、それは何んでせう。』

『いや、先生の一寸したお忘れ物なのです。』

草太郎はかう云つてちらと幽石の方に注意深い眼をやりました。それは幽石の眼の色にでしても慌てたやうな驚きの影を見出したかつたからでした。けれども、幽石の眼は只一寸した不思議さに輝いただけで、その不思議さと云つても、或は少しの興味とも取れる位のほんの一寸した心の動きに過ぎなかつたのでありました。

草太郎は自分の包を解いて、いつぞや父の殺された時拾つた矢立を取り出しました。そして、急に姿を正し、キッと幽石を睨み付けて、

『さあ、幽石殿あなたが松林の中にお忘れになつたこれなる矢立、只今お返し申します。この矢立に覺えがございませう。』

幽石は草太郎のただならぬ言葉の調子と、その樣子とに吃驚したらしく、それでも落付いて、その矢立を取つて見ましたが、

『草太郎殿、貴方は何かの思ひ違ひをなすつてお出の樣です。この矢立は私のものではありません。そして私は足掛四年間の行脚に、ついぞ一度も矢立を落した事も置き忘れたこともございませぬ。』

幽石の言葉の終らぬうちに、草太郎は顔に血を漲らして叫びました。

『云ふな、幽石、いや大惡人、汝は我家の大切な香爐欲しさに父を欺いて松林におびき出し、父を殺して香爐を奪ひ取つたらうがな。今更言を左右にして逃げやうとは卑怯であらう。雲水の子が今この所に於て父の敵を討つ、潔よく討たれてしまへ！』

さう云ふと同時に草太郎の刀の柄に手を掛けました。

それを聞いて幽石はひつくり返る程驚いて怨む草太郎の手をしつかり仰へ、

『草太郎殿、暫らく待つて下さい。貴方は何か思ひ違ひをなすつてお出になる。私がどうして雲水殿を殺しませう。それは眞實人違ひです。』

『默れ、惡黨奴！其處放せ！』

けれども幽石は、顔へる手でしつかりと草太郎の腕を仰へて離しませんでした。

『草太郎殿、氣を靜めて下さい。私が雲水殿を殺したのなら潔よく貴方に討たれも致しませう。然し、それは眞實間違ひです。一體どうして、何日、何處で、雲水殿は殺されましたか、それから話して下さい。』

『胡麻化すな幽石、それなら云ふて聞かしてやる、父雲水は汝の爲の添狀かつて汝が我家を出立した翌日江戸へ香爐を賣りに立つたのだ。それを汝は五里ばかり離れた松林に待受けて殺したゝあらう。汝は誰知らぬものと思つてゐようが、其時汝かしたこれなる矢立、これが何より證據だ。さア、香爐を返せ、そして汝の首を渡せ。』

『えッ、雲水殿は江戸へゆく途中松林で殺されましたと、あゝ、それではあの夜が始めて逢つてまた最期のお別れであつたのか、……草太郎殿、私は決してお父上を殺しはいたしませぬ。お父上が殺されたと云ふ日は私は下野の素角宗匠の家にゐました。かう云つてもお疑ひでせう。幸ひその證據がありますから御覽に入れませう。暫らくお靜り下さい。』

と云つて幽石は、立つて机の上から小箱を下して、その蓋を取つて一枚の色紙を出しました。

『どうぞこれを後覽下さい。』と云つて差出すのを草太郎が手に取つて見ますと、それは素角幽石と連名でありまして、終りには「九月十七日月夜の宴にて」と書いてあり、二人の印が鮮かに捺してありました。

『如何でございます。草太郎殿、貴方のお家へ泊めて戴いたのは九日の十五日、これは翌翌日の十七日、これにてお疑ひが、晴れましたか。』

それを見た草太郎の顔は、血の漲つてゐたのが忽ち蒼白く變つてしまひました。それはまるで翼を折つた鳥が地の上に落ちて來るやうに張り切つてゐた心も一時に折れ、それと同時に無禮をした悔いに知らず／＼兩手は疊にペッタリとつき、頭は下つてしまつたのでありました。

『先生、眞實私の思ひ違ひでありました。私は四年間先生を敵と思つて暮しました。あゝそれは今となつて見れば、惡い一夜の夢でした。どうぞ私の無禮を御許し下さい。』

さう云つた草太郎は、感激まつてはら／＼と涙を流しました。

『あゝ、草太郎殿、お疑を解いて下さいましたか、私は嬉しい。それにしてお父上はまことにお氣の毒なことをしました。草太郎殿、これも何かの御緣です。私もこれから貴方のお力になつてお父上の敵を探しませう。必ず御案じなさいますな。』

幽石は涙を流しまして申しました。そして草太郎の手を固く／＼握るのでした。

かうして二人は瀬次の間云ひ樣もない心の激動から、落ち涙抑へ　ことが出來ず、互に手を取り合つてゐるのでした。

五、香爐の在所を知る

父、の敵、線い香爐の盜人――幽石、幽石、それは草太郎が四年の間夢にも忘れなかつた名でした。さうしてやうやくの思ひで修業を重ね、幽石に逢つて見れば、それは父を殺した眞の敵ではなかつたのでした。草太郎の失望ほどんなであつたでせうか。それにしても草太郎は敵呼ばはり所でなく、幽石の厚い情に感銘してしまつたのでした。

草太郎は幽石の情ある言葉に、問はれるまに父の殺された當時の模樣を細かに話しました。そして自分が金貸の金造の家に奉公に連れられて行つたことや、父の亡靈のことや、自分が逃げだしたことや、それから江戸に出て六年間の苦心なぞ、殘す所なく物語つたのでありました。そして後、草太郎は幽石に訊れました。

『先生、貴方は父を殺した者が誰であるか心當りがございませんか。』

幽石は默つて首を振りました。かう迷ひ始めては草太郎には勿論解らないのです。或ひは村人の誰かが云つたやうに、强盜の仕業であつたかも知れないとも思ひました。幽石は俄を思つたかつと立つて戸棚を開け、長持の奥から紙に包んだ一包の香を持ち出しました

『この香は私が京都のある公卿樣のお邸へ俳句の會にお伺ひした折頂いた名香で「光來香」といふ珍らしい匂ひのする香です。どうです一つ焚いて見ませうか。』

草太郎は幽石の言葉が腹立たしくなりました。今かうした心配に思ひ惱んでゐるのに香どころの騒きではない、と思つたのでした。それでも親切な幽石の心を無にすることも出來ないので、

『えゝ、どうぞ。』と氣のない返辭をしたまゝ尙も自分は思ひか敵の想像に任じてゐるのでした。そのうちに幽石が焚いた香の匂ひは成程今迄嗅いだこともないやうな如何にも清々しいよい匂ひでありましたが、それすらも今の草太郎の心を和らげはしませんでした。

『草太郎殿、さう考へてばかりゐないでちとこの香の匂ひを味つてごらんなさい。』

と幽石の云ふ言葉に少し氣に障つた草太郎は、

『その香が父の敵と何か關係があるのですが。』と咎めるやうな訊ました。

『大ありです。恐らくこの香がお父上の敵を探し出す役目をするでせう。』

『えゝ？　この香がですか。といふ謎は？』

『その謎は追ひ〳〵解つて來ます。兎も角も私達は二人で江戸へ下りませう。善は急げだ、明朝早く出立致すことに致しませう。萬事は私に任せて置いて下さい。』

幽石の云ふ言葉に、草太郎は何が何やらさつぱり判りませんでしたけれども、そのまゝ萬事を任せることにしました。幽石は草太郎に幽水と云ふ俳號をつけてくれて改めてその

弟子にしてくれました。そして、その翌日、澤山の幽石の弟子たちに送られながら、堺の町を出立いたしました。

途中、幽石は有名な俳人だけあつて、幽石は到る處で人々に喜び迎へられましたので、草太郎にとつても樂しい旅でした。その上、父の血を受けて性來この道の好きな草太郎は天才的のところもあつて、師匠の幽石の話を聞き、その作に手を入れて貰つたりしゐるうちに、時々は幽石も感嘆すほどの立派な句を作ることもありました。

かうして、箱根の山越えは馬子の甚六の馬によつて、俳句の話をしては彼を喜ばせ間もなく無事に江戸に着くことが出來ました。

江戸へ着いた幽石と草太郎の二人は、深川邊のとある家を借り受けまして、それへ住むことにいたしました。

そして幽石は毎日のやうに草太郎を留守居に殘し何處へか出掛けてゆきます。

『一體先生は何をしに、何處へ毎日出掛けるのであらう。』といふ疑ひは草太郎の胸に起りましたが、强ひて聞く謎には行かず默つて留守を守つて居りました。

或日幽石は、いつもより大層にこゝ〳〵として戻つて來ましたが、

『幽水、今日は大層喜ばしいことが出來た。』と申します。

『何でございますか。』

『來月の三日に酒井樣のお屋敷で俳句の會が開かれることになりました。何しろお大名のお屋敷で俳諧が開かれるなんてことは聞いた事もない位で、私は一生一代の有難い時だと思つてゐる。就いてはお前も同道したいと思ふが行くか。』

『えゝ、參りますとも。先生、私はまだ大名のお屋敷は一度も拜見したことがありませんし、それにさうした立派な句會でしたら、さぞ全國中の名高い先生達は集るでせうからその方々にも一目お眼に掛たいと思ひます。どうぞお供さして下さい。』

『さうか、それでは連れて行かう。所でな、當日は香の焚き合せ會もあるのだよ。』

『へえ、香の焚き合せ會とはどんなものですか。』

『香の會といふのは種々な人が自慢の香を持つて焚くのだ。そしてその句ひを嗅いでその優劣を定め、同時にお互が樂しむものだね。』

『では、先生はあの「光來香」をその席でお焚きになるのですか。』

『さうだ。』

『だが先生は香爐をお持になつて來られなかつたのではありませんか。』

『貴は私にとつては香爐のないのが何より都合がよいのだ。』

『へえ、それはどういふ謎ですか。』

『其處だ、私は誰方樣かの香爐を一寸拜借するのだ。どうだ幽水、私の「光來香」が敵を探し出す役目を勤めるだらうといつたことが思ひ當つたか。』

利口な草太郎はその時成程と思ひ當ることがありました。そして今迄敵のことばかり考へてゐて失くなつた大切な香爐のことを考へなかつた自分が愚しく思はれて來ました。考へて見れば、如何に大切な香爐とはいひながら、盜む位慾のある人なら必ず何處かへ賣飛してゐるに相違ない。さうであるとすればさうした會の席には現はれないとも限らない……と思ふと草太郎は始めゝ師匠の考深いことに氣がつきました。

幽石は更に聲を潜めて その日の或計略を草太郎に告げました。（つづく）

桃太郎ライオン狩

水島爾保布

日本一と　にれた桃太郎君は、その日本一の旗じるしも今ではもうすつかり影がうすくなつてしまつて、この頃の少年達には、鬼が島征伐の嘘ばなしなどをして聞かせても、誰も耳を貸さうともしてくれないので、何とかして人氣の取り返へしをしなければならないと考へました。

『何かあつといつて驚くやうなことは無いかしら、――太平洋横斷飛行――北極探險、……』

などと、いろ〳〵數へては見ましたが、どれも鬼が島征伐などのやうに獸や鳥の智慧や力をかりただけでは出來さうもない事ばかりなので、流石の日本一の桃太郎君も手をこまぬきあぐねて居りました。と、その時表の方から獅子舞の賑やかな笛と太鼓の音がきこえて來ました。桃太郎君はその囃しをきくと一しよに、頭の中が不意にピカリとしました。

『さうだ。獅子退治といふことがあつた。……こりや素晴らしい。』と、桃太郎君は自分でいつて、自分で拍手喝采をしのでありました。

桃太郎君は最新式猛獸打ち十二連發の獵銃を肩にかついでアフリカさしてライオン狩に出發しました。

桃太郎君の乘つた船が港へつくと岸の棧橋には犬や猿や雉子の代りに、駱駝が一匹出迎へに來て居りました。

大きなヘルメット帽をかぶり三升五合も這入りさうな大きな水筒をブラ下げ、ハムだの腸詰だの梅干の罐詰だのパンだのサンドイッチだのを、しこたま詰め込んだ大きな背嚢を背負つて、機關銃のやうな鐵砲をかついだ、桃太郎君の勇ましい武裝姿を見て、その駱駝はヘタヘタと坐りました。

た。そして、

『もしもし桃太郎さん、どちらへいらつしやいます。』といひました。

『僕はこれからライオン退治に行くんだが、君は多分お供させてくれろつていふんだらうね。』と、桃太郎君は駱駝のいはうとするところをすつかり察したつもりで、さきだまこいてかう云ひました。

『ライオン退治ですつて？そいつは少し危險ですね。』

と、駱駝はライオン狩ときいて少し尻込みしました。

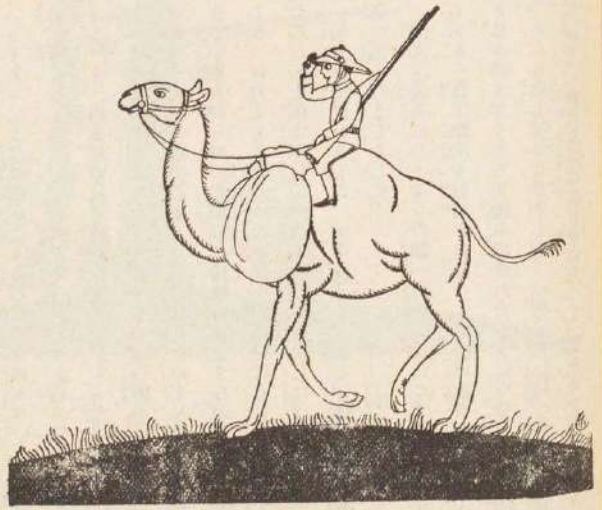
桃太郎君はオヤオヤ少し違ふぞと思ひました。

『なアに、遠くから鐵砲で打つんだから大丈夫だよ。何うだい、僕を君の背中へ乘せて行つちやくれまいかね。』

『そりやお乘せ申さないこともありませんが、何しろ私は大食ひですからね。あなたの三十二日分の黍團子なんか、わたしの一日分にも足りないんですからね。』と、駱駝はいひました。

『そいつは少し困るな。しかし、食べもの位何とかするよ。何うも何かお供に連れないと淋しくつていけない。』

で、桃太郎君は駱駝の餌は別の荷にして鞍の脇へつけて行くことにして、ともかくもその背中へ乘せて貰ふことを約束しました。



しばらく行くと終は耶子の林の中へと這入りました。片方

から射して來る日光を受けて、路の上には樹々の濃い影が縞のやうに横たはつてゐました。てうどその影の縞を百本ほど數へた頃でした。約半丁ばかり隔てた行くてに、樹と樹とが一かたまりにかたまり合つて影と影とが眞黑く重なつてゐるところがありました。その暗い洞穴のやうな中に、何やら大きな獸らしいものの姿がむくむくと動いてゐました。

『しッ、……。』と、桃太郎君はいち早く見つけたので、いきなり手綱をひかへて、そして銃を取り直して、きつとその影の中の影の姿を見守りました。

『あれはライオンですよ。』と、駱駝はさういふなり、急いで逃け出さうとしました。桃太郎君は危く振り落されさうになりました。そのとたんにその怪しいものの影はぬつと日向へ姿を現はしました。駱駝のいつた通り大きな牡のライオンでありました。長いたて髪は強い日の光に梳られて、金と銀とを織りまぜしてキラキラ燦いてゐました。

桃太郎君は駱駝があまりブルブル顫へるので、銃を把るにはとつてもねらひをつける事が出來ないので、思ひきつて地面へ飛び降りました。しかし、奇妙なことには、そのライオンは、自分の前方で人間や駱駝がざわざわ騒いでゐるのを、一向氣にも止めない風で、いかにも悠々とした足どりで、桃太郎君の方へ向つて歩いて來るのでありました。

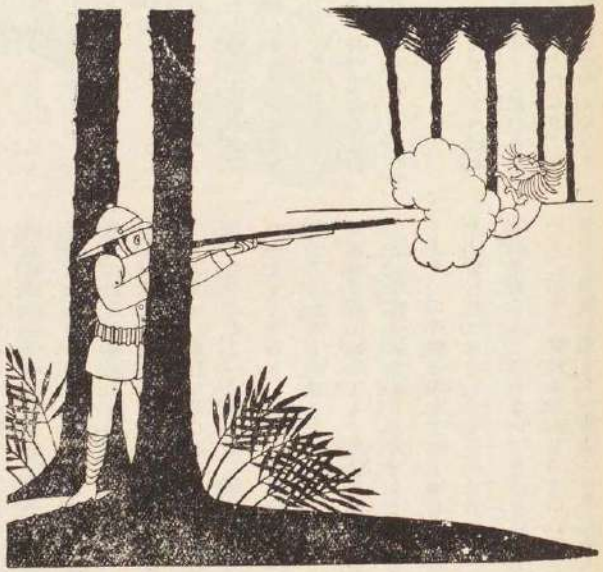
『ライオンはまだ僕達がこゝにゐるのを知らないらしいぜ。君、騒ぐことはないよ。僕が今一發で仕止めつちまふから……』と、桃太郎君は、駱駝を制しながら一方の耶子の樹の影へと身をかくしました。そしてその樹の幹を小楯にとつてそのライオンの額の眞中どこへ照準をきめました。そして騒がしい胸を押し靜めながら、獲物の接近するのを待つてゐました。けれどもそのライオンは一向に氣にも止めない容子でだんだんと桃太郎君の側近くやつて來ました。

引金が引かれました。ズドン！と、激しい爆音が林の奥の奥へ迄こだましました。

彈丸は美事にライオンの額へ的中しました。さしものライオンも一發で急所を射貫かれて、もの凄い唸りを一聲あげたと思ふ間もなくまるで拋り出されたやうに自分で自分の體をでんぐり返してしまひました。『何うだい只一發であの通りだ。』と、桃太郎君は反り身になつて、胸をポンと一つ叩きました。でも、まだ油斷はせずに、銃を構へたまゝ一歩一歩とその仆れたライオンの方へ近づいて行きました。と、俄に路の傍からバラバラと走り出て來たものがありました。それは二人の黑ン坊でありました。

『お前は何だ。何故わたし達のライオンを撃つたのだ？。』と、黑ン坊は、桃太郎君にかう呶鳴りました。二人の眼はまるでガラス玉のやうにギラギラ光つてゐました。そして眞赤な芥子の花のやうな口を大きく開けて、今にも食ひつきさうなもの凄い容子をしながら迫つて來ました。黑ン坊はてんでにオモチャのやうな笛と木で拵へた鼓を持つてゐました。

『このライオンは君達のライオンだつて？』と、桃太郎君は銃をかまへながら、その黑ン坊にきゝました。



『さうだ。わたし達の飼つてゐる大事のライオンだ。』

と、黑ン坊は腹が立つて堪らないやうに體をふるはせながらいひました。

『飼つてゐるライオンだつて？』

桃太郎君は呆氣にとられて思はず銃の構へをゆるめました

『さうだ。お前にはこのライオンの首にかけてあるものが見えないのか。』

黑ン坊にさういはれたので桃太郎君はそのライオンの首筋もとを見ました。そこには小さな罐がくくりつけてありま

した。

『この罐は一たい何をするんだね。』と、桃太郎君は何だかわけが判らなくなつたので、あらためて黒ン坊にきゝました。

『このライオンはめくらだ。そして大そうな年よりだ。爪も牙もすつかり弱つて了つて兎一疋とらことも出來やしないんだ。わたし達はこのライオンを連れて方々の町や港を廻つて歩いてるのだ。ライオンはわたし達の笛や鼓に合せていろんな藝をする。さうすると見物人はこの首へ掛けた罐の中へおあしを入れてくれるんだ。……お前はわたし達の大事の商買道具をメチャメチャにして了つたんだ。何んとかこの始末をつけてくれなくつちやいけない。』と、黒ン坊にいはれたので、桃太郎君は初めて容子が判りました。そこで持つてゐる丈のお金をその二人の黒ン坊にやつて、その代りにそのライオンの死骸を賣つてくれと頼みました。

『老耄れためくらのライオンであらうと、死んでしまへば判りやしない。』と、桃太郎君はそんなことを腹の中で思ひました。さう思ふともう桃太郎君の頭には、壯烈たぐひなきアラビア砂漠のライオン狩の光景がまるで活動寫眞のやうに、チカチカと映り出しました。桃太郎君はすつかり得意になつて足もとに仆れてゐるライオンの咽喉首へ片足を踏んがけて、片手で銃を高々とさしあげました。その傍で二人の黒ン坊が桃太郎君から受取つた金貨を地面へならべて勘定をしてゐる姿が、まるで降參してゐるかのやうにも、桃太郎君の眼には見えたのでありました。

桃太郎君はそのライオンの死骸を二人の黒ン坊にかつがせて、ふたゝび駱駝の背に跨つて、もとの港へと引かへしました。ちやどそこへ日本へ歸る船が來たので、急いでそれへ乘り込まうとすると、お供の駱駝が是非一しよに日本へ連れて行つてくれろといひました。

『連れて行くにしても、君はあんまり大食ひ過ぎるよ。』

と、今度は桃太郎君の方でさういつて斷りました。そしてライオンの死骸を運んで行くはしけへ自分も飛びうつつてしまひました。

『桃太郎さん、僕をおいてきぼりにするなんてひどいぢやないか。』と、駱駝は怨めしさうにいひましたが、何と思つたか、いきなり海の中へ飛びこんでじやぶじやぶ泳ぎながら、

桃太郎君の乘つたはしけ舟のあとを追つかけました。そして桃太郎君のはしけが本船へつくと一しよに其駱駝も本船へ泳ぎつきました。

『その駱駝はあなたの駱駝ですか。實によく慣れたものですなア。流石に日本一の桃太郎さんだけあつて、駱駝にまで人望があるのには恐れ入りました。』と、船長さんにさういはれたので、桃太郎君は今更その駱駝を追ひ歸すわけにも行きませんでした。桃太郎君はそれから無事に日本へ歸りました。

『我桃太郎氏の日本一は今では世界的意味での日本一になつた。同氏は單身アフリカ蠻地の奥の奥まで殘るくまもなく探險して昨朝無事歸朝した。殊にダビット・リビングストン博士及びヘンリー・エム・スタレー以上の名譽ををさめたものといはなければならない。此のみやげには一疋の牡の大ライオンがある。これはサハラ沙漠の大王と呼ばれて、土人等の間で非常に恐れられてゐた勇猛無比のライオンであつたが、氏はそれと大格闘の結果終に鐵拳をもつて打殺して了つた。それからもう一つのみやげに一疋の大駱駝があるが、これは氏が沙漠旅行の際蠻人の掠奪隊に襲はれた時、その大將と一騎打ちの勝負をして打勝つたので、降服のしるしとして掠奪隊から贈られたものである。』

と、その翌朝の新聞は傳へて居りました。』（をはり）

水滸傳

（回三第）

宮島資夫

公孫勝の術

入雲龍公孫勝が年老たお母さんの御機嫌を伺つて來るといつて、梁山泊を降つてからもう四五ヶ月の月日がたちました。すると或時、梁山泊の人々は、それまで多くの豪傑達を大變好く世話をしてくれた恩のある、小旋風柴進といふ人の爲めに、高唐州の高廉といふものと戰ひを初めなければならなくなつたのです。

此戰といふのも原因を云へば高廉といふ男は朝廷の惡物の高俅の甥でしたし此高廉の細君の弟に殷天錫といふ者があつて、この二人が高俅の威を笠に着て無暗に威張つたり惡い事をしたりして、遂に、柴進の叔父さんで、高唐州に住でゐた柴皇城といふ人の家が大變綺麗な景色の好い家なので、殷天錫が無理にそれを乘り取らうとして、柴皇城を擲つた爲に、皇城は遂に死んでしまひました。丁度そこに例の短氣者の李逵が來合せてゐたので、李逵は又怒つて殷天錫を一拳の下に打ち殺して梁山泊に逃げ歸つてしまひましたが、柴進は高廉の爲に捉はれてしまひました。

李逵が山陣に馳せ歸つてこの事を話したものですから、今まで晁蓋でも宋江でも、その外澤山の豪傑が柴進のために大變世話になつてゐるので、『すぐに助け出さなければならない』といつて、先づ林沖、花榮、秦明、李俊、などといふ十二人の豪傑が三千の人馬を從へて先頭となり、宋江、吳用、戴宗、李逵、張順、なぞといふ十人の頭領達もまた三千の人馬を從へて高唐州へ攻めよせました。

ところがこの高廉といふ男は、惡い人間ではありましたが、かねてから妖術を習ひ覺えてゐたものですから、梁山泊の兵が高唐州の城外まで攻めよせて來たといふのを聞くと、『何だ山賊共の分際で生意氣な事をする奴だ。向ふから攻めて來なくとも押しよせて攻め亡してやらうと思つてゐた所だから丁度好い』と大きな聲で笑つて陣を整へて繰り出しました。それに高廉の手下には、神兵といつて、山東、河北、江西、湖南、兩淮、兩浙、等の諸州から選りすぐつた勇士等を三百人集めてありまして、これが高廉の妖術に應じて機敏に働くので、その

軍勢は中々勢が强かつたのです。

最初の戰には弓の名人花榮、狼牙棒の使手秦明、などが先陣して戰ひ、はじめは梁山泊の方で高廉の大將を二人も打取り旗色がよかつたのですが、やがて高廉の方が負けさうになると、高廉は馬上に立つて寶劍を拔いて、邪術を行つたので、高廉の陣中から黑雲が湧き出し天に登るとひうつと吹いて來た魔風に吹かれて、梁山泊の陣中へ砂や石を降らせ、こちらの者が狼狽へはじめた所へ三百の神兵が切り込んで來たので、梁山泊の方がたうとう負けてしまひました。

その次の日には宋江が總大將となつて戰ひ、この日も最初は梁山泊の方が旗色がよかつたのですが、終ひに高廉が銅の牌を叩いて呪文を唱へると、その陣中から澤山の猛獸が現はれて來て、暴れ廻るので、たうとう梁山泊の軍勢が敗走してしまひました。

宋江はその日から、大變心配をしはじめて毎日陣中に閉ぢ籠つていろ〳〵と評議をしてゐましたが、軍師の吳用が云ひますには、

『これはどうしても高廉の妖術を破る人を連れて來なければ、早く勝つ事はとても出來ない。それには孫勝先生に歸つて頂くと一番好いと思ふがどうでせう』

それを聞くと居並んでゐた豪傑達も、『全くそれに限ります』と吳用の言葉に感心してしまひました。さて公孫勝を迎

へに行く使ひには誰が好いだらうと云ふ事になりましたが、それにはどうしても足の早い人が好いといふので納保

大行載宗を頼むことになりました。

すると吳用は載宗に向つて、

『君も知つてをられる通り、公孫勝はあゝいふ清廉潔白な道家の人だから、蘇州の村郷を尋ねてもとても解るまいと思ふ。どこかかう名山とか仙境とかいふ所にきつと居られるに違ひないから、さういふ所を尋ねて見る方がきつと早く解る』と云ひました。

載宗は、

『承知しました。私は早く馳けて行く事は樂々と出來ますが、然し人を探すのは中々大變だから、どうかもう一人誰かを連れてきて下さい』と云ひました。

すると李逵が進み出て、

『今度の戰の原因といふのは、私が殷天錫を打ち殺したから起つた事です。それがために柴進も捉へられて苦んでゐるのですから、どうか私を連れて行つて下さい』と云ひました。宋江も吳用も、李逵はもと載宗の家に厄介になつてゐた關係もあるので、

『それではお前か行くが好いだらう。然し決して短氣な事をしてはいけない』と固く戒めて載宗に附いて行かせる事にしました。

すると載宗はすぐと四つの双甲馬を取り出して、二つは自分の足につけ、二つは李逵の足につけて神行の法を行ひながら、蘇州をさして出發しました。二人は双甲馬のお蔭で、野や山を飛ぶように馳けて行きましたので四五日するともう蘇州の城に著いてしまつたのです。その晩は二人とも城下の宿屋に泊り、翌日になつて城中城下の町を色色と探しましたが、どうしても解りませんでした。すると李逵は、

『何だ、あの馬鹿者の道人が、どこに隠れてゐて偽逵をこんなに苦しめるのだらう』と怒りましたが、これを聞くと載宗が、

『お前は何だつてまたそんな失禮な事をいふと承知しないぞ』と怒りつけたので、李逵は仕方なしに載宗のあとをついて歩いてゐました。その晩はまた宿屋に泊り、翌日は村里の方を探してゐましたが、二人ともお腹が空いて來たので、ある酒店に入つて御飯を誂へて待つてゐますと、そこへ一人の、老人が入つて來ました。

酒店の者は老人の顔を見ると、慌しくお膳をこしらへて老人の前に持つて行きました。けれども前に來て待つてゐる載宗や李逵の前には、まだお膳を持つてくる樣子さへも見えなかつたのです。それを見ると李逵はすぐに怒り出して、

『私達二人の方が先に來て待つてゐるのに、何故あの老人の方へ先に持つて行つたのだ』と喧嘩すると共に、老人の前に出してあつた酒や肴を手に取つて、大地に投げすてゝしまひました。

すると今度は老人が怒つて、

『貴樣は何者か知らないが、どうしてこんな無禮な眞似をするか』と李逵に喰つてかゝりました。が、李逵はもう口を利くのも面倒だといふ顔をしていきなり拳を振り上げましたが、その時載宗が慌てゝ飛び出して、李逵を押し止め、

『いや御老人、どうも失禮な事をして相濟みません。さぞお腹立でもありませうが、この男は元來田舍者で、禮儀も何も心得ないためにこんな事を仕出來しましたが、どうか私に免じてお許し下さい』と老人に向つて只管に謝罪りました。すると老人は、

『いや實はあなたもまだ御存じない事だから無理はないが、私はこれからまだまだ遠方へ不老長生の法といふのを毎日講きに行くのです。それが少しでも遅れるとその講義を聞く事が出來なくなるのをこの酒店の小僧達も知つてゐるので、私の顔を見るとすぐ支度をしてくれることになつてゐるのですが、それにしてもどうも此の男は實に亂暴です』とまた怒つたやうに云ひました。然し載宗は如才なく、

『はゝあ、それは結構な事です。然しその御講義と云ふのはどこにありますか。』と話をそらせて尋ねました。すると老人は、

『講義は蘇州の内の九宮縣二仙山に住んでをられる羅眞人といふ方の所です』と答へるので載宗はふと公孫勝の事が心に浮んで、

『もしかその中に公孫勝といふ人はゐないでせうか』と尚も尋ねました。

『公孫勝ですか』と老人は得意らしい顔をして、『あの人の事なら他の人に聞いても解りはしません。が實は私の

家の隣りにゐます。もとは方々歩いてゐたやうですが、此頃は家に歸つてお母さんに孝行しながら術を學んでゐます。それで以前は公孫清一先生といつてゐましたが、今は清道人と名を變へてしまひましたよ』と聞かない事まで教へてくれました。それは載宗には思ひがけない有難い事だつたのです。この二三日公孫勝といふ名をいつて尋ねて歩いても、解らなかつたのは、そんな風に名を變へてゐたためだとも心の中で思ひながら、

『いやそれは有難うございました。所でその二仙山といふのへ行くには、ここからどの位ありませうか』と尋ねました。

『まあ六七里位のものだね』

『あ、その位のものですか。然し公孫勝はいつもそこにゐるでせうか』

『あゝ、ゐなさるとも。あの人は羅眞人の弟子だから、他所へ行くやうなことは決してありません』といふ老人の話を聞いて、載宗はますゝ喜びました。

そこで二人は老人に厚く禮をいつて、外に出るとすぐに例の双甲馬をはめて、九宮縣の二仙山を指して馳けて行きました。

双甲馬をはめてゐるから、二人はすぐにその山の麓に着きました。來て見ると成程仙境といはれる通り、山の頂は劒のやうに聳え、鬱蒼とした林の松では鶴が唳き、深い谷は影の濃い色をたゝへて、どこまでも奥深く續いてゐるのでした。載宗はこゝなら公孫勝のゐるやうな所だと思ひながら進んで行くと、一人の樵夫に逢ひましたので、

『清道人といふ人のゐる所はどこでせう』と尋ねました。

『この山門を入つて行くと、門の外に石橋があります。その袂の家が清道人の家です』と叮寧に教へてくれたので、二人は山門を入つて石橋の所に來て見ると、樵夫のいつた通り、廣々とした綺麗な一軒の草茸家がありました。載宗は『お前はまあこゝに待つてゐなさい』と李逵を外に待して置て、門前の石橋を渡つて入つて行きますと、一人の童子が出て來ました。載宗はすぐと、

『もし〳〵子供さん、清道人はお宅ですか』と尋ねますと、

『えゝ先生は奥の方で仙丹を煉つておいでになります』と無邪氣に答へました。載宗はほつと安心して女蹴に行き、

『御免下さい』といひますと、今度は一人のお姿さんが出で來ました。あゝこれが孫勝のお母さんだなと思つて、厚く御辭儀をしました。

『清道人にお目にかゝりたいと思つて伺ひましたが』

『あなたのお名前は』

『私は山東の者で載宗といふ者です』

『あゝお氣の毒ですが伜は遠くへ修行に行つてまだ歸つて參りません』

『いゝえ今門の所で道人はお宅だと子供さんに聞きました。私は昔からの知合ですから、どうかお取次ぎ下さい』

と載宗は二度も三度も繰返しましたが、お姿さんはどうしても留守だといつて强情を張るのです。さうして、

『本當に不在ですから、一度お歸りになつてまたいらしつて下さい』と云ふのでした。載宗も仕方がなしに頭を掻きながら門のそとに出て來ると、李逵に向つて、

『今度はどうしてもお前に頼まなければならなくなつて來た。お前が私に代つて中へ入つて、清道人はお宅ですかと聞いてごらん。お姿さんが出て來てきつとゐないと云ふに違ひない。さうしたら何でも構はないから、家へ入つて無暗に暴れ廻るのだ。然し決して、お姿さんを傷けてはいけない。それから私が入つて行つて留めたら、すぐによさなければいけない』と云ひつけました。

暴れる用と聞くと李逵は大喜びで、中に入つて行きました。さうして、

『ご免下さい』と破れ鐘のやうな聲でいひました。すると先刻のお姿さんが出て來ましたが、今度は黒熊のやうな恐ろしい顔をした人が立つてゐるので恐る〳〵、

『どちらからいらつしやいました』と尋ねました。すると李逵は、

『私は梁山泊の豪傑黒旋風李逵といふものです。今度宋長兄の命令で公孫勝を迎へに來ました。大急ぎでどうか取次で下さい。もしあなたが取次でくれなければ、あの朽木に火をつけて見る見る中に此家くらゐ燒き倒してしまふから』と李逵はますゝ大聲で我鳴りました。

『先きもさういつて尋ねて來た方がありましたが、本當に伜は只今家に居りませんから、何度お出でになつても同

じことです。」とお婆さんは尚ほ強情を張りました。すると李逵はこの時だ、と云ふ風に『まだ嘘をつくかあッ』と雷のやうな聲を張り上げると共に兩手の斧をふるつて家の中へ暴れ込み、四邊の壁をガラ〳〵と壞し始めたのです。お婆さんは驚いて、

『何を亂暴なさるんです』と遮らうとすると、

『えゝッ、公孫勝がゐないなぞと嘘をつくなら、お前から先に殺してやらうか』とびか〳〵光る眼を剝いてかつと睨みつけながら、斧を振り上げて脅したので、お婆さんは、『うん』といつて氣絶をしてしまひました。

その時やつと家の後から公孫勝が走つて來て、

『おい李逵、亂暴をしてはいかん』と慌てゝとめる所へ、戴宗がやつて來て、

『もう好いから李逵やめなさい』といつたので、李逵は斧を下して隱和くなつてしまひました。戴宗は急いでお婆さんを起して氣附を與へ、漸々氣がつくと手をついてしまつて謝罪るので、李逵も戴宗の後の方からぺこ〳〵とお辭儀をしてゐました。

それから戴宗は公孫勝に向つて、こんど使者に來た用向を簡單に話しますと、孫勝は

『まあその事は、あつちで悠り伺はう』といつて、二人を奥座敷に案内して、そこで自分が山を下つてから後の事などを、色々と懷しさうに尋ね初めました。戴宗はそれに答へて山陣に豪傑が益々殖えたことなどを話してから、然し今度の軍には高廉の妖術の爲に味方が散々に惱まされて、これで長引いてゐたら遂には山陣まで危くなりさうな事を物語りました。そして、

『さういふ次第ですから、どうかもう一度是非山に歸つて下さい』と賴みました。すると孫勝は

『いや私とても梁山泊の豪傑諸氏とは殊に親しく交つてゐたので、先頃別れを告げて歸つてからも、どうかして一日も早く山に歸りたいと思つてゐたのですが、御覽の通り母はあゝしてもう年老てゐるのに誰も面倒を見るものがありません。それに老先生の羅眞人も私に頻りと不老長生不死の法を傳へたいといつてお留めになるので、私も仕方なく清道人と名をかへて隱れてゐたやうな次第です。決して皆さんと誓つた大義を忘れたわけではありませんが、そんなわけですから今度はどうも歸れますまい』と斷りました。これを聞くと戴宗は涙を流し、地にひれ伏して、

『今度の戰は平素の事と違ひ宋長兄も全く危い地位に居られるのですから、どうか山へ歸つて下さるやうにお願ひします』と再三再四賴みました。公孫勝もそれを見て、悲みの色を顔に

現して、

『それではともかく、先生が何と仰有るか、一應お尋ねして見てお許しさへ出れば一緒に歸りませう』といつて、戴宗も李逵を連れ、羅眞人が行をしてゐる所へ行きました。

丁度冬の初め頃でしたが、もう日はそろ〳〵と暮れはじめて、三人が山路を半ば登つて來た時分には、四邊はすつかり薄暗くなつてゐました。孫勝はもうすつかり道に慣れてゐるので、二人の案内をしながら松の樹の生ひ茂つた中を進んで來ますと、やがて羅眞人の住む堂の門前を出ました。

戴宗は門の上を振り仰いで見ると、そこには額に金字を以て紫虛觀と書いてありました。やがて三人は二人の童子に導かれて、羅眞人のゐる、松鶴軒といふ家に入つて行きましたが、そこには羅眞人が雲床といふ臺の上に、靜かに坐つてゐるのでした。

公孫勝はまづ、その前に坐つて叮寧にお辭儀をしましたので、戴宗もその後から、地にひれ伏して禮拜しました。けれども李逵だけはその傍に立つて、ぢつと羅眞人の顔を睨みつけてゐるのでした。羅眞人は孫勝に向つて、

『お前が今日、連れて來たこの二人の人はどう云ふ人だ』と尋ねました。

『これは梁山泊にゐた頃の私の友人でございます。この度、宋公明が高唐州の高廉の妖術のために苦められて、すでに危いといふので私に來てくれと迎へに來ましたから、どうか少時のお暇を下さいまし』と公孫勝はすぐと今迄の事を委しく話しました。けれども羅眞人は、

『お前は折角あんな騒がしい所を出て

來て、不老長生の法ももうぢきに修めてしまはうといふ大切な時だ。決して再びそんな所へ歸る事はなりません』とすぐに孫勝の言葉を斥けてしまひました。載宗は之を聞くと悲んで、

『いや長い事とは云ひません。高籐さへ破ってしまへば、孫勝にはすぐと山に歸るやうにしますからどうかその間だけお許し下さい』と色々と賴んで見ましたが、羅眞人はどうしても好いと云はないので、しほしほと家まで歸つて來ました。さうして、

『どうしたら好いだらう』『困つたなあ』と云ふやうな事を云い合つてゐますと、李逵がその傍から、

『先刻あの眞人は何と云つたのです。私にはちつとも云ふ事が解らなかつた』と云ひますので、『眞人はどうしても孫勝を歸してくれないのだ』と載宗が話して聞かせました。すると李逵は眞紅になつて怒つて、『よしそれなら俺がこの斧で叩き切つてやる』とすぐと馳け出しさうにしましたが、

『何を失禮な事を云ふのだ』と云つて載宗が漸くなだめて止めました。すると孫勝が、『今夜はもう晩いからともかく眠ることゝして、明日また色々相談することにしませう』と云つたので三人は臥床に入つてしまひました。

けれども李逵は仲々眠ることが出來ませんでした。折角孫勝を尋ね出して、連れて歸ることが出來なければ、宋江明の身體迄も、危くなつてしまふのだ。何事も、大切な宋江明には代ることが出來ないから、もうかうなれば構はない。あの眞人を切り殺して、明日は公孫勝を連れて歸らうと、獨りで心に決めると、二人の寢息を窺つて、そつと寢床を脱け出しました。そして二つの斧を兩手に引つ提けて、月の光を賴りに二仙山を馳け登つて行きました。

やがて彼の紫虛觀と書いた門の前まで來ましたが、門の扉が閉されてゐるので足を躍らせて垣根を飛び越え、松鶴軒の前に來て、ひそかに中を窺ふと、羅眞人はまだ雲床の上に坐つてお經を讀んでゐました。李逵は心の中で、

『馬鹿坊主め、今夜は貴樣がこの世の別れだ』と嘲笑ひながら、そうつと後ろに廻つて、斧を振つて斬りつけたので、眞人は床の上からごろ〳〵と轉り落ると、眞白な血が四邊にどく〳〵と流れて一抔となりました。

『成程行を積んでゐるので、血の色も白くなつてゐるのか』と思ひながら出て來ると、一人の童子がばた〳〵と馳けて來て、

『この惡者奴、何故お師匠樣を殺したか』と呶鳴つたので、李逵は斧を取り直すと、たゞ一打に斬り殺して、門のそとに出ると、飛ぶやうに二仙山を馳け下り、公孫勝の家に入いて何喰はぬ顏をして臥つてゐました。（つゞく）

毛燒の權兵衛

伊藤睦男

昔、遠州の國の葉梨村といふ所においどの權兵衛といふ、お金持の百姓が居りました。おいどとは、どういふ譯か知りませんが綽名でした。

權兵衛さんは年を老つたので、自分では隱居して、家のことは息子さんがやつてゐました。それですから、權兵衛さんにはこれといふ仕事はありませんでしたが、時々一里半程離れた、隣村の市へ行く事だけを仕事にしてゐました。權兵衛さんは市で買出しをしては、それを賣り捌くのでした。お百姓が使ふ、鍬とか鋤などを買ひ込んだり田畑で獲れる穀物などを賣り捌くのです。

權兵衛さんは、自分の用事がむすと、家で待つてゐる、孫達のお土產を買つたり、又時々はお酒を少し飲んだりして、にこ〳〵しながら歸るのでした。

さうして、長い間、同じやうに、同じ道を、馬を引いては通つてゐました。

市場まで行く道には途中に小さい峠があつたり、川があつたり、又木の蔭になつて夜でも月影のさゝない淋しい谷間もありました。權兵衛さんの家から村へ通じてゐる街道へ出ると、直ぐに村境の高い橋へ來ます。橋までの兩側には田圃なので、春には黃色い菜の花が青い麥の中に紋畫の模樣のやうに咲いたり、秋になると一面の黃金の波が爽かな秋風にざわざわと立つたりするのです。橋を渡つて暫く行くと爪先上りの坂になつて、もう峠へかゝるのです。橋の下の川には、兩岸の赤土を鋤鉾型に穴を掘つて其中に小さな蟹が澤山ゐるので、村の子供が連立つて遊びに來る所です。

峠といつた所が土は畑になつてゐる程の極く低い丘です。それでもその眞中頃に行くと、里から便利が惡いので、木や草が勝手に生えてゐる原になつてゐます。その原を通つて、又下へ降りると、市の立つ隣村なのです。晝間のうちは、村の人や物を賣つて歩く商人達が通りますが、夜になるとほんとに淋しい原になつてしまふのでした。

原には一尾の狐がすんでゐました。狐には兩親があつたのでしたが、葉梨

村の獵人で、その邊一といはれる名人の作次郎に鐵砲で撃れてしまつたのでた〻一尾淋しくすんでゐました。晝間のうちはお陽樣が明るく照つてゐて、小鳥が鳴いたり、兎が出てきたりするので、面白く暮せるのですが、夜になると小鳥は巣に歸つてしまふし、兎は穴に入つてしまふし、あたりが眞暗くなつて、ほんとに淋しくなつてしまふのでした。それですから、狐は眞丸いお月樣の前で、跳たり躍つたりして遊びたい夜があつても、仕方なしに早くから穴の中へ入つてしまはなければなりませんでした。

ところが市は夕方から始まるので、市のある度毎に夕方になると權兵衛さんが馬をひいて通るので、狐はすつかり權兵衛さんを覺えてしまひました。狐はつまらなくて、一人ぼつちでゐるのですから、權兵衛さんを覺えてしまふと、何んとか言葉をかけて見たくて堪まらなくなりました。それにいつも權兵衛さんが行く時は、にこ〳〵と悅しさうな顏をして節面白く歌を歌つて行き、歸る時は、行きよりも悅しさうで、馬の上には色々な物がのせられてありました。赤い頭布などを見た時は、あんまり綺麗なので、狐は不思議に思つた位でした。一體どこからどうしてあんな綺麗なものを持つて來るのだらうと考へました。さうなると、狐は權兵衛さんが何處へ行くのか、尋ねて見たくて堪らなくなりました。

或る夕方、權兵衛さんが例のやうに馬をひいてやつて來ると、狐は堪へきれなくなつてたうとう恐いのも忘れて『權兵衛さんどこへ行かつしやる。』ときゝました。

誰もゐない筈の原の中でいきなり尋ねられたので、權兵衛さんはぎよつとしましたが、見ると可愛い狐が道端で言つてゐるので安心して、

『市場へ行くのだ。』と答へました。

狐はそれでやゝやく解りました。權兵衛さんは市場へ行くので、市場には色々な物を賣つてゐるのだ、とわかつたのです。さて、さう解つて見ると急に狐は市場へ行つて見たくなりました。けれど、何をするか知れもしない、初めて口をきく權兵衛さんに伴れていつて下さいとも頼めないので、そのまゝに別れてしまひました。

それからは、權兵衛さんが市場に行きに通る度毎に、狐は待つゐて、『おいどの權兵衛どん、又市へ參じしやるか。』と云ひました。さういひく〳〵原が終る所まで、ついて行きました。

狐はもし權兵衛さんが何んとか返事をしてくれたら、私も伴れていつて下さいと頼む積りだつたのです。所が權兵衛さんは、默つてどん〳〵馬をひいて行つてしまふのでした。

いくら云つても權兵衛さんが知らぬ顏で行つてしまふので、狐はいつか、からかつて見ようと云ふ氣になりました。そして之までは普通に話しかけるやうに『おいどの權兵衛どん、又市へ參じしやるか。』と云つてゐたのを、今度は調子を變へて馬鹿にするやうにいつて見ました。すると中々面白いので、ます〳〵權兵衛さんを馬鹿にするやうに云ひました。

それは、或る秋の終り頃の寒い晩でした。權兵衛はいつものやうに馬をひいて、襟卷を深く卷きつけて、原にさしかゝりました。すると、狐が待ちかまへて權兵衛さんをからかひはじめました。權兵衛さんも、初めのうちは淋しい原だから、狐が物をいふのでも却つて賑かでいゝと思つてゐる位で氣にもとめませんのでしたが、此頃のやうにうるさく出て來てさも自分を馬鹿にするやうにいふので腹の中では怒つてゐました。そこへ、丁度出て來たので權兵衛さんは『よしそれなら!』と何か考へつきました。狐はいつもの調子で、『おいどの權兵衛どん、又市へ參じしやるか』と云ひました。

すると權兵衛さんが、

『どうだ狐、お前も伴れて行つてやらうか。』といつて足を留めました。狐はびつくりしました。

『どうだい、伴れて行つてやらうかね。』とまた權兵衛さんがいひました。

狐はすつかり安心して、

『伴れて往つて下さい。』と、急に丁寧に云ひました。

權兵衛さんはまづ莨に火をつけて、それから、さも、もつたいらしく市場の話をはじめました。狐はもう行きたくて堪らないのですから、泣く樣につれて行つてくれと頼みました。すると權兵衛さんは、やつと立ち上つて狐を馬の上へ乘せ、そして落ちるといけないからと云つて、固く鎧に縛りつけてし

まひました。さうして置いて、馬を引きはじめました。狐は馬の上から、市場の話を色々と聞きました。權兵衛さんは、さも面白さうに話し出しました。

『市場には夜でも晝間のやうに燈がついてゐて、大勢の人達が集つて來るのだ。そして、いろ〳〵な見世物が出てゐたり、又店には美しい頭布だの美味しいお菓子だの、面白い玩具だの何んでもあるのだ。此世界で一番面白い處は市場より他にない。』と、話上手に云ひました。

狐はそれをきくと、もう悅しくて、馬の上で躍つて喜びました。そして、何んだか眼の前に明い市場の通りが見えるやうに思ひました。

話に夢中になつてゐるひまに、權兵衛さんはわき途を過つて市場へは行かず反對に自分の家の方へと引き返しました。狐はちつとも知りませんでした。

峠の坂の上までやつてきました。其處は突き出た見晴のいいところなので、權兵衛さんの村の方が一目に見えるのです。恰度夕方少し晩くなつた位なので、田ではまだ焚火をしてゐたり、家の中の燈火も薄暗の中に點々と綺麗に見えてゐました。狐はそれを見て、驚いて、權兵衛さんに云ひました。

『權兵衛さん、あるぶん火が見えますが、あれは何んですか。』

すると權兵衛さんは、

『市で物を賣つたり買つたりするのに眞暗では、何にも解らないから、それで燈火を點けてゐるのだ。』と答へました。そして、どん〳〵と谷をまがりくねつて降りて行きました。

山を下り切つて橋を渡つて、權兵衛さんの村に入つて來た時分には、田で焚火をしてゐたお百姓達は皆な火を消して家へ歸つてしまひ、どこの家でも寒いので戸を閉めてしまつたので、四邊は眞暗でした。狐はあんなに見えた火が見えないので、不思議に思つて、そのわけを權兵衛さんに尋ねました。

すると權兵衛さんは、

『先刻は高い山の上だつたからよく見えたのが、市は家の向うになつてゐるので、蔭になつて見えないのだ。もう少し行くといよ〳〵市に着くのだ。』とうまく欺してしまひました。それからは默つて大急ぎで自分の家へ歸つて來ました。でも、狐は更不思議に思つて、

『權兵衛さん、これは人間の家らしいが、市はどこにあるのです。』と、きゝました。權兵衛さんは、それには答へないで家の方へ向つて大聲で、

『今夜はお客樣をつれてきたから、誰でも大急ぎで松明を點けておくれ。』と呶鳴りました。家の者はお客樣と聞いてびつくりして、直ぐ息子さんが大きな松明に火をつけて出てきました。權兵衛さんはその松明を取るが早いか、

『やい惡戲狐、貴樣はよくも俺を馬鹿にしたな。今夜はうまく欺してつれてきたのだから、此松明で燒いてしまふからさう思へ。』と、大聲で叫びました。

狐ははじめて自分が欺されたことを知つて馬から飛び下りて逃げやうとしましが、固く縛つてあるので逃げられませんでした。もがけばもがく程、手足に繩が食込んで痛くなりました。

權兵衛さんは、ほう〳〵と眞紅に燃え上る松明を狐の鼻先で振りまはしました。狐はひい〳〵と泣きながら、詫まりました。狐はひい〳〵と泣きながら、

『あんまり一人ほつちで淋しいので、ついあんなことを云つたのです。』と、詫まりました。それを聞くと、元から意地の惡い權兵衛さんではありませんから可哀さうになつて、

『それならこれから決して人に惡口を云つたり、惡戲をするのではないぞ。』と云つて逃してやりました。

その事があつてから後、權兵衛さんか市へ行くために原を通ると、狐はちやんと路ばたに坐つてまつてゐて、原の終るところまで送つて行きました。

權兵衛さんはそれから隨分長生をしました。そして死ぬまで市へ馬を引いては通ひました。たゞ、先とは違つて、それからはきつと市の歸りには狐の好な土產を持つてゐました。この話から、權兵衛さんのことを毛燒の權兵衛さんといふやうになりました。（をはり）

大泥棒

霜田史光

一

昔、印度のヒマラヤ山に悪者が一群棲んでゐました。その頭は蛇王と云つて、體中に大蛇の刺青がしてありました。姿も大きく、顔も髭ぼうゝと生えて、見るから恐し氣な惡黨面でした。

蛇王は時々部下の者共を連れては村や街へ出て來て財を奪ひ取つたり人を殺したり、家に火をつけたりしますので、人民は大層蛇王を恐れてゐました。若し、蛇王が村の道でも通り掛ると、村の人達はひどい目に遭はないうちにと、種々な贈物をして蛇王の御機嫌を取つてゐました。その爲めに大泥棒の蛇王は益々つけ上つて威張り散らし、惡い事の仕法態をしてゐました。ですから人民の困り方は一通りではありません。折角一年の汗水を絞つて作り上げた米麥も、蛇王に來られると一晩で持つて行かれてしまふ仕末です。

蛇王は強い男である上にその部下も澤山居ましたので、役人なぞが征伐しようとしても反對に負かされてしまふ位でした。それで、蛇王は自分より強い者はないと云ひふらして、終ひにはこの國を取るのだと云つてゐました。それを聞いて印度の王樣は捨てゝも置けないので、兵隊を何百人となく連れて二度も三度も征伐に向ひましたけれども、蛇王はそんな時にはいつでもヒマラヤ山の奥に逃げ隱れてしまふので、どうすることも出來ないのでした。

その頃、印度の國中の人達に敬はれてゐました大僧正がありました。この大僧正は始めは名もない寺の坊さんでしたが、だん〳〵とその偉いことが解つて、今では印度一の寺の住寺になり、大僧正の位についたのでした。

大僧正は蛇王のことを聞いて大層世間を憂ひました。そしてどうかして蛇王の勢を打挫かなければならぬと思ひました。

大僧正は今迄もその教への力で、惡者を改心させて良い心の人間にした經驗が幾度もありますので、今度も蛇王を改心させて、そんな惡事を止めさせたいと考へたのでした。それで、大僧正は弟子達の止めるのも聞かずに唯一人、蛇王の住んでゐるといふヒマラヤ山へ這入つて行きました。

印度はいつでも暑い國ですが、大僧正の出掛けた時は、殊に暑い盛りでした。大僧正が額から汗をタラ〳〵と流しながら杖をついて村の道を通ると、澤山の人達は皆家の中から出て來て、地べたへ手をつき伏し拜みました。そして、

「大僧正樣、この暑いのに何處へ御出かけになりますか。」と訊ねるのでした。

『わしはこれからヒマラヤ山へ入つて、蛇王を說き伏せて改心させる心算ぢや。』

それを聞いて村人達は驚きながら、

『それはまア滅相もない。あの蛇王ばかりは惡人も惡人、この上のない惡の凝り固まりで、いくら大僧正樣の有難い御言葉でも改心しつこはありません。そればかりでなく、若しかすると、大僧正樣に害を加へるかも知れません。』と云つてしきりに止めましたけれども、一度固く決心した大僧正は決して止まりませんでした。

『わしはどうあつても行く。例へ蛇王に殺されてもよい。この國の人民の苦しみを見てはゐられぬ。何、わしは屹度蛇王を尊いお釋迦樣の教への力で改心させて見せる。』と強く云ひ切つて出掛けました。

二

蛇王は大僧正が自分を懲しめに來ると云ふことをその部下の者から聞いて、大層怒りました。如何に大僧正が偉くとも、

かうした悪い心の者にとつては、其處らの生臭坊主と同じやうに思はれてゐるので、蛇王は若し大僧正が來るならば、却つて此方から反對に懲しめてやらうと待ち構へてゐました。そして、部下の者を五六人山の麓の方へ見張にやつて、大僧正が來たならばすぐに知らせるやうに命令て置きました。

或日のこと、部下の者は蛇王の所へ駈けて來て、麓の方から大僧正が登つて來たことを知らせました。そして顫へながらかう申しました。

『私が麓の大岩の角で見張りをしてゐました所、向ふから黒の長い衣を來て枯枝の杖をついて登つて來る年とつた坊主を見ましたから、早速「貴樣は何だ。」と聲をかけました所、その坊主は默つて私の前を通り過ぎようとといたしました。それで私は「此處を通ることはならん。」と呶鳴りつけました所、大僧正は「俺は用があつて蛇王に逢ひにゆくのだ。」と云つて私をグッと睨みつけました。その眼の光の恐ろしいこと、私は一眼見られたゞけで、まるで雷にでも打たれたやうに、危く倒れさうになる位よろけました。それから一生懸命に此處まで逃げて來たのでございます。』と云つて、その部下はさも恐ろしさうにまた身顫ひをしました。蛇王はそれを聞いて、

『何だ、意氣地なし奴、たかが大僧正の一人位そんなに恐いのか。』と叱りつけましたけれども、蛇王自身もそれを聞いていくらか大僧正が恐くなりました。そして蛇王は『これはひよつとすると、大僧正の方が自分より強いかも知れないから一つ計略をもつて大僧正を負かしてやらう。』と考へました。

やがて大僧正は枯枝の杖をつき、黒の長い衣を地に引摺るやうにして蛇王の住居の前に立ちました。それを見た蛇王はすぐ樣自分で出て來ました。

『これは〳〵誰方かと思ひましたら、大僧正樣でございますか。よくお出で下さいました。さアどうぞお上り下さいまし。』と云て先に立つて家の中に招き入れました。大僧正は此處に來たら蛇王が屹度自分を咎めて或ひは殺しに掛つて來はしないかとさへ思つてゐましたので、この丁寧な蛇王の挨拶を見て意外に思ひました。そしていくらか氣味も惡くなりました。それで心の中では十分氣をつけながら、蛇王の後について家の中に入りました。

蛇王は如何にも大僧正を喜び迎へるやうにして、澤山の御

馳走を出して大僧正を饗應しました。大僧正は始めのうちは油斷をせずに御馳走にも少しも手をつけずにゐましたが、そのうちに蛇王と種々と話をしてゐる間に、『これは思つた程蛇王は惡い心の人ではないわい。』と思つた爲めか、少しづつ氣が緩んで來ました。それでも蛇王に尊いお釋迦樣のお教を話して聞かせました。

『人間には因果應報と云つて、善いことをすれば屹度いつかその報ひに逢つて幸ひを受けるけれども、惡いことをすると矢張同じやうにその報ひが來て、辛い目に遭はなければならない。だからお前さんも今の中に改心してどうか善いことに働いて今迄の罪亡しをして貰ひたい。』と云ふことを、種々な話に混ぜてしみ〴〵と話して聞かせるのでした。

蛇王はそれを聞いて、さも改心したかのやうに一一點頭いてゐましたが、

『私も大僧正樣の貴いお話を聞いて今迄の惡い心をすつかり改めます。そしてこれからは善い事に働きます。』とさも誠しやかに申しました。大僧正はそれを聞いてやつと安心したやうな微笑を顏に浮べて、

『それを聞いて俺もはる〳〵ヒマラヤ山まで來た甲斐があると云ふものだ。お前さんがさうした心持になつたのなら、俺はお前さんに差し上げたいものがある。』と云つて大僧正は懷中から一つの鏡を取り出しました。それは如何にも古ぼけた差渡し一尺位な鏡で、その面を見ても、ろくに象も映らないものでした。けれども大僧正は、さも大切なもののやうに丁寧に蛇王の前へ置いて、さてかう云ふのでした。

『この鏡は人の心を映す鏡で、見る人の心が曇つてゐるうちはこの鏡の面も曇つてゐる。その人の心が清く澄んで來ればこの鏡の面も澄んで來てはつきりと自分の顏を見ることが出來る。これをお前さんに上げるから毎日々々この鏡の面を拭き清めるがよい。と云ふのはつまりは自分の心を清めることです。』と云つて大僧正は鏡を蛇王に渡しました。蛇王はそれを何氣なく手にとつて見ますと、驚いた事には自分の顏は少しも鏡に映りません。鏡の面は眞暗なのです。はつと思つて鏡を下へ置きましたが、何んとなく息苦しい氣がしました。

大僧正は、

『お前さんも改心したのだから少は鏡に顏が映るであらう。』と申しましたが蛇王は映らないとも云ひ兼ねて、

『はい、はつきりとは映りませんが、顏らしいものが映ります。』と申しました。大僧正はそれを聞いて大層安心したと見えて、やつと御馳走にも手を出すやうになり、その晩は蛇王の家へ泊りました。

悪い心の決して改まらない蛇王は其夜どうしたでせうか。可哀さうに多くの人に佛樣のやうに敬はれてゐた大僧正も、眠つてゐる間に蛇王の爲めに殺されてしまつたのでした。

三

蛇王は大僧正を首尾よく殺してしまつて、これで自分の邪魔をする者がなくなつたと獨り喜んだのであります。けれども尊い身の大僧正を殺した蛇王が、何んでそのまゝ無事に過せませう。大僧正を殺した蛇王の身はその後次のやうな事が起つたのであります。

蛇王は邪魔者の大僧正を殺して一安心したものの、流石に尊い身を殺したことが空恐ろしくて、大僧正の魂の籠つてゐると云ふ鏡をいつとはなしに毎日々々暇さへあれば拭き清めるやうになりました。そして蛇王はさうした昨蛇度、『赦して下さい大僧正さま。』と歎を歎ふやうに節附けて小聲で云ひながら、羊の皮で鏡の面を拭ふのでした。蛇王はかうしたことによつて、少しでも大僧正にお詫びをするやうな氣持だつたのです。

かうして蛇王は毎日々々鏡の面を拭き清めるやうになりましてから、村や街の方へ行つて悪い事をすることも少なくなりました。それと云ふのは何日でも盗みに出掛けようとする時に、何んとなく氣に掛つて一度鏡の面を眺めるのです。鏡の面はあれ以來未だに曇つてゐて何も見えませんけれども、何とはなしに自分の行くのを止るやうな氣がするのでした。

それで、悪い事に出掛ける度數も少なくなりましたが、その内にふつつりと出掛けなくなつてしまひました。蛇王の心の中では殺してしまつた大僧正の尊い言葉が、だん〳〵と強く有難く、尊さが増して來るのでございました。大僧正の教への言葉がだん〳〵悪者の蛇王の心に響いて來たと共に、蛇王は今迄自分のしたことがだん〳〵空恐ろしくなり悔まれて來たのでした。

それでも毎日々々暇さへあればいつもの通り、『赦して下さい大僧正さま。』と節附けて云ひながら、鏡の面を拭つてゐるのでした。その爲めか、鏡の面はだん〳〵と明るくなつて來ました。そのうちに何かほんやりと映るやうな氣がし出しました。蛇王はそれは間違ひなく自分の顏だと思つてゐましたが、だん〳〵拭いて行くうちに、何んだかそれは大僧正の顏のやうにも思はれて來ました。蛇王はそれと氣がついて、益々自分の惡かつた心を悔ひ、時には涙を流しながら鏡の面を拭いてゐるのをその部下に見られたことも度度となくありました。

蛇王が尙も毎日々々鏡の面を拭いてゆきますと、だん〳〵と映る物が判然としだしました。始めは自分の顏だと思ひ、後には大僧正の顏だと思つたのが、いよ〳〵映つて見ると、それは自分の顏だつたのでした。蛇王は自分の顏がほんやりながらも映つて來たことをどんなに喜んだか知れません。そしてやうやく眞底から改心するやうな氣になりまして、或日今迄盗んであつた金銀や寶物、その外澤山の穀類まで、殘らず村や街へ持つて行つて返えてゐる所へは返し、返えてゐないものは貧乏人にやつてしまつたのでした。さうして蛇王は

さも心持よささうに部下の者を集めて申しました。

『これで己れもさつぱりした。己れは今迄惡い事と善い事の區別がつかなかつたので、己れは大僧正樣を殺してから、却つて大僧正樣が有難くなつて來た。もう今では心の底から改心したから、お前達も思ふ所へ行つて呉れ。己れは一人になつて大僧正樣の下すつた寶い鏡を拭き清めるのだ。』と申しました。そして部下の一人々々に自分の持物を分けてやり、また心ある者は改心するやうにと呉々も諫めて立去らせました。

蛇王はたうとう獨りになつてしまひましたので山の中にもゐられず、里の方へ出て來ました。

里へ出て來た蛇王は落ぶれて乞食になつてしまひました。けれども肌身離さず持つてゐる大僧正から戴いた寶い鏡は、拭かれる度にだんだんと明るさが增して來るのでした。蛇王は今迄王樣のやうな暮しをしてゐたのが急に見すぼらしい乞食になつてしまつたものですから、村人なぞも後姿を指して、

『大泥棒のなれの果、いゝ氣味だ。』と云つては蛇王を見下しました。それでも蛇王がゆくと大抵の家は何か呉れました。

と云ふのは情けで呉れるのではなくて、昔の蛇王を恐れてゐたからなのでした。

蛇王は村人が自分に食べ物をくれるので、益々人情の溫味を感じ出し、昔の王樣のやうな暮しより今の乞食の生活の方が、蛇王にとつては喜ばしいものとなりました。

四

蛇王の心は益々よくなり、鏡

の面もだん〳〵と明るくなつて來ましたが、此處に困つたことが出來ました。と云ふのは蛇王がすつかり從順しくなつたことを知つた村人達は、もと〳〵蛇王を憎んでゐるのですから、いつとなくどの家でも食べ物をくれないやうになつてしまひました。蛇王が働かして貰ひたいと云つても、使つてくれる家もありません。蛇王はお腹が空いて動けなくなりました。

『次の村にはまだ情があらう。』と思つて次の村に行かうとして、やつとこ、すつとこ村境の土橋の上まで來た時に、もうどうにも動けなくなつて其處へ倒れてしまひました。

蛇王がその儘死んでしまはうとした所へ、運よくも一人の男が通り掛りまして、救け起してくれました。その男は蛇王の顏を見て驚いて聲を上げました。

『おや、あなたは蛇王樣ではありませんか。』

蛇王も驚いて見るとそれは部下であつたマヤでしたので、

『あゝ、マヤか、己れは腹が空つて歩けない。』とやつと申しました。

『何、腹が空つたのですと、蛇王樣とも云はれる人が何んと云ふだらしのないことです。幸ひ此處に通りの角の店から盜んで來た饅頭があります。おあがりなさい。』

蛇王は饅頭を出されて、矢庭に大きなのを五つ六つ平げてしまひました。そしてやつと元氣づいて來ました。マヤは小川へ降りて水を掌に掬んで來て蛇王に飲ませ、さてかう云ふのでした。

『どうです、蛇王樣、もう一遍元の仕事をやらうではありませんか。聞けばあなたは改心して乞食をしてゐるとかいふ話ですが、今あなたが召上つた饅頭だつて私が盜んで來たのですぜ。いつその事つまらない改心なぞは止めて、元々通り大泥棒にならうではありませんか。』

蛇王はそれを聞いて手を振りました。

「己れはもう決してそんなことはしない。」と固く云ひ切つたのであります。

其處へ村人が五六人手に手に棒を持つて追ひかけて來ました。そして、『泥棒。』と云つたかと思ふと、蛇王とマヤとに打つて掛りました。蛇王は仕方なく起き上つて一人の男の脇腹を蹴りました。

その男はウンと云つて仰向けに倒れてそのまま息が絶えた樣子です。蛇王もまだ體に元氣がないので後へ尻餅をつきました。その間にマヤは劒を拔いて斬つたり追ひ散らしたりしました。

蛇王はほつと一安心して見ると、自分は人殺しをしてゐたので落膽いたしました。マヤはすかさず、

『蛇王樣、あなたは盜んだ饅頭を食ひ、人殺しをしたのです よ、それぢやァ改心もなりたちますまい。もうそんなことは止めてまた元の通りにやりませう。』と云ひました。

蛇王の心の中はまるで渦のやうに舞つてゐました。折角伸びて來た善い心が、胸の中で元々の惡い心と戰ふやうな氣がしました。

暫らく默つて考へてゐた蛇王は、急に決心したらしく、

『よし、己れは改心なぞは止めた。もうどうせかうなれば仕方がない。元々通りに山へ籠つて大泥棒をやらう。』ときつぱりと云ひ切つてしまひました。

蛇王はまた惡者になり變つてしまひました。山へ籠つて澤山の部下を集めて、惡い事の限りを盡すやうになりました。ひもじい故のたつた五つ六つの饅頭が、たうとう善人になつた蛇王を惡者に返してしまつたのです。

その後蛇王は大僧正から戴いた鏡を見ることを厭がりました。勿論拭くことなぞはありませんでした。

今夜も蛇王は街へ行つて人殺しをし、澤山の金銀や食物を奪つて歸つて來たのですが、今夜に限つて何んとなく鏡が見たくてならなくなりました。それは何んだかまだ鏡の面が光つてゐるやうな氣がしたからなのです。

蛇王は心の中で恐れながら、そつと鏡を出して見ました。そして、蛇王の身體は氷を浴びたやうにぶる〳〵と顫へました。

鏡の面には實に見るも恐ろしい顏が映つてゐたのでした。

蛇王はこれが自分の顏かと驚いたのであります。然し、どう見ても自分の顏らしく思はれます。

蛇王は恐れながらもその後は毎晩そつと鏡を出して見ました。すると自分の顏は一日毎に恐ろしい形になつて來ます。終ひには鏡の内から飛び出して蛇王に喰ひ付きでもするかと思はれる程になりました。

或夜のこと、蛇王は矢張そつと鏡を出して見ましたが、その面に映る顏があまりに恐ろしいので、思はず石の柱へ叩きつけました。鏡は大きな音を立てゝ破れたやうでした。

部下の者達は蛇王の部屋で大きな音がしましたので、斷けて來て見ますと、蛇王は石の柱に頭を打ち當てゝ其場へ倒れてゐました。體へ手を觸れて見ても、もう冷たくなつてゐました。その傍には不思議な鏡が元の儘で、何も映らない程曇つてゐました。

蛇王は鏡を破すつもりで、自分の身を殺してしまつたのでした。鏡の中に映つてゐたのは、あれは本物の蛇王だつたのでせう。《をはり》

鳥のきたひ

若山牧水

ヒインコツコツ　ヒンコツコ
あれあれ啼くのは　鶸の鳥

あれあれ御覽よ　日のあたる
お庭に來てるは　鶸の鳥

あれあれ御覽よ　二つ紋
紋附着るは　鶸の鳥

あれあれ御覽よ　ヒンコツコ
お辭儀してるは　鶸の鳥

ヒインコツコツ　ヒンコツコ
啼き啼きお辭儀は　鶸の鳥

童謡

野口雨情選

（大人篇）

桐の葉

群馬県 新町 江原 俊夫

桐の葉の
くきをひろつて
笛にして
父さの歌を
ふいたらば
かなしい音が
ころりでた。

月と梟

東京府 西巣鴨 岡添信次郎

もんもん森の上　森の上
銀色お月さん　まん丸い
もんもん森の中　森の中
梟の眼玉も　まん丸だ

こう屋と炭屋

神田区 茨城郡 小川 桂一

こう屋のおつたん
日向でさ
朝から晩まで
きれ染めた。

炭屋のおつたん
日陰でさ
朝から晩まで
炭つくり。

おひる

群馬県 尾川村 青柳 花明

草の葉つばの
てんと蟲
てんとさまどこだと
眺めてた。

てんと様天じよの
まん中だ
お畫だお畫だ
まゝ食べな。

あられの足音

北海道 土手町 丘 村 晃

あられの足音
屋根の上
ぱらぱら　ぱらぱら
屋根の上。

どこへ行くのか
あられさん
ぱらぱらお屋根を
歩いてる。

人焼くけむり

神戸市 多聞通 村 たつま

ほそほそけむり
人焼く煙
天は極楽
地は地獄
まつすぐ上れ
おそらへ上れ

お月さん

山梨県 明野村 北村總之助

お寒う　お寒う
お月さん
坊やの母ちやん、まだ田圃
稲こき　稲こき
まだ田圃。

月夜のいたち

仙臺市 北野 牧夫

いたちのかけほし
うつつてる
いたちがかくれて
見て居ても
かべにかけほしうつつてる。

二階の下

岡山県 早島町 足高 奐一

ちらく雪だ
二階の下を
大きな傘が
ゆうらゆら、ゆらら
一本町長い
チラく雪だ。

日があたれ

廣島市 紙屋町 牧野眞砂子

お山お山に
日があたれ
こかあ
こかあ
さあむいよ。

落葉さん

千葉県 國分村 渡邊 四郎

カラカサおくれ
カサくれと
風と一しよに
落葉さん
私のあとを
追ひかける
山から雨が
降つてきた。

だいだい

香川県 引田校 寺村 幸夫

冬が來る來る
敏ちやんの裏の橙
赤くなる
私の顔が青くなる。

お日様

愛知県 尾張 伊藤正之助

お日さまゆツくら
ねむらツせ
今日も一日
ごくらうさん
お日さまゆツくら
やすまツせ。

ガラスのお窓

東京市 東淺町 南須原靜也

ガラスの窓からお人形は
あをいめゝして見てました
コンコン粉雪、みぞれ雪
ガラスのお窓も冷たかろ

（小供篇）

おうちの突煙

山梨県 多麻校 藤原 清水

おうちのえんとつ
かさとれた
おゆにはひつてみてゐると
風がびゆうくふいてゐた
クツのかんばん　があたがた

線香の道

山梨県 村山西校 山本よしみ

細いく線香道
死んだ姉さん
通つてる

お星さん

秋田県 坊瀬村 高桑 豊

キラキラ光るお星さん
お前はお空のコンペート
私の口へ落ちて來な

柿の葉

山梨県 廣里東校 小宮 時子

柿の葉ほたく
落つて來る
やつぱり地の下
こひしいか
去年のはつぱが待つてゐよ
母さんはつぱが待つてゐよ。

風

山梨県 廣里東校 溝口 節子

風がピューと
あいづをすると
ごみとすなとがかけつくら
ごみかて　すなかて
みんなかて

うすひき

和歌山縣 雑賀上校　田和　秀夫

うすひき
ごろ〳〵
かみなりさん
もみがら
はだかで
とんでる

夜の川

京都府 三條校　糸井　美宜

長い川水
どこへ行く
夜つぴてながれて
どこへ行く

ほし

茨城縣 竹園校　金子　雅

母ほし　子ほし
きれいだな
空一ぱいの子はしたち
母ほし一人で

そだてるの

飛行機

栃木市 蔵塚幼稚園　北村　正夫

今日は天氣で
あつたかで
そらは　はろばろ
はれてゐる
飛行機　南へ
とんでつた。

ポプラ

東京市 三越小供舎　池野　康治

ポンポンポプラ
サラサラ葉
一ひら二ひら
散つて來る

夜

千葉縣 東金校　高宮　五郎

らんぷのほやを
みてたらば
とんとんとなりで

わらをぶつ

とんとんよなべに
わらぶつてる

ちぎれ雲

茨城縣 吉沼校　飯島孝太郎

ゆうがた頃に
たゞ一つ
迷子の迷子の
ちぎれ雲
林の上で　はぐれてた。

つるゝ

阿川郡西 大工町　秋葉　謙子

つるゝを
落して
たべましよか
つるゝは
つる〳〵
冷たいね。

雪の道

牛込區 市ケ谷　伊藤登良男

サック　サック音がする
雪をふんでく　音がする
子供がふんでく音がする
音はだん〴〵
遠くなる

親子鳩

牛込區 赤城校　砂田　旻

小さな親子の白鳩は
いつもお寺の巣の中で
仲よく仲よく　くらしてる。

綿雪

山形縣 田外野町　佐藤郁草子

綿雪ほつたり
ほつたりこ
お顔隠した　お日さん
だまつて空から
降らせてる
一つほつたり
ほつたりこ
綿雪ほつたり
ほつたりこ。

幼年詩

若山牧水選

尾長鳥（賞）

山梨縣北巨摩郡 村山西校高一　山本　みさへ

垣根のそとで
尾長がこつそりお夕はん、
私のゐるのを知らないで、
食べて小やぶに寢に行つた。
柿が半かけ殘つてた。

評、かわいゝ尾長鳥よ。（牧水）

汽車（賞）

新潟縣中頸城郡妙高校尋六　小川　美江

月がでた　月がでた
ぞうぞ山から月がでた

綴方

編輯部選

かしこい子供（賞）

岐阜縣稲葉郡 本荘校尋六　岩田　毅

學校の行きに、このへんで見た事のない、小さい子が、一人で東の方へ行くので、僕は良雄君に『やあ、あの子小さななりして、一人ずう〳〵行くが、はぐれたかどうだらうや。』といふと『さうだなあ、あんな小さななりして行くでわからんぞ。』『聞いたろまいか。』といつて走つておつかけた。

おひついて『おい〳〵。』と言ふと、『なんぢやなあ。』と六つぐらゐの物の言ひやうで返事をするから『おまさんどこへ行くの。』と、聞くとあごを出して『六條。』それで『六條のどこだなあ。』『まんだすうつと行くの。』と言ふ。『おまさん幾つだなあ。』と聞いてやると、小さな赤いよく肥えた手を出して、親指と小指をまけて三本指を見せて『こんだけ。』『三つかなあ。』『ほん。』『家どこだなあ。』良雄君が聞くと『しやうぶ池。』といつて、『六條のおばあの所へ行くの。』とつけ足してさつさといつてしまつた後で家の坊も三つだが物もほんとによういへせん。そんなしやうぶ池から六條なんてとてもよう行けせん。

平助さん所までがやう〳〵だ。おつ母さんがおんさらんと『乳々』といつて、ぐづつたり泣いたりして困らせるし、始終、はなを出してゐる。それでも割合とかしこい中だ。思つてゐたのに、その子は、はななんか出してゐないし、おつ母さんの首巻らしいのを巻いて、ぬくとさうにして、足はこびが早いし、誰が聞いてもよくわかるし、あんなかしこい子はさうないと思つた。學校へ來てからも、みんなに話をして驚かしてやつた。所が今度は畫辨當を食ひにいつたかへりに、又その子があめをねぶりねぶり東の方からやつてきたので『はあ六條へいつてきたのかな。』と聞いて見ると、『ほん。』といつてうなづく。又良雄君が『おばあにあめもらつてきたのか。』と言ふと『なあにその菓子屋で買つてきたの。』といふ。大さん所で自分に買つてきたらしい。益々おどろいて『お

くしがたの月がでた
汽車はほんとにさびしかろ
汽車ががうがうなりたした
あの汽車どこへゆくぶでせう
評、山國の大きな景色。（牧水）

雪と正月（賞）

岐阜縣稻葉郡本荘校尋六　加藤藤三

雪ふりといへば
正月を思ふ
正月といへば
雪ふりを思ふ
評、さつぱりとよく出來ました。（牧水）

雨戸

愛知縣丹羽郡岩倉校尋五　櫻井安一

私は雨戸で
ございます
外の様子を
しつてます
どんなことでも
しつてます
夜のさびしさ
しつてます
朝のさむさも
しつてます
評、でも内の事は知らないだらう。（牧水）

とり

和歌山縣日高郡南谷校尋三　三中ナツヱ

とりさんとりさん
もみをかきちらさんとたべやんせ
あんぜうかしこまつてたべやんせ
とりはたべんとにけてしもた
こけこけとにけていてしもた
評、あんぜうよう出來ました。（牧水）

小やね

山梨縣北巨摩郡小淵澤校尋四　名執享子

やねの上に、
小やねが一つ。
小やねは何、
けぶ出し小やね
評、白い煙が出てゐる。（牧水）

クリスマス

東京市小石川區西江戸川町九　湊守

お父さんの
白いおひげが
ばあに一錢もらつてきたのかなあ。』と僕が聞くと『ほん。』といつて、ねぶりながら又ちよろ〳〵行つた。やはり暖かさにくびまきを卷いてゐる。はなどちつともだしてゐなかつた。

兵隊さん（賞）

岐阜市佐久間町川端　柴田美緒

『觀音さんに騎兵がとまつてゐて見にいかんか。』と僕は弟をさそつて觀音さんへ出かけた。敷石の両方には馬小屋がたくさんならんでゐた。中にゐる馬はみんな面白さうに自分のうちのかべをけつてゐた。『あゝもけると足がをれちまう。』と弟は心配さうにいつてゐた。『そんなことあれせん。痛ないやうに金がうつたる。』と教へてやつたら『ふん』と弟はおもしろさうに笑つた。『向ふの兵隊さんを見てて。』といつたから『よし』と云つて仁王門のとこへ來た。そこには腕に布を卷いた人が大きなお釜に御飯をたいてゐた。

そのお釜が十も十五もならんでゐるから僕は『こんだけの御飯をどうしてたべるの。』とひけもちやの人に聞いて見たら『どうしてもあるもんかい。口から入れるんさ。』と言つてアハヽヽと笑つた。『何斗位あるの。』と聞いてやつたら、『釜一つが八升ちやで、釜の

栗原先生（賞）　千葉縣東金校尋五　小安三平

かすにかけてみい。』と笑つてゐた。そして横の馬の足のかねを打つてゐる人に、『まあ、たけたからみんなに知らせてやつてもえゝぞ。』といつてから割木のもえさしにシユウと水をかけた。そして僕に向つて『この割木をもつてけ。かあちやんが喜ぶぜ。』と言つたから僕は『知らん知らん。』と舌出してやつたら又アハヽヽハと笑つた。『おぢさん、今夜はこゝでねるの。』ときいたら『ふんねるんさ。』『そんなら露營やな。』『うん、ようしつとるな。』とウフヽヽと笑つてゐた。『あそこに露營しとるで見てきた。』とあごでをしいてくれた。そこへいつたら、松の木にうまいこと竹をしばりつけて、布で天幕を作つてゐた。

中では大勢の兵隊さんが、がやがやいつて押し合ひ目白をやつてゐた。『まあかいろ』と弟がいゝだしたから、まんだ見てたかつたが『よし』と云つて前の兵隊さんの前まできたら『おゝ坊がゐるか、よーさ（夜）になつたらこいよ。燒芋をやるからなあ』と云つた。弟は『ありがと』『とちよこんとおじぎしたら『えらい、えらい。』と頭をなぜるまねをしてくれた。僕も兵隊さんにさよならして家へかつた。

錢湯（賞）

埼玉縣南尋常小學校尋六　近藤浩

『ガラリ、』と硝子戸を開けて僕は湯屋へ這入いた。今日はいつもと違つて大ぶすいて居る。風呂の中には三人、流しには四五人でらく〳〵と湯の中に沈むことが出來た。其の中一人出、二人出、段々に出て後には僕一人になつた。僕は湯の中で一人がんばつて居た。一人になつたら何だか變な臭ひがするので四方を見廻すと張札があつた。見るとすぐ分つた。『今日は藥湯なのだな。』と。又沈むと僕の後に大きな藥の這入つた袋があつた。背中の後から熱い湯が出て來て僕の前を通つて行つた。『あ、あちー。』と言ひながらすぐに水口をひねつた。丁度よくなつたので湯の中から流しを眺めて居た。風呂の側に陣取つてをけをさかさまにして其の上に腰を下して兩手で額をさゝへて居る老人が居た。口もとに小さなこぶがある。

さつきからちつとも動かないで目をつ

今夜は
尊とく見えました。
評、お行儀をよくしたでせう。（牧水）

秋の夜

香川縣木田郡水田校尋五　宮武サダ子

さぶしい秋の
三日月よ
私がおこつたら
三日月も
おこつてる
私が笑つたら
三日月も
笑つてゐた
評、初めの二句が大へんいゝ。（牧水）

げた屋のおぢさん

不明　岡崎須榮子

けたやのおぢさん
くぎ箱ひつくりかへして
大きな磁石で
くぎを
集めてる
評、よほど年寄のげた屋でせう。（牧水）

むつて居る。湯の中へ一人這入つて來た。僕は出て洗ひ始めたが彼の老人はまだ動かうともしない。洗ひ終つて中へ這入ると、老人もやうやく腰をかゞめながら這入つた。老人は湯の中でねんぶつの樣なことを言つて居たが『いゝ湯だ』と又言つた。もうこんで來てしまつていつの間にか僕は風呂のすみへ來てしまつた。

叔母樣のお土産

奈良市奈良第二尋高校尋六　新谷吉野

二三日前、叔母樣の手紙に、今日着くとあつた。私はうれしい胸をおさへながら學校に來たが、御土産は何だらうかと算術の時間になつても頭から離れなかつた。『只今！』と、元氣のよい聲を後に殘して座敷にいくと、お母樣と叔母樣との笑聲がもれてくる。

『あゝ吉野ちやんなの、大そう大きくなつたのね。』と云ひながらバスケットの中から何だか大きい包を出して話して居られる。私は開け樣かゝと思つたけれども、大きくなつて行儀知らずだなどとおかへりになつてから言はれるといけないからと思つて辛抱してゐると、お母さんが『吉野ちやん、よいものをもらつたのねい。あけてごらん。』と言はれた

ヘイタイ（賞）　埼玉縣川越町下松江町　近藤克

風

香川縣木田郡水田校尋五　堀綾子

風が吹いてきた
座敷の眞中に
木の葉が
落ちて來た

雪

愛知縣海部郡西部校尋六　吉田義久

秋の夕暮
雪が西へ集る
山の雲光る

ゆき

岐阜縣稻葉郡本莊校尋六　松波由一

とたんの上の
ゆきがひかる
赤ん坊がなく。

雪

岐阜縣稻葉郡本莊校尋六　杉木藤一

雪の上へあられが
落ちてキラ〳〵

花瓶（賞）　小石川區西江戸川町九　湊守一

朝の學校

香川縣木田郡水田小學校尋五　森川恒彦

まだ皆が來てゐないだらうと思つて學校の門を入つた。廣い運動場はひつそりとしてボブラの葉が五六枚散つてゐた。僕は小便をして教室の前の石だんを二つ三つ上り、足音高くしながら廊下をあるいてガラス戸をあけると、ガラス戸は大きな音を立てゝがらがらと開いた。僕は教室の中へ入つて音高く机のふたを取つて本や帳面をしまつてゐると、理科室の方でけたたましくガラス戸のあく音がした。『はつ』として廊下へ出て見ると、それは學校の小使のおばあさんであつた。又教室へ入つてしまひさしの本をしまつて出て廣い運動場で一人ぎり遊んでゐると第二學年の植田君が來たので、二人で遊んでゐる中に時間がたつて、大ぜいの生徒が來たので皆んなで面白く遊んだ。

夕方

光つてゐる。

ヂヤンケンボン

麻布區笄町 笄校尋六　堀　孝三

磯の日向のヂヤンケンボン
うにがこぶしの石出して
ひとでのかみにまけちやつた
そこへかにめがとび出して
赤いはさみでちよと勝つた

わらすぐり

愛知郡丹羽郡 岩倉校尋五　大橋　市

さつくり　さつくり
わらすぐり
てんぴんぼうにぶつつけて
さつくり　さつくり
わらすぐり

馬

山梨縣北巨摩郡 村山西校高一　古屋いさを

おぢいさんに
たゝかれて
しほれた顔して
鼻もくはない。

ゆづの木

山梨縣北巨摩郡 村山西校高一　山本つる代

こんもりしたゆづの木
風も通さないゆづの木
ゆづの香が鼻をつく。

お家

香川縣木田郡 水田校尋五　國方　勇

二階造の家
僕の方を向つて
立つてゐる

牛

愛知縣海部郡 西部校尋六　安井初清

牛に石を投げた
牛がおこつてゆく

牛小屋

香川縣木田郡 水田校高一　大熊又平

まどから牛小屋を
のぞいたら
牛は居らず
寒い風が吹き
通して居る

雪のあさ

不明　柳谷のぶ

愛媛縣越智郡 岡校尋高校尋六　横田壽江子

『姉さん、時ちやんをおはして下さい。』
『おほてくれるかな。』

姉さんはかう言ひながらおはせて下さつた。時ちやんとは大の仲よしであるのに、どうしたのか私の背に來ると、手を動かせたり足をはねたりして何だか都合惡さうにしてゐたが、やがてくす〳〵と泣きはじめた。色々と工夫して、時ちやん〳〵なぜなくの

植木（賞）　千葉縣市 金校尋六　高知尾義滿

まだ乳はほしなからう
お星が空に笑つてる、
時ちやん〳〵なぜなくの
あなたのお好なとうちやんが
お土產持つて歸ります。

となんほ歌つてやつても止めない。『これ見い時ちやん、かーらすさんがお家に急いでゐるだらう、お月樣も今に出るから……。』等とまぎらしてもまだ泣きやめん。しかたなしに裏にまはつた。するとちやうどそこへ兄樣がおかへりになつてすぐに時ちやんを下して下さつた。をりから雨戸をたてる音のきれまに姉さんのお顔が見えると、急に時ちやんはぶざけ出した。

雪

横濱本牧 學校尋四　渡邊　敏

空が一めんに曇つて來た。雪が降つて來る。ちら〳〵降つて來る。そして土の上に眞白につもつた。木の枝にも、竹の葉の上にも、へいの上に

すゝきとざくろ（賞）　愛媛縣周桑郡國安村　藤田　猛

もつもる。何所もかしこも眞白につもつて行く。雪の降るのを見て居ると、いそがしいやうだが、なにの音もしない。口をふさいだやうにしづかだ。

寫眞

東京市麻布區笄校尋六　堀　孝三

昨日何氣なしにお母さんの針箱をあけて見ましたら、鋏や絲くすの下からすぐ煤けたやうな色になつてゐる古びた寫眞が一枚出て來ました。肥えた眞丸な顔の赤坊が大きなよだれかけをかけて右の手にがら〳〵を持つてお母さんのひざにのつてゐるのでありました。だれだらうと思つてお母さんにきいて見ますと『それはお前が二歳の時とつたのですよ。』つて。僕は兄さんか、ねえさんかと思つてゐたので、僕だと聞いて何だかきまりが惡くなつて來ました。よく見るとたまげたやうな目つきをして、大きな頭布をかぶつて、ほんたうに赤ん坊でありました。僕はどうしてもこれが僕だとは思はれませんでしたが、又僕もこんなに小さかつたこともあつたかと思ひました。それから僕はこの寫眞を自分の木箱の底にしまひました。

旅行

仙台市大町五丁目尋四　木村　亮

私は三年生の時、先生につれられてある町に旅行しました。町にはひろとすぐおどろいたのは天上にちとゞきさうな煙

ふるふる雪が、
まーしろな雪が、
山のくさはかれる、
かれれば、
かれるほど
雪がふる、
山いつぱいまつしろ
いーぱいにふる

千羽雀

新潟縣中頸城郡妙高校尋六　宮下政男

千羽雀が飛んで來た
みんなかたまつて飛んで來た
千羽雀は團體力が
大へん強い

電車の橋の修繕

香川縣水田校高一　香西文一

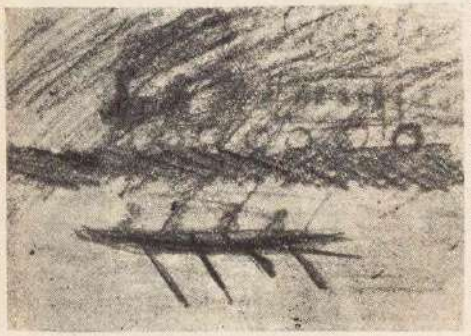
貨車がとまつてゐる
電車が行つて又とまつた
田にもずが飛びたつた

冬

香川縣水田校高一　川元義信

西風が吹く
赤い紅葉の葉がゆるぐ
羽織の袖があいて居る

突が黑い煙をもうくゝと出してゐるのを見た時です。どうしてこんな大きいのをこしらいたんだろ。これをこしらいるきかいがあるんだろかと思ひました。さうしると私の村の板切會社の煙突などはくちべものになるどころか、一寸ほふしと、奈良の大佛さんの樣な氣がしました。其れでも私等村では一番高い煙突なのです



汽車と舟（賞）住所姓名不明

臼引

和歌山縣那賀郡南野上村校高二　石山正夫

『臼屋のあさつて』におどろいた。祭前にこしらへてくれるかと待つて居たが、やうやれうそをだまされた。半月程延びた。あまり待ち遠いので、父さんは一べん頼みに行つたのだ。いよくゝ翌日は來るらしい。『こんどはほんまかへな。』と、思ひながら學校からかへつて來たら、ばんばんぱん音がして居る。あゝ臼屋が來てくれたらしい。にはに道具をおいて居た。一日でしまつたらしい。父さんから錢をもらつて臼屋がかへつた。

臼をこしらへてから八日目臼引をした僕もてつだつた。『よーまへよ。うす。』と歌ひ出した。歌と一しよに、臼もごろごろ歌ふて居る。『一服休もらえ。』父の聲がした。僕も休んだが、一べん一人引いて見たいと思つて、もみを入れて引くと、兄が『臼引いたらみぢつてまうど。』と一言のもとにはねつけられた。夕方になつて引き終つた。誰の肩を見てもはしかだらけで今にもはしかが落ちさうだつた。

講演部の報告

鎌倉から京都まで

講師　沖野岩三郎

△昨年末十二月二十四日には、鎌倉の師範學校で、鎌倉の民衆美術協會の發起で子供さん達の忘年會が開かれました。講師は私一人で、鈴木醫之進氏のピアノ獨奏と、藤井夏人氏の獨唱とがありました主會者は美術家の有田四郎氏でした。三百人近い入場者で、誠にしんみりした、いゝ集會でした。遠く逗子町の小坪灘からも來れたお方が五六人ありました。

△それから私は、其晩に直ぐ大阪行の急行列車に乘りました。翌朝七時過に大阪驛へ着いて、直ぐ南海鐵道で和歌山へ行きました。恰度其晩は和歌山教會のクリスマスで、廣い會堂には張り裂ける程多勢の來會者がありました。私は『煙突カら入らないサンタクロス。』といふお話を致しました。翌、廿六日は野口先生が童謠で『船は帆かけて、四國へ渡る』と謠はれた和歌の浦の米榮別莊へ行つて友人の鈴木鎗次郎氏と一日遊びました。

△廿七日には、粉河寺で名高い、同じ紀州の粉河町へ行きました。其所には私の友人の兒玉充次郎氏といふ牧師さんが居ます。其晩は白水座といふ劇場で、クリスマスの大祝會がありました。私は其所で千三百人の來會者に、『變つた贈物』といふお話を致しました。其のあとで兒玉牧師は『花咲爺』といふジャパニイスダンスを踊りました。東京へ歸つてみますと來會者の人達からお禮狀が何通も來てゐました。廿八日には奈良へ行つて、可愛い鹿を見ました。

△廿九日に宇治の平等院を見た序に、京都大學の上林一雄氏をお尋ねしましたが生憎御主人はお留守でした。けれども『金の星』の愛讀者である七人のお子さん達のうち六人までお家でしたから、皆さんから大變歡迎されました。私は宇治橋を渡つて、河岸の『百々家』といふ家で御飯を食べてゐるうちに、上林さんの坊ッちやんの殘りのお一人が、電車の終點まで、私を見送りに來て下すつたさうですが、たうとう會ひませんでした。私は其のお話を上林さんから翌日聞きまして涙ぐましい程嬉しく思ひました。

△卅日には京都の岡崎で一日滯在しまして、卅一日の夜遲く東京へ歸りました。今年は、四國、北海道、仙臺、鶴島などへ頼まれてゐますので、又た大分忙しい事だらうと思ひます。

◇『金の星』は新しい時代の童話と童謠を普及するために講演部を設けてあります。
◇講師は、童話は沖野岩三郎先生、童謠は野口雨情先生が擔任されます。
◇講演御希望の方は金の星社宛に御申込み下さい。出張費用等お問合せのあり次第、御返事いたします。（係り）

春期増大號 グリム童話號豫告

『金の星』は、以と前に創刊一週年記念として「アンデルセン號」を出したことがありました。世界の童話の小父さんアンデルセンが、書き殘した面白い〳〵お話の中から、特に面白いものばかりを選び出して發行いたしました。

それは、雜誌界に未だかつてない試みでありましたから、それは〳〵大層な評判でした。

ところで、世界の童話の小父さんが、もう二人あるのです。それは獨逸のグリム兄弟です。グリム兄弟はアンデルセンよりはもつと有名な位で、お話も澤山に書いた人です。その數が二百以上もあります。

私どもは此のグリム兄弟に敬意を表し、その立派な〳〵仕事を記念するために、こゝに「グリム童話號」を發行いたす事となりました。そして此の四月號(春期增大號)をもつてそれに當ることとなつたのであります。

編輯部一同、今や此の記念すべき仕事のために全力を擧げて努力いたしてをります。どんな美しい、面白い雜誌が出來ますか、しばらく次號までお待ち下さい。

執筆下さる諸先生と、その標題とは、凡そ次の通りであります。

□グリム兄弟の話……中島孤島
□小人と靴屋……楠山正雄
□若き巨男……馬場孤蝶
□題未定……小内山薫
□鳥になつた王妃……岡本歸一
□幸福なハンス……鈴木善太郎
□何でも知つてゐる學者……水谷まさる
□大儲け……中島孤島
□猟……秋庭俊彦
□三本の黃色の髮の毛持つた巨人……霜田史光
□金持と貧乏人……西川勉
□白い蛇……三宅房子
□命の水……齋藤佐次郎

(附記、『金の星』の「グリム童話號」は、グリム兄弟が書いた二百いくつかのお話の中で、あまり世間に知られてゐないで、しかも優れて面白いものばかりを選拔する爲めに非常な苦心をはらひました。)

通信

自由畫選評

山本鼎

△五才の暢君の繪みんな面白い。そのなかでこの繪が一番活き〳〵して居た。

△藤田猛君の「すゝきとざくろ」しっかりして居ていゝ。花瓶の藍がちとなかしい。

△高知尾義滿君の「枯木」大膽で粗暴に流れす物が强く表現されて居ていゝ　たゞ色がいけない　空は何かゞ現されて居ず。たゞクレオンの繪があるだけの事だ。

△湊守一君の「花瓶」骨折った費だ、無難な出來だ。

△近藤克人君の「ヘイタイ」雄健な感じがする雄健な感じの繪をかく習慣といぢけた繪かくの習慣とどっちがいゝか――知れた事です。

△小安三平君の「栗原先生」しっかりしたデッサンに感心する。東金校の繪はすべて活氣に富み、大賛であるが、往々グロテスクであった。此繪などは美然がなくてうれしい。裏に書いてある作者の署名も良い。紙一ぱいに暴れがきしずに、謹んで小さく書いてあるのがうれしい。――栗原先生はだん〳〵かういふ態度の方へ彼れらを導いてくれるのだらうと思って安心する。

幼年詩選後

若山牧水

△數も多くなり、出來も次第によくなった。みないそ〳〵として作ってゐるといふところの見えて來たのがことに嬉しい。今までは大人たちに强ひられて作ってゐるといふところがあって、歌に生氣、活氣が乏しかった。

此頃のは歌のうしろに、てんでに作者の元氣な　が笑ってゐる樣な、いき〳〵した所が見えて來た。

△横森つゆ子さんの「秋」は面白いものだ。憐へないで平氣で歌ってあるなかになかなか細かな觀察もあり感動もある。何より自然なのが嬉しい。田井竹一君の「雪」も佳い。子供でなくては歌へない妙味がある。近い號で推薦するつもりだ。

△寫生を主にしたものと、口調のいゝのを主にしたものとがある。どちらもいゝが、あまりかたよったのはいけない。寫生一方に固くなったのも、たゞべら〳〵と口調のいゝのもいけない。

綴方の選後に

選者

◆**自由畫掲載外佳作**　△きみ子さん(佐藤ゆり子)△夕日のしづむ頃(山田明)△ミミヅク(藤本光雄)△松林(小野遠三郎)△おぢいさん(青島英夫)△らん(鶴爪蓮吾)△僕の學校(山本佐喜知)△夕暮の野原(小澤文夫△風景(平新一)△紅葉(詩田力)△姉さんの編みもの(澤原久三郎)△クラブ(星野和光)△双眼鏡(加藤忠之助)△靜物(戸井田利次郎)△電車の中で見た人(高木しげ子)△水仙(松本君子)△私(梅村登美子)△兄さん(大仁田清)△秋の山(中山厚)△田崎先生(河島英作)△あみもの(加藤茂子)△手(湊守一)△い(大橋宜子)△花(平賀文六)△あんか(岡崎英一)△アヒル(新保文八)△雪の夜(八代秀明)△筆立(堀孝三)△學校の門(佐羽内季郎)△柱時計(高木爽根)△たばこ盆(大鹽洪三)△愛らしいキューピー(清水榮子)△夜のお蔵(松川末子)△塀(牧野忠之)△弟の新ちゃん(作者不明)△伊藤と弟(柴田美緒)△馬(作者不明)△チャビン(澁谷武明)△水車小屋(松本君子)△森と人(若森四津子)△自動車(中野忠武)△ひさし(宮崎富夫)△日の出(柱山訓)△學校の入口(高橋秀四郎)△泣がほ(山田明)△田草取(大野徳藏)△海岸(久保孝三)△えらい人(能島淺太郎△人力車(坂部四郎)△八百やさん(小山操子)△汽車の窓から(光榮春二)

◆**幼年詩掲載外佳作**　△とんぼ(木村庸太郎)△くさのめ(佐藤さき子)△朝(齋藤康信)△雨(岸崎ちよ子)△私の先生(寺島靜子)△ゆめ(石野政吉)△すゝめ(間島隆)△さみしい山(坂本俊信)△本の字(綴方ハルエ)△才宮

◇いゝ作がかなりにあつたので今月は大そうはりあひがありました。毎月應募の數がふへて行くのも樂しみの一つです。さて選評を書くにさきだつて、注意していたゞきたい事は、句讀がない文が多くつて困ることです。せっかくの巧い作品も、文章の切れ目がはっきりしないので、その爲めに意味をとり違へてしまふ事がないとも限らないので隨分心配するのです。これでは お互ひに困ることですから、十分注意して下さい。次に主だった作に就て思った事を記して見ますと、

◇岩川毅さんの「かしこい子供」は一番面白く讀みました。上手な作だと思って感心しました。子供の樣子に就てはあんまりくだ〳〵と書いてはゐないが、それでゐて實にはつきりと浮出るやうに書けたのはなか〳〵巧い。殊にその子が「お母さんの首巻をしてゐた」事に目をつけたのはこの作者の見方が鋭い事を知ります。この事だけで、此のませた少年の姿がはっきりとしました。その子供との會話を書いた處も巧かった。讀んだ後に不思議な少年の姿がはっきりと頭に殘ります。あんまりよく書けてゐるので、何んだかお伽噺に出て來る小人のやうな感じさへした位でした。

◇柴田善雄さんの「兵隊さん」これもよく書けてゐました。生一本でいゝ。書かうと思ふ事にワキ目もふらずぐん〳〵書いて行くところが大變にいゝ。『この割木をもってけ。かあちやんが喜ぶぜ。』といふ兵隊さんが一番よく書けてゐます。

◇近藤浩君の「錢湯」はまぜた、書き方が氣になるが、上手な事は上手だ。湯の中の有樣は申分なく書けてゐますが、年齢の割にはませ過ぎた處がどうも氣になります。

◇よく氣持ちのあらはれた作として新谷吉野さんの「叔母樣のお土產」と前田後一君の「僕の錢入れ」の二つを擧げます。中でも「叔母樣のお土產」の方は作者の氣持ちが思ひ切り出てゐるので感心しました。叔母さんから綺色の冬帽子をもらつて「叔母さんありがたうれしい。」と叫ぶあたりイキもつけないほど作者の氣持ちがよく出てゐます。その帽子をかぶつて公園を歩くと、急にえらくなつたやうな氣がしたといふあたりも、實によく少女らしい氣持ちが出てゐます。これにくらべると、『僕の錢入れ』の方はまだ一と通りしか自分の心持ちをあらはしてゐないので、讀んで見て物足りないところがあります。もう一といき思ひ切って書いて見て下さい。

◇香川縣氷上小學校の作品は、はじめて拜見するやうに思ひますが、どの作もみんな質のいゝものばかりである事を喜びました。一體にあかるい、なだらかな感じを持ってゐるのが、大層氣持ちよく思ひました。だいぶんに面白いと思ふ作がありましたが、澤山とることが出來ないので『朝の學校』一つを選びました。きはだった巧味はないが、すっきりとした氣持ちのよい作です。『廣い運動場はひつそりとしてポプラの葉が五六枚散ってゐた。』と寫してゐるところなど、何んでもないやうだが、靜かな運動場の朝が、はっきりと目に浮んで面白いと思ひました。

◇横田壽江さんの「夕方」渡邊敏さんの「雪」堀孝三さんの「寫眞」木村亮さんの「旅行」毛利治

賢さんの「うちのおぢいさん」など何れも相當の出來榮えでした。（齊藤生）

童話の選後に

齋藤佐次郎

△今月も相當の成績を擧げました。さして出色ある作も見當りませんでしたが、かなりに面白味のあるものは隨分ありました。追々に從來の童話の型を破って、個性を發揮した新味あるものが現れて來ることは、まことに喜しいことです。どうか今後はもつと〳〵かうした努力が思ひ切り發揮されて行くのを見たいものです。いつまでたつても童話の標準が進歩しないようでは困りますから。（但し、誤解のないやうに願ひたいのは童話の標準が高まるといふことは難しい童話を書くといふことではないのですから、誤解してもらつては困ります。子供にわからないやうな內容のものを童話と銘を打つたのをすぐぶん受けますが、あれが童話の標準の高まつたことだと思はれては大間違ひです。眞に進歩した童話は我もわかり易いものであるべき筈です。）

△さて、佳作といはれるべき作のうち、次の諸作は最も目につきました。

江口雄一郎氏「犬の鼻猫の目」「雀の兄妹」相澤壽氏「山の兎と里の兎」土橋力氏「頓作」永橋卓介氏「死藥」牧野忠之氏「小鬼になつた成吉」高塚正規氏「狐にばかされた八百屋」神戸千鶴枝氏「百日草とコスモス」著。ところでこれ等の作について感じたことを少しばかり書いて見ますと。△江口氏の二作は共に倒れないだけの重味があります。「雀の兄妹」の方が成功でした。すつきりとして藝術味があつて、可愛いゝ感じのする作品です。「犬の鼻猫の目」の方は着想も形式も古い氣がします。もう少し新味がほしかつたと思ひます。そこへ行くと、相澤氏の「山の兎里の兎」には相當新味を見出すことが出來ました。單純過ぎるほどの話ですが、話しのはこび方にも型を破つた自由さがあつて、伸びやかな感じがしていゝ印象を受けました。作意の深味もかなりに見受けられますが、おしまひの方で山の兎と里の兎がお互ひに奬遇へて別れて行くところだけで、その後が

湯ケ原で　小島政二郎先生

どうなつたかを書かずに終らせてありますが大人の讀者にはこれが却つて餘韻があつて寧ろ書かない方が成功ですが、子供の讀者にはあの後が讀みたかつたに相違ないと思ふのです。御一考を求めます。

△高塚正規氏の「狐に化された八百屋」はよくある話で、これに似た話を「金の星」誌上で掲載したこともありますが、しかし、それは兎に角として此の作の素朴な書き方が大變に

△沖野岩三郎先生の『父戀し』は出版後十日間に忽ち全部を賣り盡し、再版を早速にこしらへましたが、それも忽ちに賣りつくしてしまつて、遂に三版を發賣するにいたりました。實にその賣行きのいゝのに驚いてゐる有樣です。もつとも、作者が沖野先生で、しかもあだけの美しい厚い本を僅かに一圓で賣出したので、出版界で驚いた位ですから、此の結果を得たのも當然かも知れません。

△野口雨情先生の『童話十篇』は最早製本にかかつてをりますから、此の雜誌が皆樣のお手に入る頃には出版になつてゐる筈です。何いかつたと思ひます。生き〳〵としてゐました。從つて話の全體が生きてゐました。

△土橋さんの「頓作」は例によつて手に入つたもので確定性もあり面白い事もたしかに面白いものです。しかし、澤山書かれてゐる內にいつか樂すぎて、あまり筆が自由に辷りすぎる餘ひがありはしないかと思ひます。いつかたせ野口先生の苦心の名著だけに出版前からやんやといふ好評を受けてをります。

△金の星童謠曲譜集は第三集の『青い空』からこれまでと少し計畫を變へまして、伴奏なしの集と伴奏附の集とを同時に出すことになりました。定價も伴奏なしの方は三十錢、伴奏附八十錢の豫定です。從つて第一輯の『人買船』と第二輯の『一つお星さん』も同じやうにこれからは伴奏附と伴奏なしのもの二種をつくります。尙出版部では外にいろ〳〵面白い本を計畫をしてをりますから、何れその內は皆樣に申上げます。

△荒木傳さんの「犬と猫が仲の惡くなつた話」や牧野さんの「小鬼になつた成吉」神戸さんの「百日草とコスモス」等はなか〳〵に面白いところがありますが、これ等は少年少女の自作童話といつていゝものでせうから獎賞募集の方でくはしい感想を述べることにします。

◇金の星出版部より◇

＝最新の出版に就て＝

△蒲原ケ原で　小島政二郎先生

△佐藤浩一〉△喜多益む（神谷久代）△悲しき兄弟（篠崎嘉吉）△こはい夜（河內與一郎）△試驗（木城誠一）△かくれんぼ（木村亮）△密柑（井上數一）△學校に行く道（中谷榮一）△炬燵（山田豐）△果菓子（永島龍雄）△中學校から歸り道（阿部早子）△犬（下村武男）△父こいし（渡部房子）△梅の實（西倉進）△小さな勳功者（高橋久藏）△かとみ（津留濤雄）△ゆめ（松波由一）△くやしい（新谷吉男）△思ひ出（神內ミエ）△雀（星野　吉）△昨日の夕方（鹽井美智代）△嬉しい胸（美津子）△れむれない一夜（松崎宗三）△僕の目（津留二郎）△猫（榊田三良）△瀨戸物屋（中山喜助）△寒い朝（土屋良治）△ある朝（前田提文）

◆童話佳作　◇大人篇

△雀の兄妹（江口雄一郎）△山の兎と里の兎（相澤壽）△頓作（土橋力）△狐にばかされた八百屋（高塚正規）△死藥（永橋卓介）△助けの神（富岡登久四郎）△なまけ村の人たち（島田忠夫）△神代の富士山（三上なみ子）△ふた道（四山眞一）△雁子さんと死（宍戸秀山）△おいのり（持田清志）△二人のお百姓（山崎とほる）△山の話（吹田國二）△王樗と蚤と、對話（杉村廣治）△夢なさがす王女（菊池千代子）△白くて赤い花（井上鶴一）△トルコの馬（氏家健二）△木の葉身の上話（伊原蝶子）△れむすみの新年宴會（金日一雄）△棒太物語（吹屋紅治）△赤い國（加田山日染）○子供篇　一しづくのなみだ（青野きみ子）△お母樣の生れた町（喜田謙一）△星のお伽ひ（武藤巷子）△小さな大きい話（佐藤龍之介）△ショールの惡しみ（吉田いと子）△私の人形（岩田良子）△床屋あかとみ（新川義一）△悲しさ（佐藤浩一）△喜多益む（神谷久代）△悲しき兄弟（篠崎嘉吉）△こはい夜（河內與一郎）△試驗（木城誠一）△かくれんぼ（木村亮）△密柑（井上數一）△學校に行く道（中谷榮一）△炬燵（山田豐）△果菓子（永島龍雄）△中學校から歸り道（阿部早子）△犬（下村武男）△父こいし（渡部房子）△梅の實（西倉進）△小さな勳功者（高橋久藏）△かとみ（津留濤雄）△ゆめ（松波由一）△くやしい（新谷吉男）△思ひ出（神內ミエ）△雀（星野　吉）△昨日の夕方（鹽井美智代）△れむれない一夜（松崎宗三）△僕の目（津留二郎）△猫（榊田三良）△瀨戸物屋（中山喜助）△寒い朝（土屋良治）△ある朝（前田提文）

◆童話佳作　◇大人篇

△ポプラ（西牧彥太郎）△雪の日（篠田秀雄）△時計（皆川四代吉）△三日月さん（寺村幸夫）△川邊の火（馬淵歌島）△雀（竹內竹子）△地藏さん（小山眞）△夜道（光田美虹）△はしご段の上（川瀨作太郎）△雀のお話（岡添信次郎）△赤狐（北村とし）△お寺のかれ（添田德太郎）△夜の街（板垣武男）△大寒小寒（笠間まさゑ）△雪（作田博）△金の星（榎本逸雄）△雀のぢいさう（大槻德治）△木枯（宍戸秀山）△寒い夜（大橋正憲）△三日月さん（清水きよ子）△雪（竹川佐登志）△籠の小鳥（秋葉かれ子）△お目醒あかい（高橋繁子）△おちば（谷井雪一）△雪のふる夜（鴨田忠雄）△子供篇　△もや（田中繁）△みそ走り（田中文八）△あい子ちやん（蒔田力）△ふくれた餅（高知尾義滿）△ねこ（石橋正之）△霞柱（頓賀てう）△いなご（阿部早子）△向ふ（福井竹次郎）△森の日暮（和谷フミ子）△こん〳〵小雪（大塚一也）△お日樣（大畑たつ枝）△風よ吹け（梅本竹子）△光る鳥（山田明）△親なし雀（中山麗秋）△鶴（土屋良治）△からす（田島マスミ）△大正琴（稻葉よしみ）△工夫さん（永濱

◇通信

岡本歸一

國井信一君から二月號の西條さんの西班牙の山賊の挿畫の四頁にある輪と口輪及び七頁にある輪と足が（傷のある）右左になつてゐると御注意を受けました。讀者の中にもお気付かれた方が澤山あると思ひます。私の不注意を御詫びいしておきます。

本號に寫眞がある筈ですが、誌友の川尻東次君が小さい年から童話劇の私淑をやられましたのを拜見に參りましたが、大變面白い御座いました。川尻君は第二回をやると云つてゐます。もし讀者諸君の内で童話劇に趣味を持つてゐられるかたが見に行つて上げたり、助けて上げて下されば、きつと盛んになるでせう。

『金の星』誌友の創作募集

『金の星』は前號で發表いたした通り、毎月機關雜誌として、四六判四倍大の美しい雜誌『小馬』を發行いたします。『小馬』は童話・童謡・自由畫、幼年詩、綴方等兒童創作の研究雜誌であります。

就ては下記の規定に從ひ、特に『金の星』の誌友の方々の創作研究を募集します。どうぞ奮つて面白い作品を御投稿下さい。

□規　定……は凡て『金の星』の創作募集と同樣です。但し原稿には必ず『小馬』原稿とお記し下さい。

□幼年詩……野口　雨情選
□童　謡……岡本　歸一選
□自由畫……
□童　話……齋藤佐次郎選
□綴　方……
□研究論説隨筆……但し童話童謡兒童創作の範圍に限る　編輯部選
□縮　切……一月廿五日

編輯室より

△冬は今が頂上だと見えまして、この頃の寒さつたらありません。東京の街は毎日のやうに武藏野のカラ風が吹きまくります。寒い日とたやつた『といつてびつくりさせられたのですから、今度ゆ『グリム號』が出たら倘更びつくりされることでせう。

△『小馬』はまだ出ない内からすばらしい評判です。誌友の方々の喜ばれようつたらありません。忽ちに誌友が五百名もふえました。

△今年は金の星講演部が大活動をいたしますその計畫はまだ發表する時機でありませんから控へますが、たゞ沖野先生が四國、九州、仙臺、北海道の各地方を大々時に講演して歩かれるといふ事だけを發表いたします。

『金の星』誌友募集

『金の星』の誌友を募集いたします。誌友にはいろ〳〵の特典がございます。先づ第一に童話童話及兒童創作の研究雜誌『小馬』を毎月無代で進呈いたします。そして、誌友に限り『小馬』に投稿の特權があります。尚この外にもいろ〳〵の御便宜がありますから、本社宛に誌友規則書をお申込み下さい。至急にお送り申上げます。

△講演の話が出ましたから、盛んな事の一例として思出した話があるのです。それはつい此の間のことですが、下谷のあるおソバヤさんの表に『本日定期休業。午后一時より童話童謡の會あり。』と出てゐました。おソバヤさんまで童話童謡の會が開かれるやうになつたので、みんなびつくりしてしまひ、その見世先きには黑山のやうに人がたかつてゐました。これは本當のお話です。實はこれを書いてゐる私（記者）もその中の一人だつたのです。

層美しくなり、お話も面白くなつて參ります。

△水島先生が『畫に非常なお力を入れて下さるのも嬉しいことです。今月號の「毛焼きの薩兵衛」の挿畫などはさぞ大評判になることでありませう。

△四月號はいよ〳〵長い間の計畫であつた『グリム號』を出すことになりました。かういふ計畫は外の雜誌でこれまでやつたことがないだけに雜誌界でも非常に驚いて『金の星』の仕事を見てゐます。以前に『アンデルセン號』を出した時でさへ『よくあんな大膽なこと』、殆國の愛讀者の方々のことを思ひます。『實にとざされた暗い部屋で、金の星』を一番の友達として暮してゐます。』といふお便りなどをいただくと、嬉しくつて涙の出るやうな氣がします。と同時に、是非ともいゝ雜誌をこしらへて、皆さんを喜ばせなければならないといふ氣がして勇み立ちます。

△三月號からはめき〳〵と社員一同の努力が目に見えて來たと思ひます。皆樣からお小言をいたゞいてゐた發行日の後れることも漸くなくなつて參りませうしその外見た感じも一

◆父戀し（沖野岩三郎先生著）かつて『金の星』誌上で大喝采をうけた沖野先生の『父戀し』が後篇をそへて一冊になつて出たものです。行方の知れぬお父さんをたづね歩く姉弟の、涙にみちた物語りだけに深い感動をあたへます。たゞ面白いだけの話は澤山にありますが、これほど深い教訓をもつた話はありません。少年少女名作物語り第一篇として最もふさはしいものです。裝幀は岡本歸一先生の苦心になつたものだけに實に氣持ちのよいものです。定價の一圓も驚くべき安價なので出版界に大評判です。（四六判二二四頁、價金壹圓、下谷區上野公園前金の星出版部發行）

◆鼻きゝ（小馬政二郎、久米正雄南先生著）例の新しい童話の第七編として現れたもので「手づま使」「パリの熊騒動」「長くなれ梯子になれ」「ナイル河の河馬」「俵の密柑」「光り王子」「鼻きゝ」の七篇が集められてゐます。いづれもよりぬきの面白いお話だけに是非少年少女の机上に備へたいものばかりです。小島先生の筆と水島爾保布先生の裝幀と相まつて他の童話集の到底及びもつかないいゝ本です。（四六判一七四頁、定價八十五錢、日本橋通四丁目春陽堂發行、振替東京一六七番）

◆ニコニコピンピンの歌（弘田龍太郎氏作曲・岡本歸一先生作歌）

先づ岡本先生の製畫の寄くばかり美しいのに目をひかれます。殊にその表紙黑の地へ青い一枚の葉と小鳥や蝶を表象した三人の少女の畫は近ごろにない美しいものです。弘田氏の快活な作曲は「ニコニコピン〳〵の歌」に於て最も成功してゐます。その外「砂のトンネル」「鬼」の五曲が入つてゐますが、いづれも子供達の氣持ちにぴつたりと合ふ面白いものばかりです（四六倍判二十二頁、定價金壹圓八十錢、神田表神保町東光閣發行振替東一四七九六）

◆小學文藝讀本（山梨縣師範學校附屬小學校編）讀書力のさかんな子供の時代には定められた教科書だけでは到底滿足するものではありません。廣い人生の豫備知識を得るのにはこれまでの教科書以外にもつと自由なそしてもつと面白く讀めるものがなくてはならない筈です。その一つとして現れたのが此の「小學文藝讀本」です。澤柳政太郎、菊地寛兩氏の序文を添へて文壇名家の童話十三篇を集めてあります。（四六判一八七頁、定價八十五錢、神田三崎町二ノ十一邦光堂發行、振替東京五三六〇五）

◆金の星新誌友　○朝鮮　岡村菊堂樣○東京　遠藤玉枝樣○東京　柴田けい子樣○東京　鶴巣チエ子樣○東京　堀耕三樣○大阪　岩田信治樣○長野　吉川正三樣○秋田　深井正治樣○京都　島田蝶子樣○新潟　渡邊五郎一樣○福井　三宅誠樣○群馬　岸甲樣○北海道　二木次雄樣○大阪　藍本美弘樣○熊本　林田三男樣○福岡　豐島孝子樣○岩手　山田一男樣○新潟　白川松魚樣（以下次號）

讀者だより

▼明けましておめでたうございます。金の星社ではさぞかし賑かな新年をお迎へになつたことでせう。けれど鳥取のお正月だつて決してまけやしません。元日は學校で四方拜をすましてから皆が集つて「金の星」の美しい影繪双六やかるたをして、うんと大さわぎをやりました。夜は遊びに疲れしみんながお炬燵へ入つてお話會をいたしました。お話の上手な弟は「金の星」の童話をうまいこと云つて聞かせるんですよ。（中略）野口先生が可愛い可愛い童謡を作つて下さるですもの、本當に今の子供達は幸福です。私はお友達に笑はれ乍らも矢張り「金の星」が離されません。いつも子供等と一しよに野口先生の童謡を唄つたり岡本先生の繪を眞似し合つたりして居ります。もうぢき二月號が來ますわネ。今から樂しんで待つて居ります。では記者樣お大事に、さやうなら。（鳥取　伊谷きよ子）

▼記者樣、お變りありませんか。私は前に「赤い鳥」を讀んでゐましたが童謡たら隨分變なもので――自然「金の星」がすきになりました。「赤い鳥」もいゝですけれど、童謡だけは少し可笑なものです。（東京　添田徳太郎）

▼貴紙の童謡欄に一部二部とあるのはどう云ふ譯ですか。ちよつとおしらせ下さい。正月號の童謡で私は桑原長太郎氏の「お留守居」が一番氣に入りました。それから「小馬」の生れる日を待つて居ります。どんなにか可愛らしい姿でせう。（東京　峰島麗子）

▽つひうつかりお知らせしませんでしたが、一部は大人の欄で二部は子供の欄なのです。矢張りかうしたお問ひが澤山參りますので、この三月號から一部二部の名稱を廢して、大人篇・小供篇と呼びかへることにしました。益々振つて御投書下さい。（一記者）

▼今日は、私のへタな幼年詩に美しい賞品お送り下さいまして誠にありがたうございました。（神戸市小野柄小學校尋四　長田重美）

▼先日は岡本先生の「金の星」エハガキをいただきまして何ともお禮の申上げ樣がありません。自分がふだんから敬愛してゐた先生方を社員とする「金の星」の誌友になれたのかと思ひますと、自分まで急にえらくなつた樣な氣がいたします。（福井縣　松本紘香）

▼記者先生を始め多くの諸君、よろこんで下さい。お正月になつたら、お父さんに「父戀し」を買つて頂けることに定りました。ですから金の星出版部へ必ずお願ひいたしますから賣切れになつてもいゝやうに私のだけ特別に一冊とつて置いて下さい。それからも一つお願ひ。それは岡本先生の「金の星ゑばがき集」と云ふやうな本を發行して下さい。金の星出版部の御はつてんをいのります。（A.Y生）

▽大へんうれしさうでございますネ。ちやんと一冊荷造りをしてとつてありますから御安心下さい。岡本先生の御本もそのうち綺麗に印刷して發　いたします。（出版部係）

▼私は子供を無慈に愛します。子供程尊いものはありません。私から子供を離して私の生活はありません。子供の生活はそれ自身詩であり、藝術であります。その清純なる子供の魂に囁く最もふさはしい雜誌として私は「金の星」と「赤い鳥」を推奨致します。私の可愛い子等は「金の星」の來るのをいつも待つて居ります。只今は私と子供等の大好きな岡本先生の「金の星エハガキ」をお送り下さいまして誠に有難うございました。心から御禮申し上げます。　朝鮮江原道春川小學校　高橋勇三郎）

▼記者先生、まづ明けましておめでたうございます。「金の星」は年がたつのにつれて美しくなりますのね。うれしいわ先生。一月號の表紙は詩的にいゝのね。私氣に入つちやつたわ。またあの樣なのを描いて下さいね。どうして岡本先生は可愛いお繪がかけるでせう。私悲觀したことがあるんです。童謡を投書したのですけど入選しないんですもの。でもいいわ。始めてですもの仕方がないですね。私もつと〳〵投書したいのですけど何分にも二月に「豫備科の試驗」といふコワがあるので出來ないのです。入學出來る樣おいのり下さいね。きつときつと。（東京　山下愛子）

▽それは一大事、早速「星の御殿」と「夢の御殿」へ「天使を差向けておいのりをいたさせませう。「愛子姫目出度く御入學遊ばすやうに。ナムマイダ、ナムマイダ、アーメン」（一記者）

▲今春、早々から童謡、童話の研究誌「ペンペン草」を刊行して行きたう存じます。年題に

のぞみまして、御愛心に御研究下さる皆樣の御援助を仰ぎたく所々準備いたして居ります。（本所區大平町一ノ二八　島田信一）

▼毎年の樣に太陽の顔を出さない冬の世界。北國の雪の中に居る私達は「金の星」が唯一の友であり、太陽であります（秋田市大森正憲）

▼光ある幸なる年を皆樣お揃ひでお迎へ遊ばしたことをお喜び申し上げます。温かな南國の浦から今年も更らに「金の星」の輝かしく光る年であることをおいのり申し上げます。（三重縣本本町　宮原しげる）

▼正月號は今迄にない秀れた號であつたことをお喜び申します。双六もなか〳〵よく出來て居ます。社名の變更「小馬」の創刊、みな「金の星」の躍進を物語るものです。妹の自由畫が當選して發表されてゐたことも喜びの一つです。妹が嬉入りをする時にもう一度見せてやるつもりです。家ぢゅうで大へんに喜んで居ります。特に近頃、幼年詩の發展はすばらしいものです。三文詩人の下手な童謡などよりはどの位いゝかしれません。野口先生の「名所めぐり童謡」は「金の星」獨創のものと信じます。次に愚評を少し、

○椿樂と大狗、面白い空想の洗練されたもの

○お山の爺さん、上品な童話　○鹿馬と釣鐘、面白く書いてある滝石は大家○順禮の願ひ、美しい水彩畫を見てゐるやう○水滸傳、宮島先生も名高い豪傑適材適所か○李如松の話、沖野先生得意の新鮮童話。（大阪　都外川淳）

▼記者君、君はなか〳〵よい人だ。（はんたいから）なぜと云へば僕が一しよけんめいで書いた投書をボツにするから。僕は毎月「金の星」誌友の集り「竹内會」は一月十七日、京市外日黒、目の出女學校講堂で童話劇の會を開きました。寫眞は『魔法の指輪』の一場面です。

▼あけまして御めでたう存じます。本年もあ

「金の星」誌友の集り「竹内會」は一月十七日、京市外日黒、目の出女學校講堂で童話劇の會を開きました。寫眞は『魔法の指輪』の一場面です。

届いの來るのを待ちかまへて居て、いちばんさき讀む童謡自由畫など僕がのつて居ろかと見て、のつて居ないと「又か、つまらないな」とためいきをつくんです。ひどい記者君だ。僕の心中をさつして下さい。（長野　島田生）

び變らず美しい、金の星にもお見せ下さいました諸先生へよろしく。（日本橋　粗山ふじ子）

▼いつもながら岡本先生の表紙の美しいのには驚きます。全く「金の星」の誇りです。「太郎若次郎若」は夜、火鉢にあたりながら泣いて讀みました。ほんたうに悲しいお話でした。野口先生の「名所めぐり童謡」はいつまでも永く續けて下さい。それから「童謡十講」はいつ頃出來るのですか。待遠しくつてたまりません。お願ひですから早く發行して下さい。（淺草　松井秋雨）

▽何んのかのと遲れてどうも相濟みません。日夜、最大馬力の印刷機にかけて印刷を急いで居りますから、おそくも二月中旬迄には美しい本になつて本　の店頭へ出ることになつて居ります。（出版部係）

▼記者先生、私は「金の星」を愛讀し始めてから一年偉りになります。お蔭樣で私は文學の道に長足の進歩を致しました。これ程よい少年文學雜誌は日本に二つとないことを斷言して、こゝに心の底から感謝いたします。今後も益々御指導下さい。（福井縣、菅原一夫）

▼私は二月號で水島先生の畫を見て思はずスチキだと絶叫した。實にいゝ。殊に「狸の財布」の挿畫が氣に入つた。「金の星」はいつもいゝ畫家をさがして來るので感心してしまふ。岡本先生といひ水島先生といひ本當に童話と童謡との挿畫にはもつて來いの人だ。岡本先生の「狐の裁判」の挿畫は今月での見もの。だつた。動物がみんな生きてゐるやうに活躍してゐる。しかし、表紙の「冬も樂し」はいつもの程でなかつた。（東京　小田静一）

童謠の寶典出づ

童謠十講

野口雨情先生新著

◇四六判箱入美本
◇送料十四錢
◇定價壹圓八拾錢

◆お待ち兼ねの野口雨情先生の『童謠十講』が出來ました。本書はわが國童謠界の最高權威、野口雨情先生が多年の研究を傾けつくした名著であります。

◆現代の童謠から說き起して、童謠の歷史的變遷、正風童謠、童謠敎育、鄕土童謠等に及び、童謠創作上の注意、藝術的童謠の見分け方等に至るまで、一々實例を擧げて、丁寧懇切に論じてあります。

◆一たび本書を手にすれば、何人でも童謠の全體に就てあきぬく知る事が出來、直にその眞髓を體得することが出來ます。

◆童謠研究者の座右には是非なくてならない寶典であります。

東京 上野公園 下谷前 金の星出版部 振替 東京六六一七 下谷六八二〇 電話 一三三番

懸賞創作募集

◆少年少女の創作◆

自由畫……山本鼎先生選
幼年詩……若山牧水先生選
綴方……編輯部選

〔注意〕課題は何でもかまひません。諸君の日々見たり、感じたりしたことや諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は、學校や學年（または住所と年齢）とともにおとさないやうにしてください。用紙は自由畫はなるたけ畫用紙に、幼年詩や綴方はなるたけ原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出來た方には『金の星』特製の賞品を差上げます。次號締切は二月廿八日　その以後は次號へ廻る。發表は五月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の星社。

◆一般讀者の創作◆

童話……齋藤佐次郎先生選
童謠……野口雨情先生選

〔注意〕童話は二十字詰二百字以內、童謠は十五行以內、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謠には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謠には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價　壹册　參拾錢　送料　壹錢
三ケ月分三册（送料共）九拾錢
半年分六册（送料共）壹圓八拾錢
壹ケ年分十二册（送料共）參圓八十錢
但し四月號九月號は特別號で卅五錢新年號は四十錢ですから、御註文の節はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい

振替口座東京五九五九六番

〔送金〕▽御註文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は振替が一番便利で御座います
▽切手代用は壹錢切手）一割增しです

〔注意〕▽第何卷第何號よりと書いてください
▽住所姓名ははつきり書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十二年二月六日印刷納本（毎月一回）
大正十二年三月一日發行（一日發行）

東京市外田端三百五十一番地
編輯兼發行人　齋藤佐次郎
東京市小石川久堅町百八番地
印刷人　大橋光吉
東京市小石川久堅町百八番地
印刷所　株式會社博文館印刷所
東京市外田端三百五十一番地
發行所　金の星社
振替口座東京五九五九六番
電話小石川五三八七番

ほるぷ出版複刻版'83

チヨンの話

沖野岩三郎先生作　◇岡本歸一先生裝畫

長篇物語

父戀し

初版再版忽ち賣切れ、遂に三版が發賣されました。少年少女名作物語りの第一篇として賣出されたる『父戀し』は全く飛ぶやうな賣れ行きです。

定價壹圓
◇錢十料送◇
◇本美人箱判六四◇

金の星童謠曲譜集

◆本居長世先生作曲
野口雨情先生作謠
岡本歸一先生裝幀

各冊六曲入り
定價金六十錢
送料四錢

第一輯
人買ひ船
再版

第二輯
一つお星さん
再版

東京下谷上野公園前　金の星出版部　振替東京一六六八　電話下谷六二三　一〇七番

山の上には大きな鈍栗の樹がありました。ヽヽヽはお正午前にそこへ行つて待つてゐますと、山奥から年寄の法性院は二十二疋の猿を伴れて來ました。

『ヤア、ヽヽヽさま、御苦勞でした。今日はあなたのおッ母さんの妹を伴れて來ましたよ。實林院さんの妹御で、吉水院と申すのですか、定めしあなたは御承知ございませんでせうネ。』

法性院はさう言つて年寄の雌猿をヽヽヽに紹介しました。けれども吉水院といふ猿は、きよろ〳〵とヽヽヽを見廻すだけで何にも言はず、小い欠伸をして、白い齒を剝き出して見せました。それは猿の禮式なんです。

『では皆さん、今日から私は人間の事を詳しく敎へてあげます。先づ人間の產れた時から、順序を立てゝお話し申しませう。』

ヽヽヽは一段高い枝に坐つて、さう言ひました。二十三疋の猿は一度に小い欠伸をして、ありつたけの齒齦を見せました。

『人間は產れると直ぐ何町位走りますか。』と一疋の猿が先づ質問しました。すると

ヽヽヽは可笑しさを堪へて、

『僕のゐる家に信次といふ子供が產れたんです。所が、產れた時は、ぎやア〳〵泣くばかりで、ちッとも歩けないんです。多分眼も見えないやうですよ。』と言ひました。

『二日目には走りましたか。』

一番小い小猿が尋ねました。

『どうして〳〵信次の產れたのは雪の降る日でしたが、花が咲いても、暑い夏が來ても、柿や栗が實つても、木枯しが吹いても、又た二度目の雪が降つても、まだ歩けなかつたのです。』

『ではぢッとして寢てゐるんですか。』

『いゝえ、初のうちは寢てゐるが、暑くなつた頃から、丁度吾々と同じやうに、四つの手で這ひ歩きますよ。』

『猿に似てゐるだらうネ。』

『さうです。這ふ間は吾々によく肖てゐるが、立つて歩くやうになると、もう人間ら

しくなつて可愛くなりますよ。』

『あの變てこな着物を着るんだらうネ。』

『さうです。着物を着て、いつもべそ〳〵泣いてばかり居るんですよ。』

『泣く？　何が悲しくッて泣くんだらう？　おッ母さんでも死んだのかい？』

『否エ、人間といふのは不思議な動物で、子供の時は泣いてばかり居るんです。それは煩い程泣いてゐますよ。』

『僕なんか、産れて唯の一度も泣いた事はありやアしない。』とチョンの頭の上にゐた小猿は申しました。いつの間にか其の小猿はチョン先生の頭の上の枝に登つてゐたのです。

『嘘を吐け、お前はこの間瀧の上の樫の木から落ッこッて、頭を岩角にぶッつけた時随分泣いたぢやないか。たしかに三粒か四粒涙がこぼれたよ。』

法性院は小猿を見上げながら言ひました。すると小猿は、

『あの時は格別ですよ。僕が危いといふのに、法性院の小父さんが大丈夫だといふから、僕はあの枯枝を撫んだのだもの。所が枯枝がぽッきり折れて、僕はひどく耳ん所を撲つたんですもの。』小猿は耳の上の傷を撫でながら言ひました。

『それが修業といふもんだ。少くとも十回は枝から落ちてみねば、木登りの上手にはなれないよ。それから一度は水へも落ちて見ねばいけない。』

法性院は顎のところを撫で廻しながら言ひました。

『修業といへば、人間にも修業があるんですか。』

吉水院の伯母は始めて物を言ひました。

『人間はネ、産れてから六歳七歳までは、泣いてばかりゐるが、七歳頃から學校といふ所へ修業に出るんです。』

『木の枝から落ッこちたり、川へ沈んだりするんですか。』

小猿はチョンの頭の上の枝の皮をばり〳〵引ッ掻きながら問ひました。

チョンは首に落ちて來る木の皮を拂ひながら、

『違ひますよ。僕の家の信次が、與兵衛爺さんに伴れられてその學校へ行き初めた日

から、僕は爺さんの肩駒に乗つて、毎日學校へ行つてみました。人間はネ、修業の始めに字を習ふんですよ。字を……』と得意げに言ひました。

『字て何だい？　枝から枝へ宙返りでもする事かい？』

法性院は不思議さうに問ひました。

『違ひます。字といふのはネ、曲つたり、くねつたりする線を板の上や紙の上へ書くんです。何でもその字を見ると、人間の身體の中から聲が出るやうです。』

『さうか、聲の出る巢だナ。僕も此間聲が聞ないので、栗の實を鍋鼎に挿を取つて食べたら、すツかり治つちやつた。字といふのは栗の實のやうなものだネ。』

若い元氣さうな雄猿は、喉の所を撫でながら申しました。

『さうでもないが、兎に角字を書いては、直ぐ何とかかんとか、大きな聲を出すんだよ。』

『どんな聲を出しますか。』

『一番最初にア……と云ひました。アといふ字はこんなんだよ……。』

ヽヽヽは木の小枝を曲げてアの字の形を造りました。

『その次には？』

『次にはイでした。』と言ひながらチョンは、二本の指でイの字の形を見せました。

『その次は？』

『それから大變だよ。もう何百もあつて、とても覺え切れないんだ。所がネ、四五日前に信次といふ子は、怪しからん事を言つてるたよ。』

『どんな事を？』

法性院は少しく枝の右の方へ寄りながら問ひました。

『信次はネ、大きな聲で、《神は天地の主宰にして人は萬物の靈なり》と喝鳴るんでせう。何の事かと思つて聞いてゐると、與兵衛爺さんが言つてゐたよ。この天地は神樣が造つたので、人間は生きてる者の中で一番偉い者だといふ事だつて、その意味は。』

チョンがさう言つた時、二十三疋の猿は皆な聞捨てにならないと言ふやうに身體を搖ぶりました。

『神樣といふのが、天も地も猿も人も皆な造つたといふ事は別問題として、兎に角人間が總ての生物の中で一番偉いといふのは聞捨てにならない。第一人間はお互ひ、やうに、この寒空に山の中で一晩だつて宿る事も出來ないぢやないか。此間もあの奥の山へ、人間の中の學生とかいふ若い男が三人登つて來て、途に迷うてサ、磁石を出してみたり、時計を出して見たり、いろんな事をしてゐたが、たッた二日で冷たくなつて三人共死んだぢやないか。山の中で二日位迷うて死ぬやうな弱い奴が萬物の靈だなんて、そりやア可笑しいよ。』

法性院は首を掉り〳〵言ひました。

『人間は何間位高い所から飛べるかい？』

瘠せた猿は隣の樅の木から訊きました。

『二間位だネ、それも十人に一人位しか飛べないでせう？』

『蛙だつて五間や十間高い所から飛べるよ。駄目なもんだネ、人間は。』

小猿がさう言つた時、他の猿が、

『しかしネ、チョン君、僕は此間向ふの山路を通つてゐる偉さうな人間を見たよ。その人間はネ、第一足袋なんて不體裁なものは穿いてゐないし、髪だつて蓬々と伸びてゐるし、着物は破れ〳〵になつて、それは立派なものだつたし、顔なんか、殆ど僕達のやうに赭黑くつてネ、生の蕗をむしや〳〵食べてゐたよ。僕はあれが人間の中で一番偉い大將だらうと思つたが、違ひますか。』と問ひました。

チョンは暫く首を傾けて聞いてゐましたが、

『あれか、あれはネ、人間の中の乞食といふんだよ。一番駄目な人間だよ、と言つて笑ひました。

『駄目な人間だッて？』

とその猿は驚いたやうに他の枝へ移りながら言ひました。

『人間はネ、山だとか、畑だとか、柿の木だとか皆な各々に自分の分を決めてるるんだが、あの乞食には家も山も柿の木も

自分のものが無いんだよだから馬鹿にされてるるんだ。』

『それぢやァ人間は吾々を乞食だと云ふんかい。』

『人間はネ、我々を乞食以下に見てるるんだよ。』

樹の根に坐つてるた一疋の猿は、

『そんな話はどうでも宜いぢやないか。人間は人間に勝手な事を言はして置くサ。吾々は吾々で、

《神は天地の主宰にして猿は萬物の靈なり》と言つてゐれば宜いぢやないか。それよりか、もつと面白い話をしてくれ給へ。』と申しました。

『面白い話と言へば、此間ネ、僕ん所へ猿廻しといふのが來たよ。』とチョンは一同を見廻しながら言ひました。

『猿廻しッて何だい？　吾々をぐる〳〵引廻すのかい？』

法性院は憤慨したやうに申しました。

『丁度柿の實の甘い最中でした。僕の家の前で、ポンポロ、ポンポロと太鼓の音がするんでせう？　僕は何だらう？　と思つて見てゐると、人間の背に猿が一疋づつ負さつてゐるぢやないか。僕は嬉しくッて嬉しくッて、いきなり《やァ、君達は何所の產れだい？》と訊いたんです。するとその猿共は、呆れたやうに僕の顏を見てゐたが、人間の家に僕がゐようとは思はなかつたと言つてネ、喜びましたよ。僕とその二疋の猿君とあんまり仲よくするもんだから、猿廻しはその晩僕の家へ宿りましてネ、それから僕は猿芝居を見ましたよ。』

『芝居？　それは全體何の事です。』

法性院は手の甲で眼の緣を撫でました。

『まァ〳〵聞き給へ、雌猿の方の名前が、清姫ッて言ふんだよ。雄猿の方の名前が船頭といふんだよ。何でも清姫といふのが、お友達と走りッこでもして、お友達が日高川といふ川を先に渡つてしまつたんだネ。其所へあとから清姫が走つて來て《もうし、もうし船頭樣、此の川渡してたべ、もうし〳〵船頭樣》ッて頼むが、船頭は先に渡つた清姫のお友達の味方になつて、日高川を渡してやらないのですよ。すると清姫は、ざんぶと川へ跳び込むんです……。』

言ひかけた時、頭の上の枝にゐた小猿は、

『危い！　溺れる〳〵。』と叫びました。

『いや川ぢやないんだ。それは川の眞似をした矢張りこんな土地の上なんだよ。それから川を泳いでゐると、清姫は蛇になるんだ。』

『まァ！　猿が蛇に？』

法性院は不思議で堪らないやうに言ひました。

『本當の蛇ぢやァないんです。假面を被つてゐるんです。』

『假面て何です？』と膏せた猿が尋ねました。

『假面といふのは木で造つたもので、天狗だのお多福だの、蛇だの、鬼だの、といろいろの形になつてゐるんです。それを顔へあてゝ種々の眞似をするんです。それを猿芝居といふんです。』

『あァ、さうか。人間は其の假面を被ると足がひよろ〳〵して歩けないんでせう？』

吉水院は點頭きながら訊きました。

『そんな事はありません。』

『だッて此間、人間のお祭りだと云つて、あの向ふの山の上で多勢集つて笛を吹いたり太鼓を叩いたりした時、顔の赤い男が二三人、山路をひよろ〳〵、ひよろ〳〵しながら歩いて居ましたよ。あれはその假面を被つてゐた人でせう？』

『違ひますよ、あれは酒に醉ッぱらッたんです、酒飲でですよ。』

『酒ッて何です？』

『水のやうなもので、それを飲むと吾々のやうに顔が紅くなるんです。そして足がひよろ〳〵して歩けないんです。』

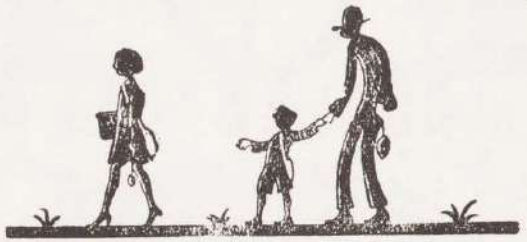
『さう〳〵此の前にそんな話を聞いたッけ。』

と法性院は點頭きました。

『それからその宿り合した猿はどうしました？』

能く肥えた猿は問ひました。

『その二疋はネ、子供の時四國の山で捉まつて人間の所へ伴れて行かれて、隨分難儀をしたさうです。鞭で打たれ通して、そんな詰らない芝居を致へ込まれて、毎日々々同じ事ばかりさせられるが、苦しくッて苦しくッてやり切れないと言つてゐましたよ。其晩はネ、人間の寢たあとで、僕達はいろんな話をしたのサ。四國から來た猿は僕に海の話だの、町の話だのを聞かせて呉れたよ。その猿は母親が東京の淺草といふ所の花屋敷で、矢張り清姫の芝居をしてゐるんだッて泣きながら話してゐたよ。』



春が來ました……

春が來ました、野に山に、さあ打連れて遊びに參りましよう、運動に一番適當なのは洋服であります、小供洋服は四階、帽子、靴は三階に童話や圖書文房具は四階にあります、お買物は三越に限ります

◆三月の定休日◆十日と二十六日です……

三越呉服店

……東京市駿河町……

チョンも悲しさうに俯向きました。

吉水院は退屈したやうに、大きな欠伸をして、

『皆さん、今日はこれだけにして皆なで面白く踊つて歸りませう。』

と言ひました。

『さうしませう。』

と法性院は賛成しました。

それから二十三疋の山猿は、チョンにお禮だと言つて、踊りを始めました。踊といふのは木の枝の上を右に左に自由自在に跳びあるくので、若い小猿などは、ぶらんこ踊が大變上手でした。お終ひに廿三疋が皆な手と手とを繋ぎ合つて長い猿の紐をこしらへて、高い枝の上から、地面の所までぶら下つて、面白い〳〵踊をしました。

『ワン！』

と、何所かで犬の吠える聲か聞えましたので、皆な周章て枝から枝へ、チョンに左樣ならとも言はず、ちり〳〵ばら〳〵になつてしまひました。

B88

『金の星』第五卷第三號　大正十五年三月一日發行　大阪市天王寺區上本町六丁目一番地　金の星社　（定價金三十錢　送料一錢）

国立国会図書館

運動とライオン水齒磨！

運動の前後には、きつとライオン水齒磨でうがひをなさい。運動が活潑に出來て、運動後の氣持も非常によろしい。それゆゑ體が丈夫になり、頭腦がはつきりして、學校もよく出來るやうになります。